

# 奇譚クラス

1962

懸賞原稿  
応募作品

『マニと忍』近藤一



4月号

奇譚クラス

KITAN CLUB

4

昭和三十三年三月二十日印刷 昭和三十三年四月一日発行 第四号 毎月一回一日発行 昭和三十三年四月二十日第三種郵便物認可 昭和三十三年四月二十日第三種郵便物認可 昭和三十三年四月二十日第三種郵便物認可

定価二百円

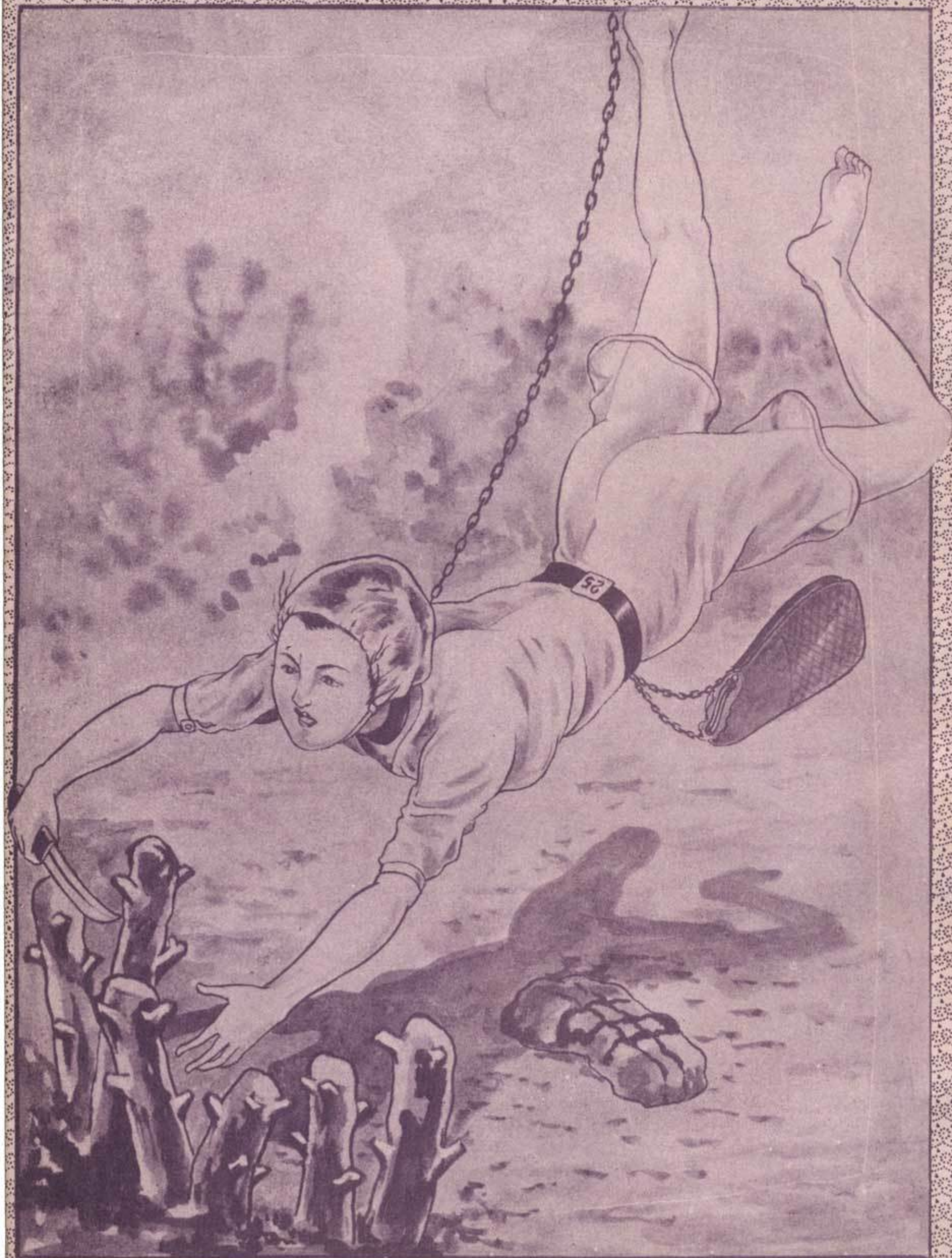
THE KITAN CLUB  
Published Monthly By Tenseisya  
Osaka Japan















—グラビヤ・フォト—

巻頭口絵

奇譚クラブ 四月特大号 目次  
目次裏 「風流いろは歌留多」……………三十九夜同人作・滝れい子画  
戯画 「囚人海女」……………南村 俊平

杉葉いぶし……………	滝 れい子・画
アザのある男……………	黒川 不二男・画
美しい獲物……………	黒川 不二男・画
無気味な密室……………	四馬 孝・画
掌中の珠玉……………	四馬 孝・画
昼は社長、夜は奴隷……………	綾 満須男・画
重量落下物……………	春川 ナミオ・画
腰元 自刃……………	滝 れい子・画
縄と紐の法悦境……………	構成 塚本 鉄三
身も心も捧げて……………	絹川 文代
足綱のもたえ……………	絹川 文代
美畜第十一号の檻……………	大塚 啓子
夢みる表情……………	大塚 啓子
後手吊りの変化……………	梨花悠紀子
宙にうかぶ美体……………	梨花悠紀子
女性の血紅切腹……………	大塚 啓子
女主人と奴隷・マゾの境地……………	絹川 文代
足枷とくさり……………	梨花悠紀子

色 頁 緊縛フォト撮影の実際

〈首綱と後手縛り〉……………塚本 鉄三

懸賞読者原稿応募作品 「マミと私」……………近藤 一……………44	受難記 鼻と紐と私……………中村 良子……………54
長篇連載小説 宇宙のどこかで……………佐治 麻造……………64	ある男の一面 落葉の墓……………西田 仁……………79
或る浣腸マニヤのスクラップノートから……………赤井 茂……………86	読者体験 私の切腹体験記より……………藤村 陵子……………88
ファンタジヤ・マゾヒスティカ……………山本 節夫……………92	ある女の記 平家部落……………楠 佐知子……………96
女装通信 女装ブレイについて……………小田奈美夫……………106	告白 娘相撲と格闘場面……………円山 景三……………108
浣腸費めのイメージ 「華々しき報復」……………古沢 五一……………112	読者体験記 歪んだ少年期……………森 太一……………118
女斗美絵巻 「激斗」……………雪崎 京人……………122	

奇クサロン……………

切腹フォト評判記……………123

孤独の人生観……………	名古屋駅前の男娼群……………
賢作 「自刃画」……………	通信 私の好きな責め方……………
川柳目註 マゾ遊び……………	「ドレイボーイ」願望の君に……………
M写真 洗濯奉仕……………	アブ・ノートの一頁……………
捧げたハイヒール……………	無情なる電話……………
切腹小咄集……………	手配相撲雑記……………
連作「少女」身悶え……………	超人間の面白さ……………
あるカメラマンの自伝……………	女神はいずこの星……………
鮮鋭なるレンズ……………	誰よりも鼻を愛す……………
ガン作・マニヤのノート……………	

読者体験記 精神病院の檻……………	徳川 和男……………139
辻村隆さまで「あるラブ・レター」……………	羽村 京子……………142
羽村京子さんへ「クリスティール讃歌」……………	辻村 隆……………149
縛に結ばれたAとの思い出……………	久保 稔……………156
奇譚三十九夜物語……………	辻村 隆……………160
告白隨筆 お灸つれづれ……………	水木 清一……………174
醜惡ななかの美しさ(愛好家の記録)……………	とま・かずひこ……………178
なつぱデニムの幻想 女性とGパン……………	草原 折夫……………180
随想 たわごと……………	猿渡 志郎……………183
読者告白記「鏡のある生活」……………	水口 晴子……………184
告白 「美畜」への願望……………	綾 長太郎……………188
読者体験記 浣腸器の神秘……………	長井矢須雄……………190
足の文献と記録(奇クに現れた記事から)……………	木村 清……………192
読者通信……………	



# 風流いろは歌留多

三十九夜同人作  
淹れい子画



よ

夜

書

ま

れ

氣を失い

ま  
め  
で  
モ  
テ  
ル

つ  
吊し



蓮華  
往生



串  
着  
し  
に  
女  
地  
尻  
から



な

泣  
き  
面  
に

猿  
轡

ね

寝

悪  
い  
が  
う



縛  
ら  
れ  
る



足  
を  
舐  
め

そ

房

女

甚

お

物

心

見

た

鐘  
の

環

ま  
め  
道







杉葉いぶし

(瀧 れい子 画)

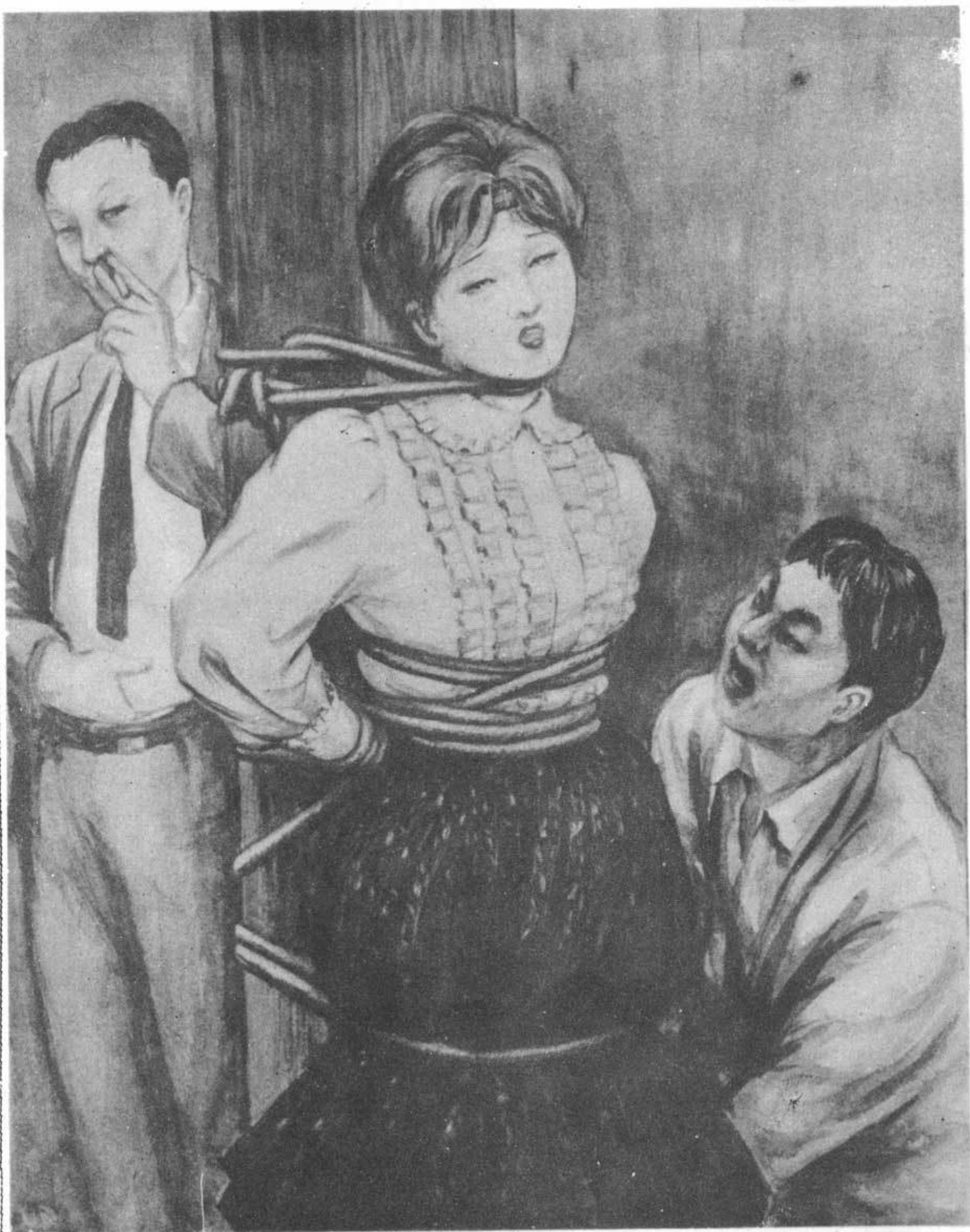




アザのある男 (黒川 不二男 画)

「ウフッフ、どうだ、この俺が怖いか。俺はな、世の中の女という女は、誰も相手にしねえ、この顔だ。わかったか。」





## 美しい獲物

(黒川 不二男 画)

「フン、こいつが奴のスケってわけか。手間をかけて、たっぷり可愛がってやるかな、裏切りやがった奴へのお礼にな。」



# 無気味な密室

( 四馬 孝・画 )







掌中の珠玉

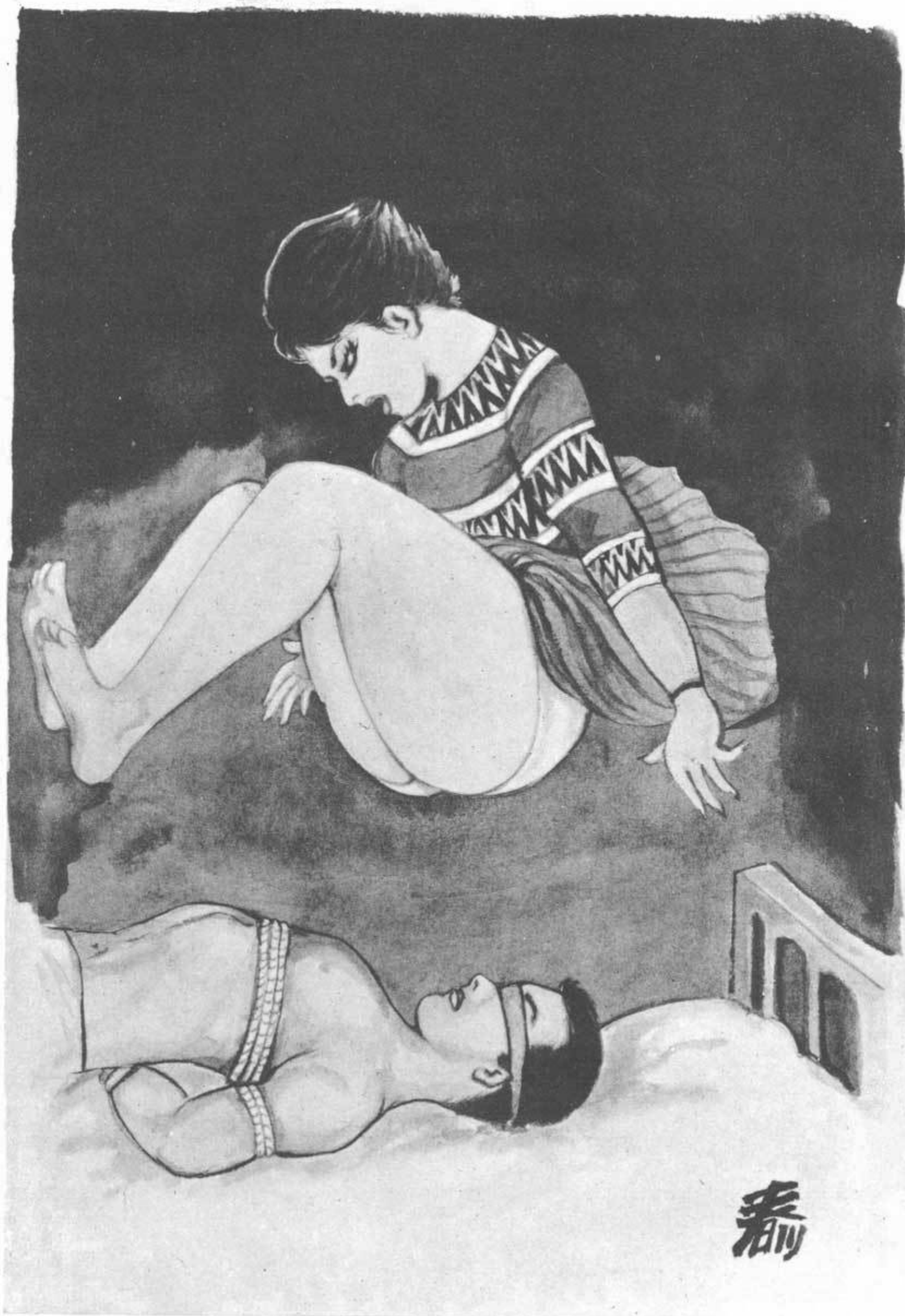
( 四馬 孝・画 )





昼は社長、夜は奴隸 (綾 満須男・画)





重量落下物

(春川 ナミオ・画)



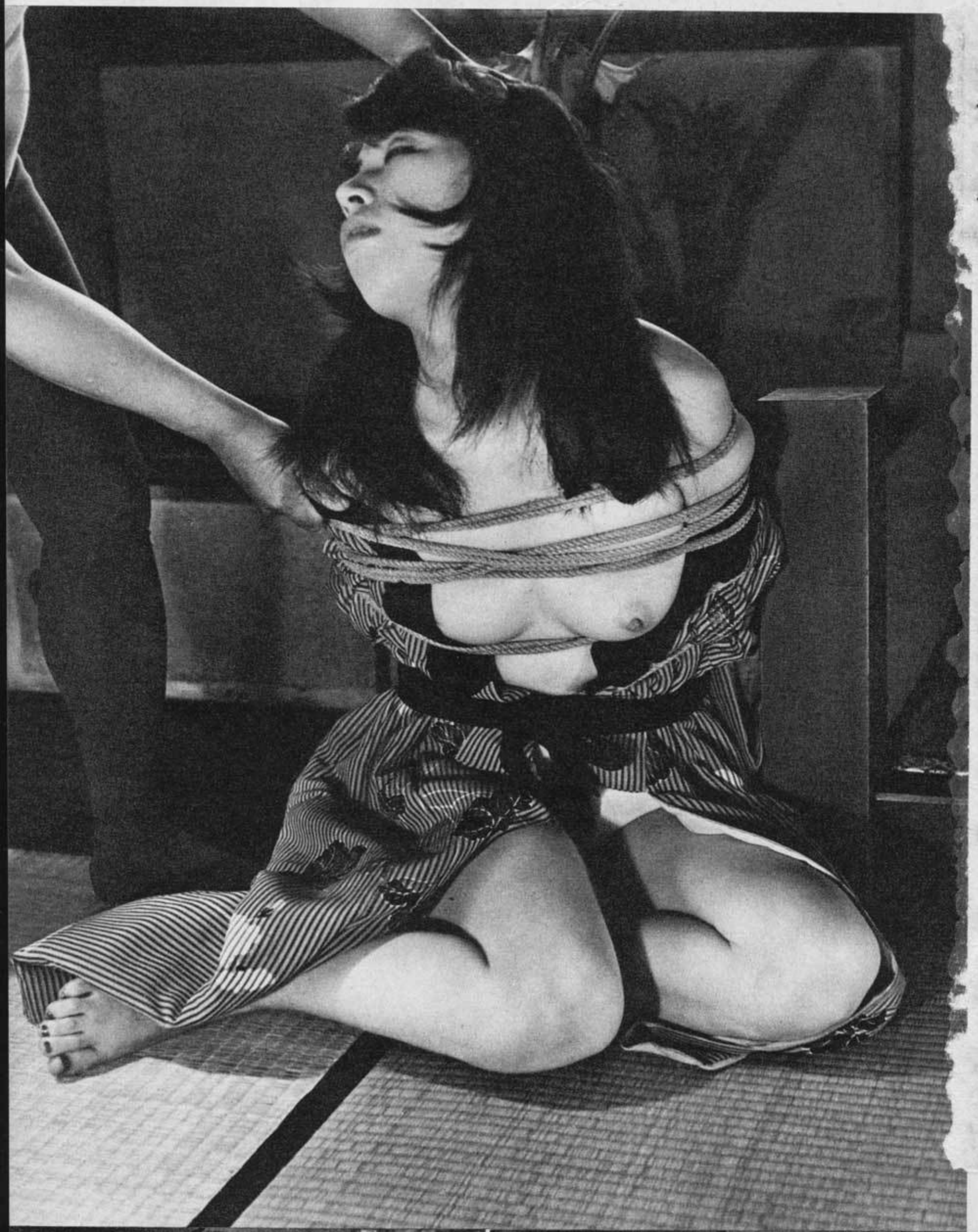


腰元自刃 殿の御あとを慕いまつる



# 縄と紐の法悦境

構成 塚本鉄三





身も心も捧げて



絹川文代



足縄のもだえ







美畜第十一号の檻

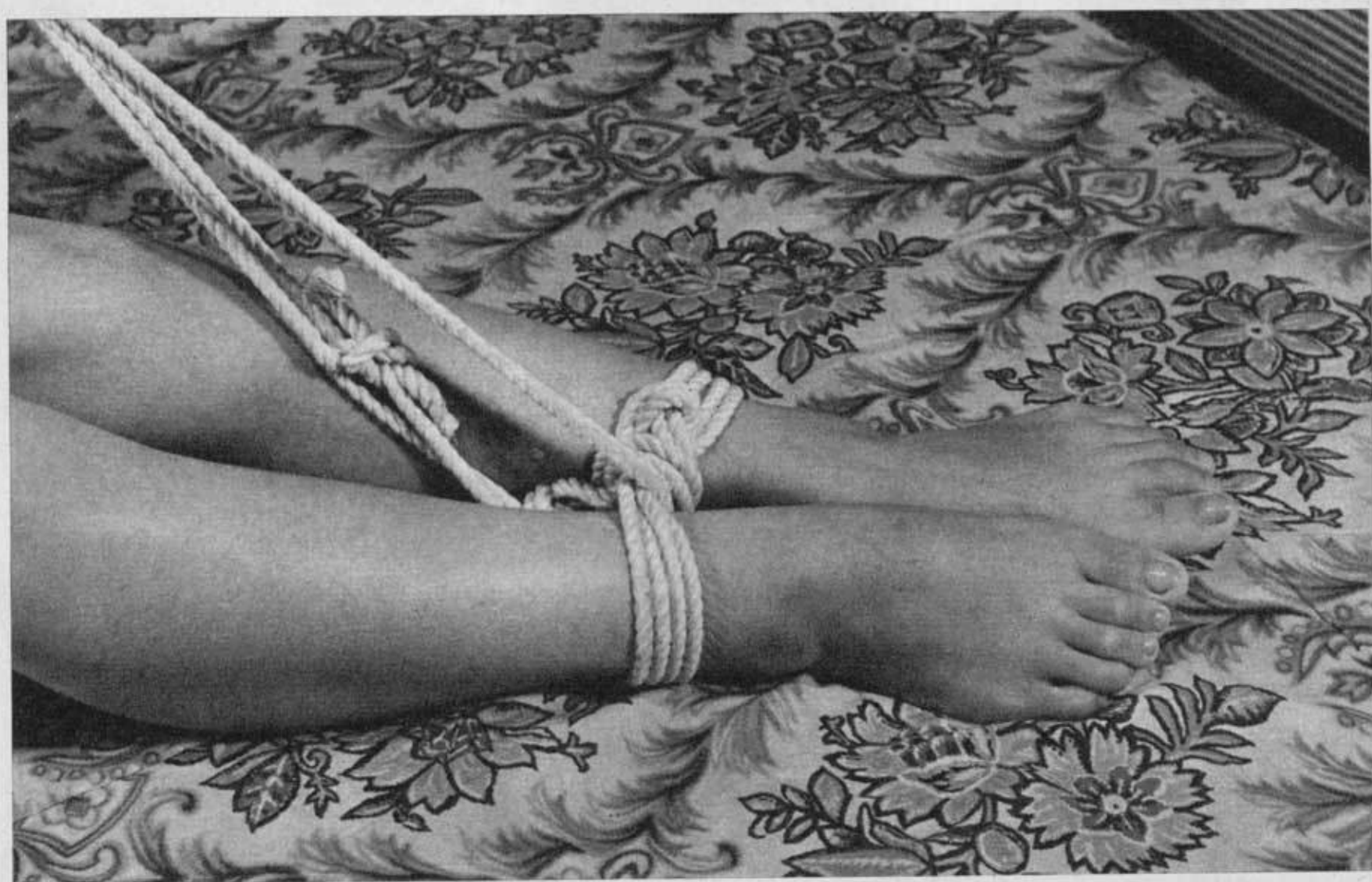


夢  
み  
る  
表  
情



大  
塚  
啓  
子









大塚啓子







後手吊りの変化

梨花悠紀子









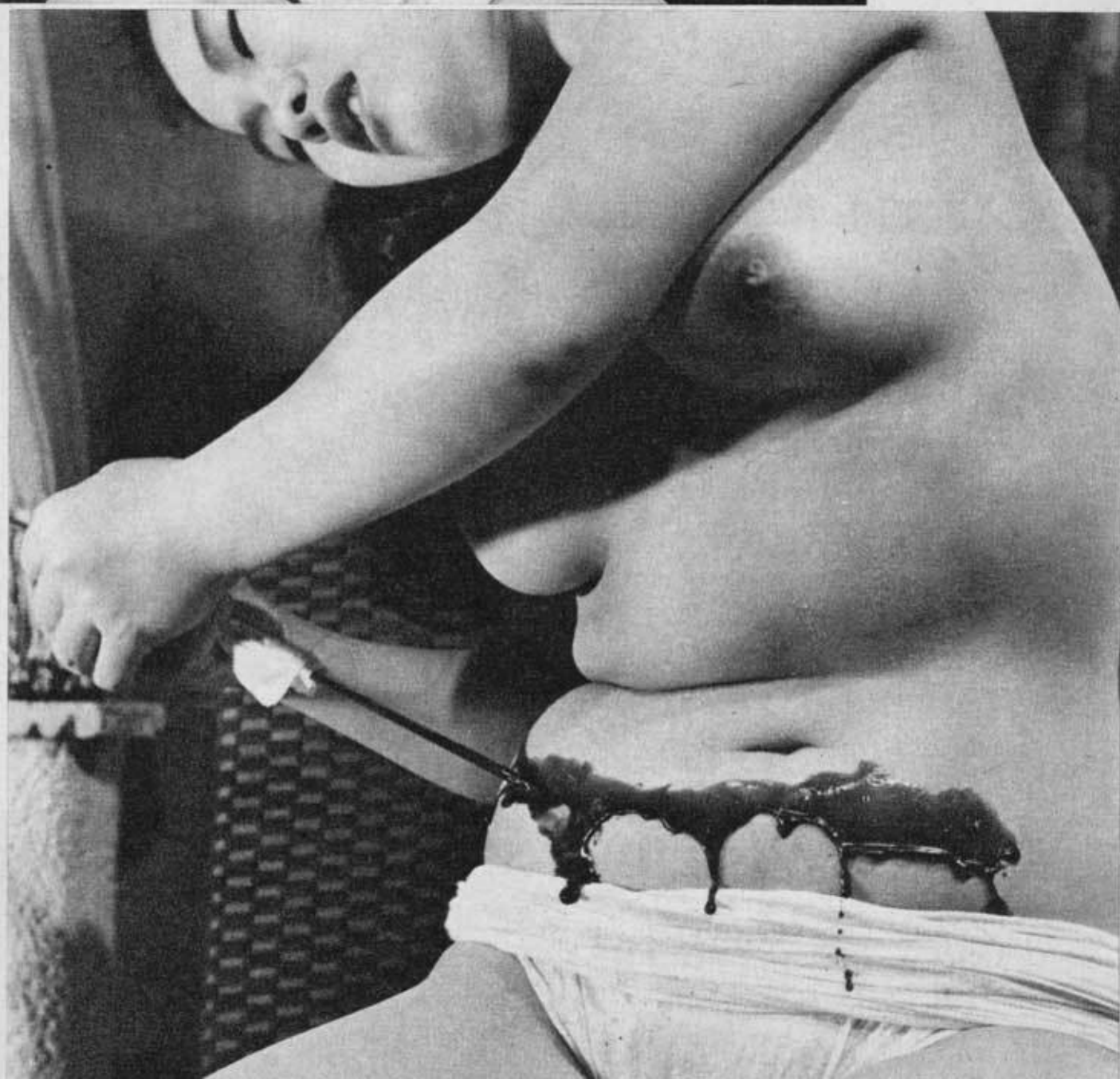
宙にうかぶ美体

梨花悠紀子



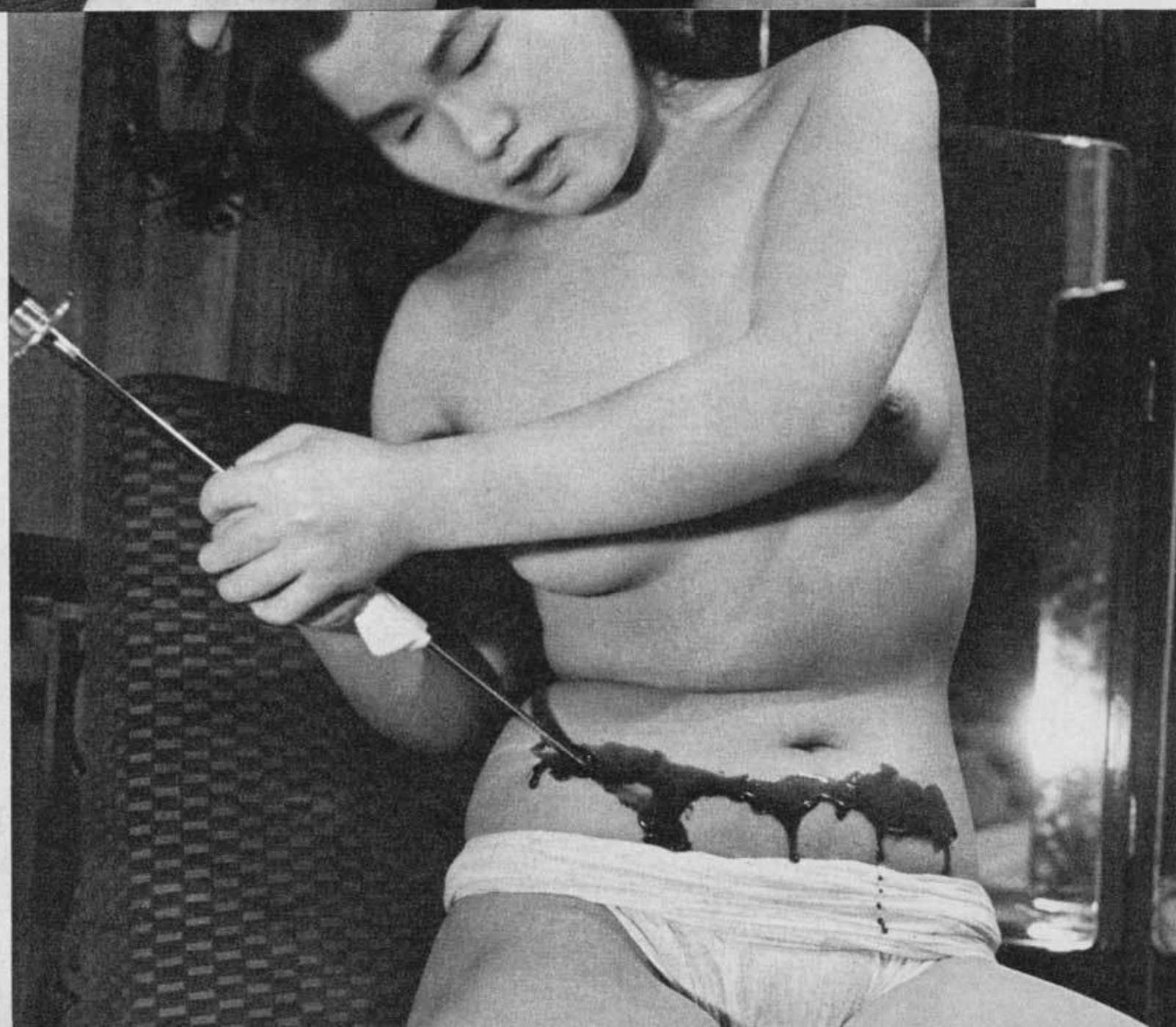


# 女性の血紅切腹



一人の女事務員が自分の部屋で化粧鏡に姿を映しながら、  
切腹のプレイに耽ける場面を摸した。





大塚啓子







女主人と奴隸

マゾの境地





足枷とくさり



梨花悠紀子



# 緊縛フォト撮影の実際

△首縄と後手縛り▽

塚 本 鉄 三



## 撮影の要領

- 一、モデル……………梨花悠紀子
- 一、撮 影……………塚本 鉄三
- 一、カメラ……………マミヤレフC2型
- 一、レンズ……………セコールF2.8八〇ミリ
- 一、フィルム……………ネオパンSS
- 一、現像液……………D76並にD72
- 一、印画紙……………シーガルF3
- 一、照 明……………自然光、補助光源としてフラッドランプ三〇〇W二個
- 一、場 所……………郊外の一戸建洋館

## 撮影の実際

十月二十五日、水曜日、晴

お天気がよいので、日ざしのあるところはお小春日和の暖かさで、晩秋のように思えないが、やはり十月も下旬ともなれば、陽の当たらないところは、冷んやりとして、ヌードになれる気温、摂氏二十度には程遠いようだ。

しかし、少々の寒さや痛さは我慢するといふ梨花悠紀子さんなので、その点は大いに気が楽である。嘗て、彼女を吊り上げたときの事である。「痛い、痛い」と悲鳴を挙げたので、慌てて下ろそうとしたところ、「辛抱す





るからシャッターを早く切って！」と逆にハッパをかけられたのには、そのモデル精神に敬意を表すると共に大いに意を強した次第である。

大体、若い女性は皮下脂肪が厚いから知らないが、男よりは案外寒がらない。スタイルを好く見せるためには、寒いのを我慢して

薄着をするのか。今流行の黒のストッキングにしても、あんな薄いナイロンの布一枚を纏っただけで吹きっさらしを歩いたら、さぞかし寒いことだろうと思うのだが、結構平気な顔をしているから不思議である。

真冬、暖房のない部屋で素肌をじかに冷たい板敷の上にころがすと、鳥肌だって如何に

も寒そうなので、「寒いだろう？」と言葉をかけると、「ええ、寒いけど、でも、頑張るわ」と答えるから頼もしい。

市内から南へ車で約三十分。鬱蒼とした闊葉樹林に囲れた一劃に白聖の洋館が見える。二階のベランダが今日の写場である。窓を開けると陽を受けた桜の紅葉が美しく輝いて、目にいたくしみる。林の向うはブロックの白い塀がこの建物を取り囲むように連っている。静寂そのもの。只、樹々の葉をそよがす風の音だけが、しじまを破っている。

部屋に落ちついて、早速化粧にかかる。といっても、悠紀子さんの化粧は全く早い。ツケマツ毛を準備してきて、つけてみないかとすすめても、私の顔には、そんなものは合わないの、といってつけようとしなない。

実際、彼女は自分の眼には自信があるのだろう。ある時、圓らかな瞳を見ひらいたところを大写真で撮ったことがあるが、うるんだような黒眼にキャッチライトが入って、まことにいきいきとした表情を掴んだことがある。スタート線に並んだ出走馬が、まだ出発の合図がかからないのに、はやりにはやって首を持ち上げたり、脚を踏みならしたりしている光景が、競馬ではよく見られる。撮影前の悠





紀子さんの状態も、丁度そのような有様といってよい。手早く化粧をすまずと、身仕度を整えて待機してくれる。ライトやカメラの準備なんかより余程早い。だから、いつもこちらが催促される方だ。

### 首縄について

緊縛ポーズに入る。彼女は私が縄を持って背後へ回るだけで、両手を背中であ交して組む姿勢をとる。身体が柔らかなので、腕を背後で組んだだけで、肘よりも高く手首が肩先近く位置する。まことに協力的というか、緊縛に理解があるというか、写真を撮る者にとっては、有難いモデル嬢である。それでいて、すれからっしているところや、職業モデル的な臭味がいささかもないのであるから、貴重な存在である。

江戸時代の犯人捕縛の際の早縄の一種に、両手首を背後で吊り上げ、それを首縄にして、胸や腕には一切縄を掛けない方法があるのを本で見ることがある。逆手になった両腕が

たった一本の縄によって首縄になっているため、簡単な縛り方だが、どうにもならないのだ。あの「鉄砲」という懲罰的な縛り方も長時間に亘ると大変苦痛のようだ。

モデル嬢によっては、首縄を大変嫌う者も中にはある。咽喉へ縄を掛けるんだったら、私は嫌よ、と、はっきり宣言されるお嬢さんもあるくらいだ。しかし、首縄は猿ぐつわの息ぐるしさと一脈相通ずるよさのあることは知る人ぞ知る、「女を責める」一つのコツとして伝えられている事実がある。だが、実際に女性の側から、その告白を聞かされるということは、中々むずかしいものである。由来、女性というものは、慎み深いものであるから、如何に近代的な、進歩的な若い女性といったところで、そう何んでもかんでも真実を吐露してくれるとは限らない。

さて、この悠紀子嬢だが、彼女は至って開放的な性格だし、それに第一、頭脳が極めて鋭敏で、しかも感愛性に富んでいるときいてから、私達の参考になることは、いろいろとアドバイスしてくれるし、聞きたいと思うような事柄については、いち早く察知して問わず語りに話してくれる。

さて、首縄ポーズの撮影であるが、これは





先にいった犯人捕縛とか、懲罰とかいった陰惨なものではないし、又、犯罪なんかには、いささかも関係のない、合意のよるプレイであって、如何に縄というアクセサリを用いて、美しい姿態をキヤッチ出来るか、というところに狙いがある。従って、そこには、ほのぼのとした明るさと、甘美なロマンチズムが漂っている。

もともと、悠紀子さんは哀愁を帯びたマスクと均整のとれた中肉中背の姿態で、近代的な美を備えた娘さんだが、又、それだけに緊縛ポーズの被写体としても、傑出した美しさを見せてくれるモデル嬢でもある。そして、今回のテーマである『首縄』に於ては、首縄に苦しみ悶える女性の美しさというものを最大限に捉らえてみたいと思う。従って、そこには、陰惨な惨虐味は少しも感じられない。この稿を書く少し前に、本誌の口絵について一読者の要望を書いた手紙が編集部に来ている、見せ

て貰ったことがある。いろいろと書いてあったが、結局、手ぬるいというのである。もっともっと容赦をせずに、厳しく責めて迫力を持たせよというのである。

こういった一連の要望に対して共感を抱かれる読者の多いことは、十分にうなずかれるところである。又、そういった狙いに徹底してみたいという意欲が湧かないでもないし、悠紀子さんあたりのモデル級になると、十分にその任に耐えるかもしれない。

『むごたらしさ』といったムードを画面いっぱい横溢させよ、という忠告は一応もっともだと思う。ただ、それを生のものではなく芸術的な高さにまで、如何に昇華してゆくかというところに、苦心がある。

私の作品には、象徴的なもの、婉曲的なものが多くて、そのもの、ずばり式の直截的なものが少いと批評されるが、その点は自分でも、大いに自覚しているつもりである。だがそうだからといって、梨花悠紀子や東浦ひかるのような積極的なモデルを作って、美しさのない、責め一点張りのフォトを御披露したいとは思わない。生ぬるいといわれても、お上品だといわれても、陰惨なむごたらしい責めオンリーのものとは出来そうにない。



『首繩に悶え苦しむ女』というテーマのフォトにしたって、美しい苦悶の表情が画面に昇華されてこそ、そこに人工の美が具現されるのではないだろうか。

適度のむごたらしさを調味料とした上品な一品料理が、見る者をして、そこに夢幻的な永遠の空想を馳せるに足る力を持ってくれたなら、一応の成功だと思う。

### 撮影の経過

悠紀子さんの哀愁を帯びたマスク、均整のとれた柔軟な姿態、緊縛に対する敏感な反応などからして、比較的容易に撮影のポイントへ導入できるということは、今迄の彼女をモデルとした経験から察知できたが、いろいろな想定のもとに、その場の状況を顔面は勿論のこと、全身の表情に至るまで、それぞれ変化をつけていきいきと表わすということは、簡単なようで、いざとなれば相当の思案を要する作業であった。

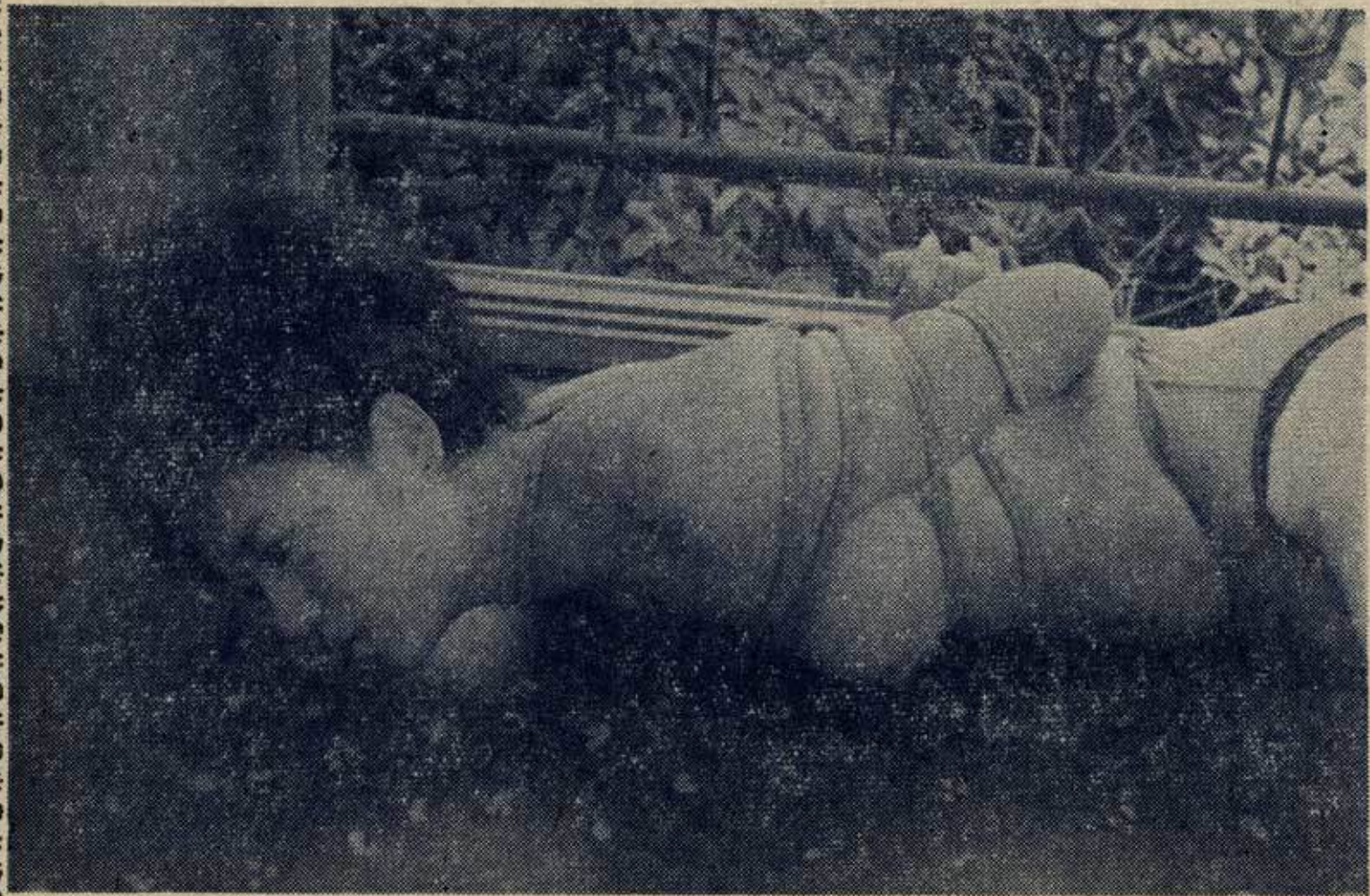
モデルの脱衣している間に、いろいろと思案をめぐらし、被写体の場所、カメラの位置を定め、ライト三〇〇W二灯を鴨居にとりつけ、時に応じてカーテンを開けて自然光線をとり入れ、反逆光気味の配光も出来るように準備する。

いよいよ悠紀子さんに対する縄捌きに移るわけである。背後に交又された腕は縄をかけると忽ち水平より肩口近くに上る。首へ連結してグイグイと締めつけるが、彼女はそんなことぐらいでは一向に音を上げない。温かくて柔かい肌、縄を回して締めつけるたびに、縄の掛った個所がぐっとくびれる。二巻き三巻き、俵のように二の腕が段をつくる。

乳房も腕も胴も、忽ちのうちに縄によって息づいてくる。水を得た魚のように、悠紀子さんの全姿態がいきいきと活気を帯びてくるから不思議である。

髪を掴んで引き倒そうとすると、咽喉が首縄によって締めまり、全身に戦慄が走ったような反応が起る。手首はもうこれ以上は上らないという位吊り上り、足の指は思わず爪先立つかのように力が入る。

程よく肉のついた白い大腿を投げだして、両手の自由のきかない上半身は、なよなよと







くずれようとする。飼育者にとって、これほど魅惑的な雰囲気はまたとあろうか。嬶やかな、その全姿態を晒して、今や責めの饗宴の祭壇に捧げられようとしている女性。彼女にとっても、この一ときは期待していたに違いない。そういったムードが全身に溢れていることが、ファインダーを覗く私の目にも、は

っきりと読みとれた。

更に荒々しく髪の毛が驚づかみにされて、安定を失った上半身が引き倒される。締まった首縄、吊り上った両手首、屈った肘が、ぎしぎしと音を立てそうな一瞬である。床の上へ倒れてしまっただけから、長々と、ぐったり伸びてしまうわけにはいかない。首縄が彼女

の顔面に休息を許さないからである。

悠紀子さんの姿態のいいところであるが、目、唇から足の爪先に致るまで、ぴんと緊張していることは、まことに締めりのある画面を構成してくれる。彼女と同じように、緊縛を好むモデルだった某嬢なんかは、その点、陶醉しきってしまったように弛緩してしまうので、本人はまことは悦に入っているのだろが、画面に張りがなくなつて困つたものである。緊縛されていても、組上の活きた鯉のようなイキが身体のスミズミまで、満ち溢れているところが彼女の身上であらうか。

### 後手の表情

女体に対する縄配りの方法としては、後手縛りが最もオーソドックスなものである。緊縛は後手縛りにはじまり、後手縛りに終るといわれるくらいであるから、途中に於て何か変化をつけようとして、いろいろ考えてみたところで、結局、後手縛りが最高のものであるということを再確認することになるのがオチである。

事実、緊縛は後手の高手小手縛りに限るとはつきり条件をつけるマニヤが多いのだが、被縛の側のモデルに訊ねてみても、後手に縛



られるのが一番よいと答えるのが圧倒的に多く、後手縛りが嫌いだと答えた者は一人もない。曖昧に、にやにやと笑っていて、はっきりと意志表示をしないモデルも、案外満更でない人もいるかもしれない。

後手の縛りであると、自分ではどうしても解けないという不安感、いつも自分の身体の前で動作している両手の自由がきかないというやりきれない無防備感。それに加えて、自分の眼で直接見ることが出来ないという焦燥感などが入り混って、一種の被虐的なムードが漂ってくるのであらうと思う。

今回の悠紀子さんのように首縄と連繋して両手首を背後で曲るだけ厳しく肩口に吊りあげ、更に肘のところで二の腕を巻きつけるようにして締めあげると、肘から先は痺れて感覚を失ってくる。丁度プロレスなんかで逆手にとられて、手を放されても、腕が曲ったままになっている時のようである。

こういう完全な後手高手小手縛りで手首を背中の下にして身体を仰向けにされると、自分の体重で押さえつけるので、痺れは一層ひどくなってくる。横にころがすとき、肘が下になったときも、嚴重に縛り上げているだけに、その痛さは相当なものだろう。大抵の我

慢強いモデルであっても、身体をごろごろと転されると悲鳴をあげるものだ。

悠紀子さんにしたって、同じことだろうと思うが、彼女の場合はあからさまに苦痛を訴えないことだ。仮りに思わず苦痛の叫びを挙げたとしても、こちらの心配気な掛け声に対して、かえって早く解かれるのを恐れでもす

るかのように、なんでもない、我慢できるからと答えることだ。

若い女性にとって、自分の髪の毛を掴まれて、引きずりまわされることは苦痛にも増して激しい屈辱感にさいなまれることであろうと想像されるが、それが、高手小手に縛り上げられた不自由な肢体が、ごろごろと、まる







でサンマでも焼くように転されるのであるから、並大抵のことではモデルはつとまらないだろう。両手首を上にして俯伏せになった悠紀子さんは、はじめて安住の地を得たように冷たそうな床の上に腹這いになった。

首縄の締めりを強めないためにも、手首を、痛いからといって下げるわけにはゆかない。二の腕がへこむ程きつく緊縛されているので、深く交差された両の手首を左右へひろげることも、又出来ないのだ。

美しい後手のアップが二十数分の厳しい緊縛に耐えて、珠玉のように光っている。自由になる脚が伸ばされたり屈げられたり、左右にひろげられたり、せわしい動作をくりかえしている。マニキュアの施されていない健康色の爪がピンク色に輝き、今日の首縄後手縛りという一連の撮影行に一点の花を添えている。

### 撮影を終えて

フィルムにして二本、二十数コマの撮影を終ると、す早く悠紀子嬢を抱き起して縄を解いてゆく。二の腕に、胸に、手首に、赤く残った縄痕は、くっきりと縄の目をあらわしている。白い肌に赤く浮きあがった縄の縞目は今までの厳しい縛しめと、その時間の経過とを物語っている。

私達のいたわりの言葉にも、平然としている悠紀子さんは、さすがに吊り責めを希望し幾多の吊りの試練に耐えてきたベテランだけはあった。今日、カメラに印せられたポーズの幾枚かは、いずれ誌上を飾って、自分の全姿態が多くのマニヤの眼に触れるだろうことを思うと、彼女もある種の期待に、きっと胸をわくわくさせたことであろう。

前回に写したフォトを必ず全部見せてほしいと願う悠紀子嬢は、撮影後のひととき、いかにも楽しそうに、その一枚一枚を丹念に眺めて、このときは、こうした方がよかった。これはよかったと、自分で批評しながら反芻するのであった。



新しい風俗文献研究誌

奇	譚	ク	ラ	ブ
---	---	---	---	---

四月特大号



1962年 4月号

(第16卷 第4号 通刊第164号)



## 《告白小説》

## マミと忍

(続・奇クが運んで来た女)

近藤

奇譚クラブを通して知り合うことのできた松本富美子という女性を、私達は、「マミ」と呼ぶことに決めた。それ程年令の違いもなく、精々姉と呼ぶくらいの人を気の毒とも思いはしたが、何処となく母性的な温みを備えているし、松本のまゝと富美のみを取って愛称にしたものだった。それがまた彼女のムードにピッタリの呼び名と思われる。

最初の出会いですっかり意気投合した私とマミは離れ難くて、とうとう彼女の住居の角まで見送ることになってしまい、次の機会には私も彼女を自宅へ招いて、お互いの生活環境を或る程度知り合うことになった。私はま

ず、私の妻になって欲しいと希う女性をマミに引合わせた。マミは一寸淋しそうだったが、やはり安堵した様子だった。

私の恋人は、私が奇譚クラブに投稿している「近藤一」だということを未だ知っていないらしい。そこで彼女を仮に「忍(しのぶ)」と呼んでおく。この名前は、二俣志津子さんの作品を通して私が好きになった女性名なのである。

私がゾッコン参ってしまうだけに、忍は利口で魅力に富んだ個性の持主だ。顔立ちの中で、瞳の澄んだ切れ長の眼と、少し受け口の肉感的な唇が特に目立っている。面長だが、

ゴツゴツした感じはしない。話し声は柔らかなアルト、手の指はフックラして余り長くない。演劇に関心を持ち、なかなか茶目っ気があって、芝居も巧みなもの、殊に瞳と足指の表情は私の心を捉えて放さない。最大の魅力は彼女の悦虐性向で、豊かな想像力と迫真の演技で私はいつも悪漢にさせられてしまう。

女性の本質的被虐性を信ずる私も、忍のそれが普通でないと思い、それ故に「忍」と呼ぶのだが、唯、忍は決して不潔ではない。烈しいマゾヒズムも美しくリファインされていて、少しも嫌らしくなく、被縛美・嗜虐美を醸し出してくれるのだ。



その忍が、マミとすぐ仲良しになった。

忍は勿論のこと、私の知る限りのマミは、誠実で善意に満ちた女性であり、彼女達の融和は外観だけでなく真実のものと思われる。

女性にありがちな服飾のことやヘア・スタイルのこと料理のことなどが共通の話題のキッカケだった。音楽、映画、演劇、スポーツ等々、話題は豊富にある。そして最も大切な話題は彼女達のマゾヒズムを楽しむことに集中した。

悦虐に関しては、マミは先生であり、忍は生徒である。プレイを愉しんだ女体の経験もさることながら、責めを受けて哭く女の心の経験において、マミは忍の畏敬的だった。感覚の作用は各自の肉体について独立の筈だから、マミの経験がそのまま忍の五官に再現されもしまいが、どういう時に泣きたくなかったとかいう話が、忍には素直に理解され、思い当たる筋があったり、納得が行ったりするようだった。

### 縛ラレル！

そんな閃きの瞬間、何ともいいようのない戦慄がピリピリッと背筋を突っ走るものだ。それはやはり、自分だけの想像よりも、実際

に相手があつて、その責め手との感覚上の接触がなされた時が最も強い。

まず、男の眼の色に「お前をフン縛ってやる」という意志を読み取った時、ぶつかった視線をそらし、いつしか項垂れて眼を伏せながらも、男の意欲的な凝視を痛い程皮膚に感じて身を固くする間に、全身を戦慄の波紋が覆って行く。この戦慄はどうにもやりきれなく、胸を掻き撚りたいような意地悪いもので、震源地はどうやら肉体の中心部のようなのだ。

男に命じられて、両手を揃えて差出す時の被虐感も鮮烈である。眼を睜って昂然と顔を上げていくことなど、二人きりのプレイでは不可能であろう。前手に組んだ手首に視線が落ち、指は軽く握り、うっすらと青い血管の透けて見える白い皮膚に自己愛を覚える。眼の下で、自分の両の手首が括られる悲しみと歓びが、どう説明できるだろう。自ら組んで差し伸べた手首に縄が触れ、巻きつけられ、引締られて行く感触の中で、「縛られる」感じが特に強い。烈しい戦慄が縄の掛かった手首から拡がって全身を押包み、眼を開いてはいられずに、といって閉じていることもできないで、伏目がちにそっと自分の手首の縛しめを盗み見てしまう。自分の瞳で、キッチリ

とした縛しめを確かめ得て、奇妙な安堵を味うのも女の宿命なのだろうか。

私は両手を組むと右手が上になる。その癖があつて、忍を縛るのに私の感覚を押しつけていたのだが、注意してみると忍は私と逆だった。つまり前手の時は左手が上になり、後手の時には左手が背中について右手が外側になる。それが自然のポーズなので、忍は私に縛られる際、往々にして強いられた束縛を受け、被虐感も殊に強いということだった。マミの癖は私と同じなので、いろいろ面白く作用する。

前手縛りに対して後手縛りは、手首の重なりが見えないで、皮膚の感覚による想像だけが大きく働いたため、手首を掴まれた時、最も激しい「囚われ」の感じが走る。強い力で締上げられる時は、勿論痛い。だがそれは軋てシビレに変わって行く。そして、このジンと疼くような感覚が何ともいえず歓喜に通じるために、女の腕を捉えて捻じ上げる力は或る程度以上に強いことが必要になる。ギュッと握り締めるのは二の腕でも肩でもよいが、忍は手首が最も強い感応を起すという。

「縛られちゃった！」という想いよりは、「縛られるんだ！」という想いの方が強いシ



ヨックだという。縛り上げられてしまった後では、正直な処、一種の安堵を覚えるというのだが、そのことは、土壇場に追い詰められた女の諦めから来る度胸の良さというより、愛する者同志の遊戯の意識が大きく作用しているのだろうか。

とにかく忍は縛られて行く過程で、囚われの実感を覚え、全身がゾクゾクするような戦慄を覚えるという。一筋々々、新しい縄目が肌を巻き締めて行く感触に心臓が激しくゆさぶられるとか。確かに巻きつけた縄を引絞る時、ドキッとするような呻きを聞くことがあるし、殊に忍のむき出しになった素肌に縄が触れた途端、彼女の背中が私の目の下でビクンと震えることもある。

マミの話によれば、陶醉は縛り上げられてから後に感じるものだという。厳しい縛しめが女の肉体を絞り上げ、ジワジワと責めつける中で、女の宿命は被

縛の喜悦に陶醉する。それは「縛られちゃったんだ」という意識を前提として、抵抗の術

を持たない境遇を必要とするからである。縛られて行く過程では、まだ抵抗の余地が残されていて、次第に体の自由を奪わ

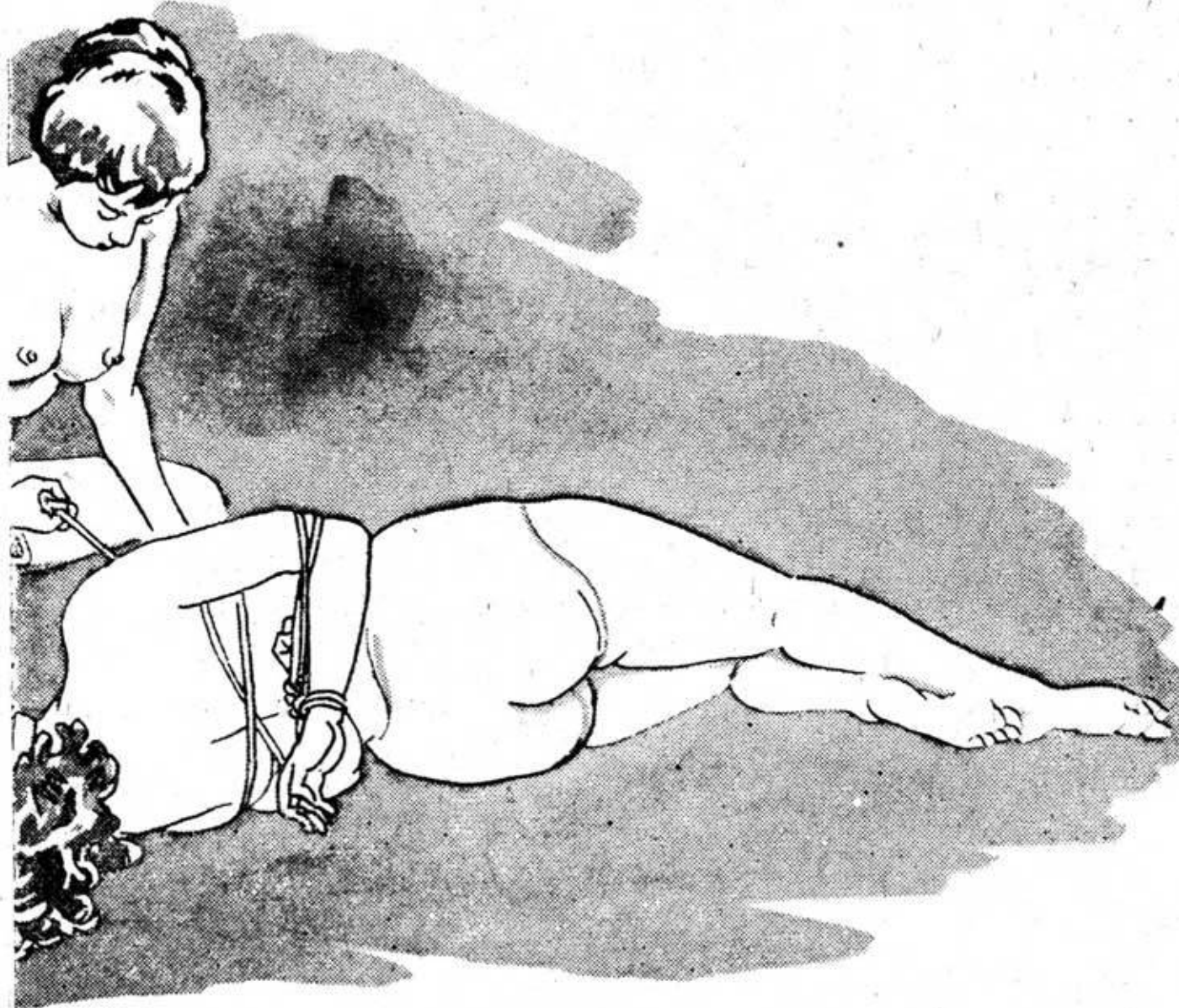
れて行く処にシビレの要素があるのだから、陶醉を覚えるよりはドキドキする烈しい刺激によって、ゾクゾクと歡喜の戦慄に押し流されるのが本当だろうとのことで、忍も大いに共鳴していた。

忍は可愛い女だ。ヌケヌケとのろけをいうようだけれど、忍は私にとっては本当に可愛い女なのだ。忍の体のどの部分を縛っても、おかしい程の慄えが起る。

「女の体はネ、男性よりも感覚が強いヨ。全身に感覚帯が行き渡っていて、もともと抱かれるように生まれついてるのヨ。抱き締られる歓びを知らない女なんて可哀想ヨ。」

そういつて微笑したマミも忍の感度の良さには呆れたり、可愛がったりした。

「嫌ヨ、そんなに笑っちゃノ私、





死んじやうから、いやっ／＼」

どんなに拗ねても忍は可愛い。涙も綺麗だし、汗の匂いも佳い。そして生理の間に、全身から発散するムツと来る匂いも、私には好ましく思える。マミには気の毒な気もするが、私の生涯を賭けた本当のSMプレイの相手は、忍を措いて他にな

い。マミは現在の忍を、より完全に近いマゾヒスティンに仕上げるための、良き助言者に過ぎないのだ。

骨を縛ってはいけない。これは私がマミと忍の温かな肉体を通じて教えられた戒しめなのだ。例えば、手首の骨、肩胛骨、鎖骨、踝など、その上へ直接縄が当ってギリギリ締上げると、流石の彼女達も烈しい苦痛に悶え、悲鳴を挙げ、涙を流す。被縛の疼痛がジーンと全身を痺れさせ、悦虐の陶酔がジワジワ女体を押包むためには、束縛が柔肌を徐々に締つけて行かなければいけないのだ。そして、女の体というものは、マミも忍も、受縛にふさわしく、恍惚を識り得べく、創り上げられているのではないか。四肢五体、しなやかな首、



丸い肩、プリプリと弾力に富む腕や腿、ふっくらと豊かに息づく胸と腹、逞しく艶やかに張出したヒップ、女体を真二つにしそうなくびれを見せるウエスト、すべての箇所被縛を飲ぶ女の期待が窺われると思う。縛しめがじかに骨を擦らないようにすれば、女の体は厳しく縛る必要がある。ムチムチと肉づいた部分なら、堅いベルトで締めてもグツと凹むし、手頃な細引は千切れそうに喰込んで行く。

神経麻痺というのは普通肘から先に起る。余り酷く捻上げたり、長く高手小手で放置しなければ大丈夫らしい。骨折はまずあるまいし、捻挫や関節脱臼も愛する限りはなからうと思う。血行停滞は止むを得ない。緊縛が女体に与える陶酔はこの痺れが産むのだから、

縛しめが血行を完全に停め彼女の肉体の細胞組織を破壊しない限り許されてよいし、なければならぬのだと思う。

キツチリと全身を締付けた縛しめは、身内に妖しい情感を湧上らせる。被縛の諦観の中の安堵とそれ以上の何事かを求める期待の戦慄とが融合して、素肌をピリピリと緊張させ、胸奥に歓喜を燃え上らせ、正に快感と呼ぶにふさわしい感情を昂ぶらせて行く。

「縛られる／＼」と戦慄し、「括られちゃった／＼」と安堵した女体は、次に何を求めるのだろう。余人は知らず、少くともマミと忍に関する限り、完成したばかりの拘束から解放されることなく、より厳しい桎梏、より惨い苛責を、妖しい陶酔の中で求め続けるのである。

首縄がそれ。猿轡がそれ。苦痛の激越な筈のアクロバティックな体位もそれ。吊りとか鞭撻とか擦りとか拷問まがいの責め方も、明るいムードに包まれて悦虐プレイに昇華した残虐も、特異な性向を内に秘めた彼女達の、心から憧憬し願望するプレゼントなのだ。



首縄は、不思議な作用を持つ。首輪と絞索だ。より美しく在りたいと常に希う女性にとって、自己が首輪を付けられた人間であるという意識は、犬よりもみじめで、プライドがあるだけに身顫いする程おぞましいものだ。屈辱と羞恥、それも忘れ難いものなのだ。

「初めて首を結わかれたでしょ。曳かれる／＼って思ったら、私、どうしていいか分んなかった。死にたくなって、泣きたくても声が出せないの。」

忍は瞳をクリクリッと動かしている。

ほっそりと弱々しい限りの女の頸が、首輪を嵌められ、或いは惨い首縄に締上げられただけで、遽かに精気を帯び、奇妙な艶めかしさを以て迫って来る。忍の襟足には割に大きな黒子が一つあって、そんな細い首筋を眼下に見ると、とてもそのまま赦してやる事ができなくなる。

犬の首輪はマミの独壇場である。亡くなった御主人が大好きで、首輪や鎖は勿論、口輪や調教用の鞭まで、いろいろと取揃えた。それらの中には愛犬とマミとに揃いで拵えたものもあり、マミを羞恥と屈辱の惱乱に叩き込み、マミがもし隷従と奉仕の競争に敗れでもしたら、御主人と競争相手の愛犬との両方か

ら加えられる厳しい制裁に美白の裸身を悶えさせ、喘がなければならなかったという。余りにも鮮烈な苦惱だけに、マミという女の体の中で、それが甘美な想い出に昇華したのだろうか。マミはむしろ普通の首縄よりも附け馴れた犬の首輪と犬曳き用の鎖を飲ぶのだ。

忍はまだそこまでの女体ではないし、犬の真似のプレイ以上には出ないだろう。心からの犬の奉仕を命じ得るか、私自身も危いのだ。

猿轡は忍という女体にはまだ余り馴染まない。概ね口と鼻を覆う程度の布片で、詰物は無いが、あっても精々女持のハンカチ位である。古川裕子さんの手記に屢々述べられていた事も、私自身で理解し得ない面が大き過ぎる。言葉はおろか呼吸さえ完全に堰止められるまで口中に布を詰込まれ、然もゴム布がぴたり鼻孔に蓋をすると、高手小手首縄を施された女が赦しを乞う術は弱々しい視線だけ。その危険な息苦しさの中で、どうにもやるせない女の生理が疼き、悦虐の業火がトロトロと全身に燃広がる、とはいうものの、女の被虐の欲びが女でない私に的確に把握される筈はなし、忍がこの境地に果して達し得るやら不明なのだ。忍は決して古川裕子でない以上、私は猿轡についてこれ以上の危険を求

める必要はないと思うし、むしろ忍の初々しい羞恥心をいたぶるために、ブラジャとかパンティとかオムツカヴァ、メンスバンド、ストッキング等々、それも忍自身の匂いを楽しみ込ませたものの活用こそ、残された宿題と考えている。

アクロバティックなポーズも面白い。同じく柔軟といっても忍とマミでは弾力が違い、肌の張りや艶が明らかに違う。一見おとなしいようだが烈しく燃える性質だけに、凌辱の幻想とマッチすると思いがけないお転婆にもなる。

「<sup>とし</sup>年令かしら。体が堅くなっちゃったのネ。私、小学校の時なんかもっともっくと曲ったのヨ。クラスで一番だったんだもん。」

絶対平気ヨ、といい切って自らの体を海老縛りの実験に提供した忍だったが、唇を噛み荒々しい喘ぎの果に、遂に悲鳴を上げて降参した。しみじみと嘆息まじりに述懐するけれど、忍は若々しく新鮮で弾力に富んでいて、只々彼女の清純が海老縛りの残虐に耐え得なかった自然の結果に過ぎないだけなのだ。

被縛のポーズとして忍が好むのは、所謂手も足も出ない恰好だった。手足と一緒に括って丁度捕獲された雌獣のように扱われたり、



四肢を背中中で絞り上げられて、揺籃のようにユラユラ動くのが気に入った責められ方なのだ。その上、梨花悠紀子嬢のように全身が宙



に浮上る姿態を望むなら、自然吊りが多い。羽村京子さんの告白「狂い咲くカンナ」にあった四種類の吊りは確かに身近で手軽なもの

だけれど、忍の場合両手を頭上に引上げた吊りは勿論、後手吊りや逆吊りも体を真直にする以上、装備の乏しい普通の家屋内ではむづかしく、ウェストを責める胴吊りも余りやりたくない。結局、可能で歓迎されるものは猪吊りと駿河問いのポーズで、これなら或る程度の高さに留めて、擦りも鞭撻も意の儘になる。どちらかというと正面向のポーズの方が忍のお気に入りようだ。

「女の子って攻撃されたら本能的に前を庇うでしょ。顔とかお乳とかお腹とか。すぐにしやがみこんだり俯伏になっちゃうの。だからその逆に胸や腹部がむき出しにされたら凄いい刺戟で泣きたくなっちゃう。」

確かにそうかも知れない。柱に立姿で括りつけた時、後手にされたあとの磔を拒みながら、乳房の上下を厳しく柱に巻締めたあとで両腕を柱に廻し、キッチリ括って欲しいという。上体を柱に固定すると、忍は呼吸をはかって両脚を背後に上げ、丁度柱を背中中で抱くように絡みついた。

頭はガククリと垂れ、髪が胸に散る。両腕も両の腿もブルブル顫え、呻きが喘ぎに混る。胃の辺りが慌だしく波うつ。

「云う／＼云、云います／＼私が悪いの／＼白状



するから、赦して！」

私は驚いた。黙って、厳しい縄目の下で悶えながらズズズズとずり下っている女の様子を見ていた。

「苦、苦しい／云うこと、肯くわ、貴方、何でもします／もう駄目／助けてっ／」

呻きが一際高くなり、少したってから忍は両脚をほどこいて足を畳につけた。髪を振って顔を起すと、恥ずかしそうにニッと笑って、ハアハア荒い息を弾ませた。

忍はこんな可愛い奴なのだ。

縛ラレチャッタ／

そんな実感が諦めを呼んで、女が最も美しく見える観念しきった姿を創り出す。それだけに、抵抗の余地は一つ一つ克明に押し潰して行く方がいい。手首は勿論、肘も膝も、できれば足の指一本々々も、完全に無力にする必要がある。風呂敷やネッカチーフでもいいが、ゴムか革製の袋があれば最高。それで物を掴めないように包み込んでしまうのだ。拳斗のグラブなども面白いだろう。

忍に反応の強かったのは人魚遊びだった。両足首を絡ませて密着した脚を一本に括り合わせ、腰から下をシャツにくるんでキッチリ

縛り上げる。そして更に袋に詰込むのだが、

袋が短かければ膝から下を後に折曲げて、足首を太腿の内側に縛りつけておくとなお効果がある。袋はズックなどで充分だが、革やゴムならそれぞれ別の味わいもあって、マニアを歓ばすに違いない。脚を折曲げたまま腰から下を袋詰めにされると、女体はもう歩行は愚か、起立さえ不能になる。当然のこととして両手は背後に廻されているし、高手小手に首縄という被縛なら、ちよっぴり誇らしげな鼻の先をつままれても、色白で可愛らしい顔を男の足の裏でグリグリ蹂躪されても、最早逃れる術は全く無いのだ。

「君は人魚だ。ここまで泳いでおいで。」

四肢の動きを封じられて前進するのは大変な労作だが、尺取虫に似た屈伸で艶めかしく匍い悶えることは可能だった。足許に辿りついた人魚を、縄目を掴んでグイと吊上げ、膝に凭れさせ、髪を驚嘆みにして仰向させる。伸びきった女の喉のヒクヒク震える膚に唇を当て、ジワジワと歯を立てて行く。苦痛か否か、動物的で耐え難い呻きが女体に一層の戦慄を呼び、限らない愛しさが私を包む。臉を閉じ、唇を半ば開いて只管待ち望む忍は、私の腕に身を委ね、胸の中で暖かく息づいてい

たのだ。

マミが忍のことを得難い良い奥様だといってくれた。同じマゾヒスティンとはいえ、マミや忍の悦虐性向は古川裕子さんと明らかに違っていたし、マミと忍の間にさえ共通性の強い反面に差異は判然としていた。

ヌードの場合、忍には清浄な美しさがあって、惚れた慾目ではないが、体臭にさえ芸術品の香りがある。マミの裸身は正に爛熟そのもの、曲線の妖しい崩れはシットリと脂肪の層の厚みを誇って見せ、発散する匂いも息苦しいまでに濃厚で魔女的魅力に富んでいる。

乳房の形は忍の程よい大きさと美しさに劣るけれど、マミの人一倍豊かに発達したそれは、稍垂れ気味だけに面白い。流石にマミは思いきりよく裸形を曝すし、乳房の責めなどには満ち足りた歓喜を示すのだ。羞恥心が乏しい訳では決してないが、見事に爛熟した女体のプライドはもっと強烈だし、何よりも悦虐性がヌードとセックスに結合しているのだ。忍は違う。ヌードはスリルに満ち、好奇心の対象なのだ。無闇に全裸にはならないし、ブラジャさえ脱れない。痛い目を見せた処で結局は同じこと、涙の溜った瞳で恨めしげに見上



げられるのが嫌で、さっさと剥ぎ取って観念させた方が楽なのだ。被虐はプレイであり生活の潤いなのだ。

素肌の上にじかにVネックのセーターを着て、下半身は小さなエプロン一枚で覆って、勝手口での御用聞き等の応接に当る。後は勿論、横も向けない丸出しの姿で懸命に應對し、粘られると板の間へペタリと正坐して身動きも儘ならない忍の可愛い冒険を、私はマミに試みようとは思わない。裸の忍に、なるべく透明度の薄いナイロンブラウスとピッチリしたスラックスだけを着せ、晴れた日の日比谷公園を歩かせることが、忍の肉体美に対する羞恥心を誇らかにいたぶって、強烈なSMプレイになるのもマミとは違うと思う。

とにかくマミは忍の悦虐性を育て上げるための助手であり、得難い基盤には違いない。愛を一身に享けるべき女性美を忍という女の上に創り出すための献身、プライドを持つ女なら引受手の無い筈の努力をマミは惜しみなく払ってくれた。その限りでは、マミの精神的被虐性は尋常一様ではないし、それだけに私はマミに好意と感謝の念を抱き、何かを与えずにはいられない想いに駆られる。

マミの肉体は責めに鍛えられ、只でさえ、

五官は痛苦に馴染んでいて、生ぬるい縛りなどでは却っていらだたしさを増す程だった。そのマミが遽かに最上の伴侶を奪われてみると、追憶が鮮烈な歓喜のみを頻りに強調し、それがいつしか被虐の願望となり、満たされぬ日々の重なるにつれて激しい凌辱渴望ともなったのだ。更に加えてマミの肉体の変化がある。爛熟の一途を辿る女体は性の刺激に貪慾であり、飽くことを知らない。痛覚が鈍化して快い衝撃にすり変ってしまう。平手打ち

や掴りや咬むことは普通一般にあるが、鞭撻や縛りが一寸刺激的な愛戯になってしまふ。女体のそのような進展に見舞われたマミが、心理的背景のもとで、偶々見つけ出した私という人間に一役買わせた妄想を抱懷したのも無理からぬことと思う。私は一役買ってもいいし、今ではそれは私の義務かも知れない。「私、縛られて欲ぶ女ですもの、加減なさらずにいいのよ。」

初めのうち私の遠慮をマミは遠まわしに拒





否したが、私への要求は次第に露骨になり直接なものとなった。

「大丈夫よ。この位じゃ何ともないわ。もっときつくしたって、私、平気なのよ。」

「嫌／そんな緩いの。もっとずうっと嚴重に緊縛してったら／」

それこそキリキリと肌を噛むくらい、ヴォリュームのあるマミの肉体に溝を作って隠れてしまいそうな縄目を締めつけながら、私は女という生物の不思議な体力に呆れ、マミという風変りな女を憎らしい程可愛い奴だなと思った。

縛り上げたマミに鞭を振う。使い古した三センチ巾の革バンドがビュツと唸って膚にぶち当たると、白く丸やかな女体がビクンと慄え、何とかして次の加撃を逃れようと企てる。哀訴には同情も湧こうが、取澄して落着き払った生贄には腹が立つし、逃亡の気配を見せる捕虜には憎悪が起る。撻たれたマミの悶えが誘いの演技か否か不明だが、私にとって遅しいヒップの膨みや肩から胸、腹、腿にかけてのムチムチした厚みの蠢きは、不遜な挑戦そのものだった。私は腕に力をこめ、バンドを振り続けた。右腕が疲れてだるくなり、やがて痛みを覚えながらも、止めなかった。マミ

は泣いた。赦しを求めはしないが、泣声を上げた。悲鳴を上げた。遂にはマミの白い体の深奥から獣のような唸りが絞り出されて来た。低く断続する呻きに手を休めた私は、マミの喘ぎを聞いた。

「やめないで。続けて、もっとぶって。嬉しいのよ、私。ああ、早くぶって、早くう。」

のびのびと均斉のとれた肉体美の忍と違い、肩や腕、腹部の辺りにタツプリと厚みを見せているマミの女体は、脂肪の層の多いだけ痛覚が鈍いのだろうか。

マミは古風な責めを好む。海老縛り、後手吊り、算盤責めの石抱き、等々。マミの持つムードがそうであるように、マミの性格身体が純日本風な色調の強いものなのだろうか。

マミは和服を好む。紐の多い拘束を愉しむためかも知れないが、確かに和服が似合う。全体に丸やかで、処女とは程遠い体つきではあるけれど、たっぷりした肉づきも均斉のとれた太り方だけに、却って落着きを増し、和服は勿論、洋装も品良く着こなすのだ。地味な中に明るさのある色調のスーツと、タイトスカートを着たマミには、嫌味の無い知性と品の良さが窺われて、どこか名門の女子校の

教壇に立つ人のような清らかな初々しささえ感じられる。

「マミがあんまり上品ぶってるから、どうしてもその仮面をひんむいてやりたくなっちゃうのさ。」

「あら、私、上品ぶってなんかいないわ。ちゃんと私は責められて欲ぶ女です」って表明しているじゃない？」

マミを考える時、いつも思い浮かぶのは、かつてKKの誌上を沸かせた松井頼子作「淫火」の主人公小百合夫人なのだ。小百合夫人の上品さは身についたもので、決して意識的な偽善の仮面ではない。少くとも中流の上より上の階層に生まれて育った女性の肉体に、激烈なマゾヒズムが宿っただけなのだ。マミだってそうだ。マミの威品も生来のもので仮面ではない。歓喜の絶頂も身のこなしが慎しみの枷を受け、狂態といえそうにない。本当に内向的な、奔放な空想力を駆使した心理的なマゾヒスティンといえよう。

拷問より調教、訓練の好きな雌獣だった。刑罰よりは、主人の意に副わなかったための罰を甘受する女奴隷だった。男の足許に躊躇なく蹲り、男の手にした鞭の命じるままに嬉々として身を動かす。「女」であることに真実生



甲斐と欲びを見出だしている女だった。

自分がいけない女だということを確認した  
いからというマミの提案が発展して、白い膚  
に個々の識別の表示をすることにした。愛称  
がいいという忍には「リリ」と書いた。忍は  
百合の花が好きだし、面長で瞳の大きな処や  
口許のはっきりした処がスラリとした体つき  
と共に百合の花を感じさせるからだ。両腕の  
上膊部の内側と両の内腿、そして胃の辺り  
に、私は黒のマジックインキでリリと書きつ  
けた。鏡の前で身を捻ったり爪立ったりし  
て、忍は自己の膚に印された愛称を眺める。

「私は何でもいいわ。でも、なるべく人に見  
られたら困るもの、恥づかしくて死にたくな  
るものがないわ。」

ここでもマミは忍と違っていた。例えば、  
最近活躍の東浦ひかる嬢のように「わたし責  
めて下さい」と素肌に記すことが、忍には耐  
え難い屈辱であり、マミには生ぬるい遊びだ  
った。胸に「女奴隷マミ」と横に書いた。腹  
部を露出して立たせ、縦二行に「私はいつで  
も縛られています」と黒く書いた。後向きに  
させて、ヒップに「撻って頂戴」いくらで  
も」と書いた時、私はマミの瞳の輝やきをゾ  
ツとする程美しいと思った。赤のマジックで

左手首の内側と襟足に、私はMの字をはっき  
りと書きつけた。女の体の上に、一行に五、  
六字を書く勢い細字になって、衣服の隙間  
から覗く文字は他人に判読し難いだろう。だ  
が、当の女性にしてみれば心の休まる暇がな  
く、スリルと羞恥の烈しい責めになるのだ。

慎しみ深いマミは決して露出癖を持たない  
から、プレイではヌードの思いきりもいい割  
に、肌に文字を記したままの外出で、殆ど下  
を向かなかった。私にとっては幸いな話で、  
もしもマミの首筋のMの緋文字が人目につい  
ても、恐らくキスマーク位で通っただろう。  
右手で左手首を握っているマミの、一見淑や  
かな風情に対して、忍は時折大胆なポーズで  
リリの文字を確かめようとする。表現に敏感  
な二人でも、それを嫌悪し通す潔癖な忍の無  
駄な所作と、それを愛恋し情熱的に反応する  
マミの、純真そのもののような仕草との対照  
が、私には何となく信じ難いものに思われ  
た。

奇クが運んで来た女「マミ」は、私と忍に  
とって、実の姉よりも親しい人になった。忍  
と一緒に私の嗜虐の対象として悶えてもくれ  
るし、或いは私と忍との両方から罰を受忍す

ることもあり、時には忍を懲罰にかけするため  
の意地悪い女執行人として仕置を買って出る  
ことさえあるのだ。そしてそのいずれもが、  
少しもぎごちない処を持たず、その役になり  
きっていた。忍に対する縛りは、外観の変化  
は乏しいものの、綿密で丹念だった。いたぶ  
りはネチネチと執念深く、必らず忍に涙を流  
させてくれた。そのようなことは、KKの春  
日・伊吹のSM名コンビで既に示された女性  
の特性といえるものだが、マミという女は、  
私が指示すれば、一寸したヒントでスケール  
の大きな縛りや責めにも従事してくれる女だ  
った。マミのそういう実態を紹介する機会も  
いずれ巡って来るかも知れない。

マミと忍はパンティ一枚で背中合わせに坐  
り、それぞれ相手の腹部に廻した後手を縛ら  
れ、更に組んだ足首を括り合わせた縄が首を  
巻いて上体を前屈みに強いる。つまり絡み合  
った海老縛りの女二人を眼の前にして、私は  
KKを愛し、しみじみと幸せを味わうことが  
できるのだ。



## 受 難 記

鼻

と

紐

と

私

中 村 良 子

昭和三十五年十月の始めの事です。

ラストバンドが、ラ・クンパルシターを奏して居ります。ホールのお客は今日もちらはらで淋しいのですが、私の受持のボックスでは初めてのお客で、三十過ぎの官吏らしいキザなお客に同僚の亜矢子さんと一緒に先程からうんざりして居ました。

知ったかぶりの音楽、美術、映画等の話でしきりに氣勢を挙げ、二人共大分酔っているのか、態度がだんだん露骨になり、今まで背中に手をやっていたのが、肩にしなだれ掛けて来ました。

「さっきから思ってたんだけどね、君の顔は女優の左幸子に良く似てるね」

「あら、そうお」

聞き流しました。すると向いのソファの亜

矢子さんのお客が

「いや、その一寸冷たいところが、アメリカのアンバクスターに似てるよ」

「それは、どうも有難うございます」

「アハハハ……」

二人は声を揃えて高笑いしました。

「ハハハハ、いや本当だよ君、アンバクスターに、そっくりだよ」

「いやボクは左幸子に似てると思うね」

私のお客が肩を引き寄せ、私の顔を覗き込みました。

「うん、そりゃ似てると云えば似てるけどねえ、うーんそうだね、二人をちゃんぼんした顔だね」

「あらそうお、女優さんに似てるってば、私は美人って訳ね。それはどうも有難うございます。さ、どうぞどうぞ」

おどけた声で私も調子を合せ、ビールを差出しました。

「アハハ……」

「ところでボクはね、君の目が一番魅力があると思うね、目がいい」

「そうかね、ボクはね、目よりも此の娘の魅力はね」

私の横のお客は、そう云ったかと思うと、私の肩を片手で強く抱き締め、手を延ばして私の鼻をキューッと摘まみました。

「いやーん」

「この鼻だよ。ハハハハ」



「いや、いや、離して頂だい。いやーん」

鼻声を挙げて、振り離そうともがきました  
が、強く摘まんだまま離しません。

「痛ァーい」

「ハハハハ、成る程、君は鼻が一番いい」

「嫌々、そんなひどい事、嫌」

やっと手を離しました。

「いやよ、そんなの」

私はプンプンおこりました。

「そうおこるなよ、まあ機嫌なおしに一パイ  
飲めよ」

私は出されたコップのビールを一息に飲み  
ました。

「お見事お見事。君、上を向いた時の鼻の穴  
が、これ又素晴らしいね、もう一ぺん、一寸  
上を向いて呉れよ」

「いやよ、何云ってんのよ、さっきからいや  
らしい事ばかり」

「そう云わずに。ほれ、そう暴れたら駄目だ  
よ。おい君、顔を起して呉れないか」

向かいのお客に声を掛け、私の両腕を掴ん  
で後へ捻じました。

「痛ァーい。いやーん、いやーん」

向かいのお客はニヤニヤしながら、俯向い  
た私の顔を両手ではさんで仰向けしました。

「いやいや」

「うーん、この娘の鼻の穴の恰好はいいね。

ハハハハ、性的魅力を感じるね。では、ボク  
もおもむろに摘まましてもらおうかね」

「いやいや」

いやがる私のアゴを片手で抑え、ゆっくり  
と、大きな手で私の鼻をギュッと摘まみ上  
げました。

「アハハハハ」

摘まんだまま左右に動かし始めるのです。

「いやいや、痛い、いやってば」

怒り心頭に発した私は、有りったけの力を  
出して、お客に体をぶっつけ、掴まれた手首  
を思い切り振り離し、向かいのお客の手を力  
一ぱい引っぱたきました。

「済まん済まん。そうおこるなよ。大分まわ  
ってるんでね、まあカンベンして呉れよ」

本気でおこった私に二人は謝り始めまし  
た。ふと私は、自分の腕を見ますと、私の腕  
時計のガラスがわれて居るのです。テーブル  
にでも当たったのかしら、耳に当ててみると音  
は正確に刻んでいます。私の時計は、型も古  
く、値段も安い物ですが、かなり狂いの少い  
時計だったのです。

「時計、どうも無かったのかね。ガラスだけ

かい？ そう。ところでどうだい、いい時計  
を買ってやろうか、そんな古臭い時計じや君  
の様な美人に似合わないよ。ええ？ 但し今  
晩これからボクとつき合って呉れたらね」

冗談とも本気ともつかない態度で云いま  
す。侮辱されたように感じた私は、きっぱり  
と

「お断りします。帰って下さい、もうカンバ  
ンです」

ピシッと止めをさしました。

私は時計を腕から外し、ハンケチに包みま  
した。ああ、この時計が、今夜これから、一  
生心に焼つけるような災いの原因ならうと  
は、夢にも思いませんでした。

私は帰り支度を済ませホールを出ました。

福原口の停留所で市電を待ちましたが、仲々  
来ないので兵庫駅まで歩いても知れてると思  
い、歩き出しました。そして永沢町を少し過  
ぎた頃、腕時計のガラスの事を思い出しまし  
た。ちょうど四、五軒向うに小さな一軒の時  
計屋があり、未だ店をあけて居りました。

私はその時計屋の店へ入りました。入れ違  
いに美しい女の人が出て来ました。主人らし  
い、三十五、六の小柄な陰気な感じの男の人  
が只一人、カウンターの上の散らばった女持



ちの腕時計を整理して居りました。

「あの、このガラスを入れて下さい」

「はい、いらっしやい。一寸お待ちになって下さい」

主人は私の手から時計を受け取り、隅にある仕事台の前に坐り、ガラスの沢山入っている

箱を取出し、合せ始めました。手持不沙汰な私はぼんやりカウンターの上の散らばった女持の腕時計に目を落しました。こんな良い時計を持てたら、今日のお客にあんな事も云われないのになあと、莫然と考えた時、魔がさしたというのでしようか、指先の直ぐ前の



俗に云う南京虫の時計が大きく私の心を捕えてしまったのです。やはり女は虚栄の動物なのでしようか。自分の手をほんの四五寸動かせば手に取れるのです。主人は、合ったガラスがないのかまだ出来ません。私は顔を上げたまま右手をじりじり動かししました。指先に時計が触れました。「大変な事をしかけている、いけないいけない」そう良心は叫んでいるのですが、遂に私は悪魔の囁きに負け、時計をつまんで、そっとハンドバッグの中へ滑らせてしまっていたのです。ああ、とうとう私は盗みを働いてしまったのです。

その時、主人は立上りました。私は悪い事をしたという自責からまともに主人の顔が見られず、下を向いたままハンドバッグに手を入れ、努めて冷静に云いました。

「お幾らですの？」

主人は、黙って散らかった時計をケースに並べ始めました。私の頭から血の気がスーッと引いてゆきます。並べ終ったケースの中には一個分の空間が出来ています。

「えーっと、七千二十円頂きます」

「ええッ？」

「七千二十円です」

「何の事です？ そんなに」





「南京虫の代金とガラス代です」

「何の話です。それは？」

私の態度に怒気を表わした主人は、

「白っぽくれるな。このケースにキチンと入った時計が、この通り一個足らんやないか」

「そ、そ、それがなぜ私が盗った証拠になるんです。失礼な」

「おい、おとなしいに下手から出たらええ気になりやがって、そんな綺麗な顔して、図々しい奴やな。おいそのハンドバッグをこっちへ貸してみい」

「な、なんの権利があつて女の持物を調べるんです。本当に失礼な」

所詮及ばない事とは知りながらも突っかかって云い返しました。

「まだ強情張る気か、えーおい。おとなしいに謝ったら勘忍したる思てんのに。ようし、そしたら云うけんどな、あすこの仕事台の上にはな、お客さんを仕事しながらでも見えるように小さい鏡が置いてあんのや、その鏡で今さっきあんたが盗ってハンドバッグの中へ入れるんを見たんや」

ああ、知らなかった。見られていたとは、

まさか。主人は腕を延ばしてハンドバッグを引ったくり、時計を取り出しました。

「どうや、これでもまだ白を切る気か」

私は観念して必死になって謝りました。

「済みません、本当に悪い事をしました。つい出来心でやったんです。済みません、許して下さい」

「おい姐さん、あんたは万引の常習やろ。今までもちよいちよいやとったんやろがな、ええ？」

「いいえ、いいえ違います。初めてなんです。つい出来心でしたんです。本当に出来心でやったんです」

「嘘つけ。図太い奴やお前は。警察へ行こう今店を閉めるからそこへ掛けて待っとれ」

警察！ 私は目の前が真暗になりました。

私が警察の厄介になれば、家の者は、近所の人は何と云うだろう。どんな事があっても、どんな事をして、警察問題にされたくない。そうだ、どんな事をして。

戸締まりを終った主人に半泣きになって、すがりつき

「ね、お願いです。許して下さい。警察だけは勘忍して下さい」

「そんなら、このまま帰してくれ云うんか」



「いえ、ぶつなと蹴るなど、あなたの気の済むようにして下さい」

「アホな事云うな、女をなぐって何になるねん。とにかく警察へ行こう。そしたら初めてか常習かわかんねん」

「本当に初めてなんです。お願いです。警察だけは許して下さい。他の事だったらどんな事でもしますから」

「どんな事でも？ ふーん、どんな事でもなあ？」

主人は、私の頭の先から足元までジロリと見下しました。

「あなたの商売は、何やねん？」

「ダンサーです」

「ふーん。今あなた、どんな事でもする云うたなあ？」

「ええ、許して頂けるんでしたら、どんな事をされても構いません」

「本当に構へんねんな？」

「ええ」

「よっしゃ、そんならあなたの望みで、あなたの体を自由にさしてもらうで。もしそれが嫌だったら警察へ行くだけの話や」

「いえ、どんな事でもされますから警察だけは」

「姐さん、あんたそない云うけんとな、わいがどんな酷い事しても、いやらしい事しても嫌がれへんねんな？ 云われた通り何でもするねんな？」

「はい」

「今云うた事忘れたらあかんで、なあ」

「はい」

罪人の汚名から逃れる為には一夜の苦痛を耐え忍ばねばと、私は覚悟しました。

「そしたら、座敷へ上れ」

私はホッとしました。主人の案内で通されたのは六畳の客間でした。直ぐ隣の四帖半の部屋に机、椅子、タンス等が置いてあります。が、なぜか女気が全然ありません。

「わいは一寸帳面するさかい、ふとん敷いとしてくれ」

と、押入からふとんを引張り出しました。

私は客間の卓台を部屋の隅へやり、床を敷き電燈を小さい球に切替え、暗くし、服を脱いでシュミーズ一枚になり、ふとんの中へ入りました。天井を見つめながら（私の家の者達はどう寝ただろうか。私が帰らないので心配して居るのではないだろうか。明日の朝、帰った時どう云い訳しよう。いや、そんな事より今夜これからの事）私は不安と観念の入交っ

た気持で、隣の部屋に耳を傾けました。しばらくして、パタンと帳簿の閉じる音がして、それから寝巻きに着換える気配がしました。私は体を横にし、ふとんの端で顔をかくして体を固くしました。無言のまま、主人が近づいて来ます。

枕元に立つと、ふとんに手を掛け、体を滑り込ませて来ました。私は一層体を固くしました。主人はそーっと私の体を後から抱き締めました。ぞーっとするものが、背すじを走ります。しばらく抱いていたかと思うと、そのまま私の背中を押して俯伏せにし、いきなりふとんをめくり上げ、私の背中の上にどっかと馬乗りになりました。

「うーん」思わずうなりました。それから両手を掴まれ、後にまわして捻じ上げられ、背中の上で手首を組合せられました。何時の間にか用意したのか細紐を取り出しました。あっ、縛られるのです。私を縛り上げ、体の自由を奪って、どんな目に逢わそうと云うのでしよう。怖い。思わず手を引込めました。

「おい、嫌がるんか？ さっきどんな事でもされる云うたんと違うんか？ ええ？」

ああ、私は今夜一晚、この人の奴隷なのです。私の体はこの人の玩弄物なのです。諦め



て、両手を背中に回しました。

「もっとしっかりと、手首を合さんかい、まだまだ」

細紐が幾重にも手首に巻付き、締め上げられ、しっかりと縛りつけられました。それから、胸に手を廻し私の体を抱き起し、坐らせました。そして別の紐で、二の腕から乳房を回して二巻きして背中で結び、残った紐を両手首の間を通して吊り上げるようにギュッと締め上げられました。

「痛い！」

思わず声を出しました。

「痛いかな？ ふふ、わいは変つとるからな、その積りでな。さあこっち向いて坐れ」

仕方なく主人の方を向いて坐りました。主人は両手を伸ばして、俯向いた私の顔を両側から挟んで仰向けしました。そしてじっと私の顔を見ます。しばらくして思い出したように手を離し、隣の部屋の机の電気スタンドを外して私の直ぐ前に置き、傘を取り、ソケットに差し込み、パッと点けました。恐らく百ワット位の光で目のすぐ下から照らすのです。何の為にこんな事をするのでしょうか。私はまぶしいので目をかたく閉じました。前に坐った主人は又、私の顔を両手で挟み

ぐいと顔を仰向けしました。そして、ぐるぐるゆっくりと私の顔を回すのです。

「ふふ、何処から見ても綺麗やな。ええ恰好しとる」

ああ、この人も、私の鼻に興味があるので。手を離れた主人はチリ紙を取り出し、細く破りコヨリを作り始めました。両手を後手に縛り上げられ、しかもどんな事でもされると云う絶対的な条件の下に私の鼻の穴にコヨリを差込んで弄ぶ積りなのです。これから後、どんな酷い目に逢わされるのでしょうか。改めて私の心に恐怖の念がひしひしと胸を締めつけて来ました。

私は無意識にあごをすっきり胸にすりつけました。主人は胸を縛った紐に左手を掛けて私の体を引寄せ、抑え、右手に持ったコヨリを鼻先へ持って来ました。先が、鼻孔の入口に触れました。反動的に私は首を振りしました。しかし主人は無理をせずに私の嫌がる表情を見ます。右へ逃げれば右、左へ行けば左と追って来ます。

「うふふ……」

逃げまどう私の姿を充分楽しむのです。

「さあ、もうええ加減にじっとしたら、どないや。ええ？ 判つとるやろな？」

ああ、そうだった。

私はどんな事をされても嫌がってはいけなかった。甘んじて辱かしめを受けねばならないのだった。

私は、俯向いたまま、じっと動かずに観念の目を閉じました。

「さあ、もう動いたらアカンで」

コヨリが、徐々に左の鼻孔に入ってきて、穴の内側がムズムズして来ます。小鼻のピクピクするのが自分でも判ります。だんだん奥の方へ入れて来ました。思わずクシャミが出そうになります。すると、コヨリを「すつ」と抜きます。そして又、ゆっくりと差し入れて来ます。出そうになると又抜きます。そして今度は左手で私の髪の毛を掴んで引き、仰向けしました。

「あんたの鼻は、ほんまにええ恰好しとるし綺麗やな。ふふ……」

鼻にコヨリを入れ、指先でクルクル廻しながら奥の方へ入れて来ました。ああ、ああ耐らない。

「ハ、ハ、ハクション……」

大きなクシャミが出てしまいました。そして右の鼻孔にも差込んで、クシャミをさせました。



「うふふ……」

コヨリを棄てた主人は、ゆっくりと私の鼻を摘まみ

「柔かい鼻やなあ、ふふ……」

摘まみ上げて、左右に捻じ上げるのです。

「痛い！」

「痛いか、うふふ……」

鼻を引張ったり押ししたり、さんざんもみくちやにするのです。そして親指を鼻の頭に当て、下から上の方へグイと押し上げました。

鼻孔を押拡げて中を覗き込まれます。

「何とも云えん、え、鼻しとるナ、え、」

そのままぐりぐり指先を動かします。長い間、穴を見てから髪の毛を離して、そのままどんと後へ押され仰向けに寝かされました。腕が痛い。立上った主人は私の体をまたいでお腹の上にどっかと馬乗りになりました。

「うー、痛い」

腕が折れそうです。主人は手を伸ばしてシミーズの肩の紐を外し始めました。恥かしい、主人の目は私の顔を見ているのです。そして電気スタンドを私の顔の直ぐ横に置き、一寸腰を浮かして手を伸ばし、私の鼻を摘まんで引張り上げ、体を少し起こさせ、その間に枕を私の背中の辺りに押込んで手を離しま

した。それで私の胸は大きく突出し、逆立ちにされたように顔が下になります。しかし、その為腕は楽になりました。すると今度は主人は立上り、私の顔をまたいで直ぐ両側に顔を挟むように各々足を置き、反り上った胸の上に腰を下しました。そして乗ったまま体をゆすぶるのです。乳房が押しつぶされそうです。

「うふ、痛い、うー勘忍して下さい、うーうーうー」

けれども主人は容赦なく私の苦悶の表情を笑いを浮かべて楽しむのです。そして更に、棄てたコヨリを拾って私の鼻を押上げ、穴の中に差入れ、鼻孔をピクピク拡がらせるのです。もがこうとするのですが、自由になりません。

「わいが変わつという事が判って来たやろ？ ふふ……。この鼻の綺麗な色はどないや、えふ、ふふ……。ほれどないや、まだか、ほれほれ」

「クシヤン、クシヤン」

「ハハ……。うふ……。こそばいか？ うーん？ かゆいのか？ そうか、うふ……。かいたるかうん？」

クシヤミのため、湿りを帯びた左の鼻孔に

主人の右手の小指が突込まれて来ました。

「うーうーうー」

「うふふ、何処がかゆいんや、えふ？ もっと奥の方か、よっしゃ、こうか、えふまだか？」

「痛い！」

勝手な事を云いながら突込んで来ます。

「うん此処か？ よっしゃ、ほれどうや、えふ？ どうや」

ぐりぐり鼻をほぜくり回すのです。そして右の鼻孔も、左手で撫ぜ廻し、小鼻を内側から摘んでめくるように内側をむき出しにします。

「痛い痛い、離して下さい。カンニンして下さい」

やっと離してくれました。立上った主人は煙草に火をつけ、一服しています。

確かにこの人は変っている。普通の男が感じる所に興味を持たず、顔、それも鼻に魅力を感じるのだ。しかも縛り上げた状態で。

一息入れた主人は私の体を抱き起し、床柱の前に立たせました。そして帯を持って来て床柱に胸を縛りつけました。そして隣の部屋から椅子を持って来て前に置いて坐り、私の姿をじろじろ舐めるように見廻します。ギリ





ギリ縛り上げられ、腕や手首に紐が喰込み痛い。恥かしさと苦痛にゆがむ私の姿態をゆっくり眺めるのです。そして手を伸ばしてシュミーズの裾をめくり上げ、胸に回した帯に差込んで止めてしまいました。

「あゝ」

私は身悶えました。体の自由を奪われた、女性が一番恥かしい姿を、腰をかけて主人は笑みを浮かべながら見物するのです。しばらく眺めてからシュミーズを元通りにして、隣の部屋から紙ハサミの大きなのを持って来ました。あゝ、又鼻を玩具にする積りなのです。主人は椅子に坐ったまま、紙ハサミを手にしてニヤニヤ私を見上げました。

「ねえ、そんな事、勘忍して下さい。本当にもう」

「わいは変つとるから、どんな事してもかまへんか云うとったやろ？ えゝ、かまへん云うたん違うんか？」

「でもそんな事、あんまり」

「そやから、どんな酷い事でもいやらしい事でもしてもえゝかて始めから断った筈やで。まあおとなしいに。ほれ動いたらアカン云うのに。ほら、動いたら余けい痛い、そう、じっとしとけ」



片手で私のアゴを抑え、紙ハサミを大きく開き、鼻の付根まで押しつけて離しました。

「痛い！」

飛び上る程痛い。予想していたよりずっと痛い。

「痛い痛い。取って下さい、早く早く、辛抱出来ません。痛い、早く」

私は思いきり顔を振り回しながら、鼻声で頼みました。主人はにやにやと私が苦しんでいるのを眺めているだけです。あゝ痛い、鼻が根本から切り取られるように痛い。思わず大声で叫びました。

「あゝ切れる切れる。痛い痛い。助けてえ」

私の声の大きさに驚いた主人は、あわてゝ紙ハサミを取り外し、大きな手で私の口をふさぎました。

「アホ、大きな声を出すな、びっくりするやないかい。山の中の一軒家と違うんやぞ、アホ」

今挟まれた鼻の付根の辺りを指先で触り

「どないもないわい」

口を抑さえられた為、大きく鼻で息をしている私のふくらんだ小鼻を指の先で押したり撫ぜたり摘まんんだり、そして又、ブタの鼻のように上へ押上げました。

「ふゝ……、何とも云えんなあ」

そう云った主人は、口を近づけ、私の左の鼻孔に「プー」と息を吹き入れました。

「うー」

男臭い息が鼻孔に入って来る気持悪さ。それから口の手を一寸離れたかと思うと、首の後ろから左手を回し、又しっかりと口を抑え私の首を曲げて仰向けしました。

「うーうーうー」

主人の目は、フーフーふくらむ私の鼻孔に喰いついたままです。

「うーうーうー」

やっと手を離しました。とたん大きく開いた左の鼻孔に薬指を捻じ入れて来ました。指が太いので入口を一寸入っただけです。それを無理に押し入れようと、ぐいぐい捻じ込んで来るのです。

「うーうー」

私は痛さに呻きました。

主人はそのまま手をぐいと持ち上げ、更に私の顔を上向け、右の鼻孔を覗き込みます。

「フフフ……、バタバタせんとゆっくり楽しませてもらうで、観念せなアカンで、な、えゝ？ この綺麗な鼻、フフフ……ぞくぞくして来るがな」

身悶え苦しむ私の鼻孔を突つつき回すのです。長い間、いじり廻した揚句、ようやく手を離しました。そして柱に結びつけた紐をほどきました。

「ねえ、お願いですから、もうそんな事、勘忍して下さい。他の事だったらともかく、お願いです。とにかく紐を解いて下さい」

しかし、主人は無言のまま、紐尻をぐいと引張り、椅子に私を無理やりに坐らせ、縛りつけました。

「ねえ、お願いです。縛るのは勘忍して下さい。おとなしくしていますから」

私の云う事には耳をかさず、主人は隣の部屋へ行き、タオルを手にして来ました。

「わいはなあ、おとなしいにしろっても、とにかく縛り上げんと気に入らんや。それかな、夜中やでな、一寸静かにしてもらわんとな」

そう云った主人は素早く私の鼻をキューツと強く摘まみ上げ、軽く開いた口へ丸めた紙屑を押し込み、その上からしっかり鼻口をタオルで猿ぐつわをしてしまいました。

「うーうーうー」

「大きな声、出されたら困るでな」  
椅子にくくりつけた紐を解いて、立たせ、



胸を縛った紐だけほいて、後手を掴んで持ち上げ、椅子のもたれの外側に腕を通して潜らせました。そして、前に回って足首を揃えて紐でくくり、その紐を椅子の下を通して後に回し、後手首に通して、ぐーっと締め上げて縛りつけました。椅子のもたれの堅い木が直接背中当たって痛い。身動きも出来ない位です。もはや、自由になるのは首から上だけです。何か云おうとしても声にはなりません。

女性の手足の自由を奪って、映画などに出て来るようにムチで叩いたりする積りなのでしようか。出来心を押え切れなかった罰とは云え、とんでもない人に捕まってしまった。これからどうなるのだろう。これだけ縛っているのにまだ足りないのか、その上、私の首に紐を一巻きして軽く結び、後から回し、椅子の下を通して前に持って来て、その紐尻を手にして私の前に立ちました。

私は主人の目が恐ろしかった、何だか狂的に感じる目と合うのが怖かった。だから目を閉じて、反った体ながら俯向いて固くなりました。主人は手にした紐を徐々に引張りました。それにつれて私の顔もだんだん上に向けられて行きます。首が締まります。苦しい。

「うーうーうー」  
「ふ……。ほれ、もう一寸上向いて、そう

そう」

顔が水平になるまで引き上げられました。

「うーうーうー」

全身を締め上げられ、悶える術もありません。只、苦しい。その上、主人は私のひざの上に坐るではありませんか。

「うーん」

私は思わず大きく呻きました。痛い痛い。身動きも出来ずに苦しむ私の表情を笑みを浮かべて見るのです。やっとひざから下りて引張った紐の先を足首に結んでしまいました。そして鼻口の猿ぐつわのタオルを鼻からずり下げ、口だけをしっかりと締め直しました。

「さあ、これでよしと。さあーって、どないしたろかな。この鼻をどないしていじめたるかな、この鼻を」

横に立って、手を伸ばして私の鼻を摘まんで捻じめるのです。

「うーうーうー」

摘まんだまま後に回りました。そして手を離し、体を乗り出してのぞき込みました。そして左手で私のうなじ、あご等をくすぐり始めました。こそばいような、何とも云えない気味悪さです。

「白い綺麗な肌しとるなあ」

「うーうーうー」

そして右手の指先で、私の鼻の頭を押上げ覗き込みました。

「ふ……、この綺麗な鼻へ何を入れたら面白いやろな、ふ……、そうや、面白い事がある」

手を離れた主人は店の方へ行き、何やらゴトゴト色んな物を持って来ました。そして又ひざの上に坐りました。痛い痛い。ぎゅーと縛り上げられ、猿ぐつわを掛けられ、翻って下さいというように、恥かしい鼻孔を余す所なくさらけ出し、完全に自由を奪われて意のままに鼻孔を弄ばねばならないのです。

私が美しい鼻孔の持主である事が却って災いを大きくしてしまっているのです。今度はどんな風に私の大切な鼻を責めるのでしょうか。叫びたいけれど、声にはならない。

以上、ここまで書いて、私はふと考えました。字も下手で判り難いし、こんな事を今まで一度も書いた事もない私の作品が果たして御誌の御気に入るかどうかわからない。しかしここに書いた事は、実際に私が経験した話だということだけ、果たしてどの程度に実感が出ているか自分自身ではわかりません。

この話の続きはまだまだあり、この二倍位になるでしょう。本格的に鼻孔を責め抜かれるのは、むしろこれからですが、今書き出したように作品価値があるかどうか、結果を見てから続きを書けば、と思います。



## 長篇連載MS小説

## 宇宙のどこかで

I 八ある奴隷囚の告白からV I

佐 治 麻 造

宇宙のどこかで

翌朝、又曳き出された私達は、今度は懲戒の実習に供せられました。

「お勉強のお役に立たせて頂いて、ほんとに身に余ることでございます。ありがとうございます。」

生徒達の前にひれ伏して、私は代表として挨拶させられました。昨日一日中、無抵抗の私達を扱った生徒達は、綽々と優越感を持って、私達に君臨し、品物か虫ケラのように扱いました。

昨日の復習の革鞭から始まって、鋼線入りの鞭、そして恐ろしい電気鞭を、うら若い生徒達は眉一つ動かさないうで次々と私達に加えて行くのでした。電気鞭と擦り器の数が少くて、その実習でかなり時間を食い、窄衣と第四種足錠の練習で丁度おひるになりました。

朝、檻から出るや、施された鎖鐐の金具を床の鉄環に結合され、革の窄衣をギリギリ締めつけられたまゝの私達は、正座のお尻をペタンと床につけて、口から泡を吹き乍ら、長いおひるの休み時間を苦しみ通したのでした。横になったり、立ったりは勿論、腰を浮かせる事すら出来ないのは仕方ありませんが、せめて脚を伸ばせたらと思います。しかし両足首を繋ぐ鎖が床の鉄環の更に後ろに在るのですからどうも出来ません。足首を立てゝ、向う脛の責苦を軽くするのがやっとのことでした。

施されている窄衣も大分進歩したもので、両側も革紐ではなくて数個宛のネジ金具で締め合わせる様になっており、緊迫の圧力を示す計器すら四コ程ついておりました。おひる休みが済みますと、窄



衣だけは除いて呉れましたが、更に長い事そのまま放置されました。漸く集って来た生徒達は何かスポーツでもやっていたのでしょう、顔を汗で紅潮させて試合のことを大声で話していました。婦人教官がやって来て私達は床から解かれ、足錠も四種から三種に嵌め替えられました。窄衣の苦しさに粗相した囚人達は口で始末させられ、生徒達は顔をしかめました。

「電気鞭の時みたいにゴム猿又をはかせときやよかったねえ。」

「馬鹿だな。そしたら、さっき迄みたいに床にお尻を坐り繋ぎに来ないじゃないか。」

「アッ、そうか。」

もはや痛められ切って眼も定かではない哀れな囚人達は、情容赦もなく、今度は鉄砲手錠、海老責め、そしていろいろな吊るし責めの教材にされました。檻に戻される時には、私は立って歩くことが出来ましたが、女囚の全部、そして男囚も半数程は立つことが出来ないで、ある者はいざり、ある者は尺取虫の様に這って、それでも鞭と鼻環の痛さに死物狂いで檻へ追われたのでした。

「大分弱ってるわね。死にゃしないかしら」

檻から離れ乍ら一人の娘さんが呟きました。

「余計な心配するんじゃないよ。死んだっていいのよ。当然受けるべき刑の苦痛を耐え切れない様な懲役囚はね、死んだって仕方ないわ。明日の日曜は、どこへ行くの？ええ」

檻の床にボロ切れの様に打ちつけられて身動きする体力もない私達の耳に、婦人教官の声が聞えて来て遠ざかりました。

翌日の日曜一日を薄暗い檻の中で、うごめいて過した私達は、僅かに体力を回復した様でした。月曜日の朝、曳き出されて鎖褌を締

め上げられ乍ら、今日一日の恐怖に打ちひしがれ、鎖を鳴らして身悶えし、せめてもう少しの間、檻の中でうずくまっていたいと思いますが、嫌も応もある筈なく、女囚の鳴咽を聞き乍ら曳かれたのは校庭でした。

「今日は万一の場合、即ち、反抗されたり、逃走されかけたりした時の扱いについて少し稽古します。えゝと、囚人の拘束度は、房外において最も一般的な状態、即ち自由度四の足錠を腰に吊り、手は前で自由度二の遊離状態としましょう。鎖褌は、まあつけときましようかね。嵌口具は、この場合、外しておきます。これ、お前達……」

婦人教官の視線を感じて私達は、ビクッと身を固くしてしてうなだれました。

「今日は反抗してもいいわよ。生徒一名に対してお前達も一匹。前手錠の鎖を腰枷に連結されて鼻縄をつけられたら一巻の終りという訳よ。思い切り暴れてもいいし、逃げ出してもいいの。三分経って未だ処置されないで頑張ったら褒美を上げるよ。ほんとに反抗してもいいんだよ。なまじ手加減する様だったら、却って懲戒するからね。」

先ず四名の囚人が曳き出され、自由度二の前手錠にして生徒達と一人宛二米程離れ、相対して立ちました。教官の合図と共に生徒達は躍り掛りました。二人の娘さんに凄いい見幕で迫られた二人の女囚は、一瞬恐怖に戸迷った様でしたが、弱々しい悲鳴を挙げて二、三步逃げようとし、足鎖に躓いてよろめいた所を足払いされ、いゝ合せた様に地面に倒れました。鎖褌に手を掛けて仰向けにし、女囚の両腿を片膝で上から押えつけた娘さんは、手錠の鎖を掴んで、痛さ



にもだえる女囚の両手を腰枷に引き付け、カチリと錠で連結してしまします。激しく両頬にビンタを加え、顎を押えつけてポケットから取出した捕縄を手早く鼻環に結び、身を起して立上った婦人看守の卵はグイと鼻縄を引きました。土にまみれて立ち上った女囚の背と腿に革鞭が飛び、女囚は恨めし気に呻きました。

「二人共、三十秒足らずね。足払い、仲々見事だったわ。よろしい。けど女囚は大抵こんなもんよ。あっちの方は未だの様ね。」

向うの方では、二人の男囚がそれぞれ少女の様な婦人看守の卵に追い回されていました。掴まれた手を懸命に振りほどいてガチャガチャ鎖を鳴らして転びころげて逃げ回り、すぐ又追い付かれてはもがいています。年かさの方の囚人は、やがて力つきて息も絶え絶えにガックリした体を荒々しく処置されて鼻縄を曳かれ、膝でいざって引き戻されて来ました。もう一人の若い男の囚人は仲々頑強で、不自由な手で必死に反抗していましたが、遂に鮮かな背負投げを喰らって地べたにのびてしまいました。

「三分には未だ二十秒ばかりあるわね。しかし、囚人を気絶させるのは最後の手段ですから、これはあなたの負けね。」

女子生徒は口惜しそうに伸びた囚人の脇腹を蹴り乍ら、顔の汗を拭きました。気絶した囚人は婦人教官によって活を入られます。

「ホラ、御褒美よ」

一コの古い餡パンを投げられ、側のバケツの水を呑む事を許されてガツガツと食べ飲んで、私達を羨ませました。私の番が来て、古パンと水にありつこうと張り切って立ち向いました。運悪く私の相手はずんぐりした体つきの、団子鼻の娘さんで、力も強く柔術も達人なのです。私は二、三日の減食で空腹ですし、長い間の悲しい習

慣で、看守の制服を見ますと手足が萎えてしまいました。逃げかけた途端、肘をムズと後から掴まれ、心得のある掴み方の痛さに呻き、足払いを食って倒れるや否や、もう私の手錠は腰枷で押えられ、打身に呻く間もあらばこそ、鼻環の痛さに涙をこぼし乍ら立ち上りました。刺青の跡のある例の男囚は、生徒の中で最も小柄な娘さんの相手をして、とうとうパンと水をせしめました。

女子生徒が男囚と女囚をそれぞれ一匹宛扱った後、今度は男子生徒が交替します。男相手では諦める外ありませんが、一生懸命にやらないとどんな懲戒を食うか知れませんか、空腹と拷問に弱っ





た体を鞭打って相手を勤めました。

土まみれになって坐っている私達の傍らで、婦人教官の講評が済んだ頃、七、八名の婦人が颯爽とやって来ました。

「あーら、丁度よかったわね。ちょっと使わせてね。電話しといったでしょ」

話の工合では、彼女達は婦人刑事の卵の様でした。

「お使いになってもいいですけど、張合いがありませんわよ。逮捕術の稽古になるかしら。」

「ホホホ、いゝのよ、運動だと思えば。男囚ばかり生きのいゝのを八匹ばかり貸してね。」

鼻環と首環そして腰枷と鎖褌だけにされ、古い柔道衣を着せられた私達八名を、八人の婦人はキャーキャー笑い乍ら争って選び合います。私もその中に入れられ、忘れていた衣服の感触を泌々と感じました。私の相手は一文字眉の濃い、瓜実顔の色白い二十七、八の婦人です。

「いゝかえ？　これから私がお前を逮捕する訳だからね。この校庭の中なら逃げ回ってもいいし、手向ってもいいのよ。勿論拳銃は出さないことにするわよ。私が諦める迄逃げたら、キャラメルでもやるからね。ホホホ。」

今度は手も足も自由ですし、是非キャラメルでもせしめ度いものだと哀れな事を考えた私は、矢庭に駆け出しました。十数年の間、殆んど常時、足を鎖錠で拘束され、膝腰を曲げねば踏み出せない慣いでしたし、走ること等は殆んどなかった両足はガクガクする感じで、歯ぎしりする程妙な工合でした。それに、走り出すと鎖褌のすれる痛さ。それでもハイヒールの婦人よりは早いと見え、背後に遠



のく婦人刑事の姿を盗み見て安心し、どこを逃げ回ろうかと見回した途端、首に縄が掛って引絞られ、息が詰って立止りました。

「フフフ、一ぺんで引掛ったわ」

投縄というものがあるとは知りませんでした。首を締める縄の輪をゆるめて脱けようと夢中でもかく私の背後から、縄を手繰って引き寄せ乍ら、婦人刑事が笑って近寄ります。

「さ、手をお出し」

私は矢庭に手を上げて捕縄を引ったくろうとしましたが、素早く縄尻を引上げられ、つんのめって喘ぎ、目を白黒させました。

「首が締るだけだよ。おとなしく手を出すの。」

いきなり右手首を取られてねじ上げられ、悲鳴をあげてしまいま



した。私の手首を離した婦人刑事の右手が、ポケットからキラリと手錠を取出すのが見えました。次の瞬間には、ダラリと垂れて動かない私の右手首にガチャリと鋼鉄の環が喰い込んでいます。縄尻を握った左手に手錠を持ち替えた彼女は、右手で私の左手を掴んで手錠の一方の環に引き寄せ、ガチャリと少しゆっくりと嵌め終えました。

「次に腰縄を打つんだけど省こうかな。苦しかったかえ？ 首環があるから、そんなでもなかったろ？」

婦人刑事は勝ち誇った顔つきをして、私の首に巻き付いた縄を解いて呉れました。

「もう一回やろうね」

手錠を外して貰った私は、今度は投縄に注意して逃げ回りましたが、とうとう息が切れて追い詰められ、へたり込んだ所を襟を取って引き起され、ふりほどいて手むかいしようとするのを投げ倒され、今度は後手に捕縄を掛けられました。

「矢張り、ハイヒールだと技がきまらないわねえ。」

彼女は白いハイヒールを脱いで心配そうに調べるのです。私はそれで赦され、捕縄を解かれて古柔道衣も取上げられ、再び自分で腋鎖を締めつけ、足錠を嵌めて腰に吊り、後手錠に致しました。

「面白かったわ。けど少し張合いがないわね、やっぱり。ホラ、一つお食べ」

キャラメルを一つ投げ与えられ、私は口で拾って包み紙のまゝしやぶりました。他の男囚達の中には、何回でも繰返してなぶりものにされ、終いには足許に跪まずいて両手を差出し、赦しを哀願している者もありました。

その日の午後は、再び革鞭の実習で、私達はヒューヒュー云わされました。

翌日は、朝から労役の監視の実習で、広い校庭や校内の廊下等を、二人宛鎖揮の金具を連鎖されて追い回され、這いずりました。そして日暮れの街を珠数繋ぎにされて、空腹のため重い鉄鎖にふらつきふらつき、拘置所へ曳かれて帰ったのでございます。

## 罪 石

「お前達二匹で、これの一つずつ持って、第三未決監区画へ運んでおいで」

ある朝、八〇四号と二人で罪石を運ばせられました。第三未決監区画では、五名の囚人が監房から曳き出された所でした。男囚三名、女囚二名、いずれも既に有罪の言渡しを受け、これから刑の宣告を受けねばならない連中です。罪石と云うのは昔行われていた制度で、近年復活したものらしいございました。裁きの庭に曳かれる囚人の背に負わせるもので、昔はその名の通り石でしたが、近頃は直径二十センチ長さ四十センチ位の半円筒形の鉄塊で、背負い鎖を両腕に通し、平面を背につけて、丁度リュックサックの様に背負わせる式になっています。上端は後頭部の位置に来る様になっていて、背の低い囚人に背負わせても、後手錠にするのに差支えはありません。

重さは四十斤と定められていますが、体力すぐれた男囚用として六十斤のものもあり、私がウンウン云って運んだ一つは、それでし

た。  
監房区画の出入口の鉄格子が閉められて居って、その看守も中



央監視台の近く迄行って立って眺めていますので、私達はあることも出来ず、片隅で正座しました。

「こいつ達のうち、四人は夫婦なのよ。フッフ、勿論正式の夫婦じゃないけどさ」

二人の婦人看守は三十五、六の男囚の赤い禪の上へ、更に鎖禪を締めつけ乍ら、出入口係の婦人看守に大声で云いました。

「あゝら、そうお。私、転動して来たばかりで知らないけど、あの夫と、そっちのグラマーが組なのね」

「フッフ、それがちがうのよ。大男は、ホラ例のプロレスラーだけど、その情婦がそのチビのやせ女なの。」

「へーえ。じゃあグラマーは、今鎖禪かけてやってる、その男とのね。」

「それが大違い。端っこの生白いやさ男なの、これっ。じっと出来ないの！」

浅黒い体の男の背後で、鎖禪の後ろの一本を引絞り乍ら婦人看守は叱りつけて、カチリと腰枷に連結しました。その男は手錠の嵌まった両手で彫の深い顔を掩って、

「お、俺だけがこんな……こんな目に会うなんてあ、あんまりだ。ちくしょう。くくく……」

身もだえして泣くのでした。

「その男は何なの？」

「これ？ これはね、例の公団の汚職事件の奴よ。続け様に方々で汚職が挙げられたじゃないのよ。一人は自殺したでしょ。こいつは何とか課の課長補佐してたの。上役の罪迄着せられてるって、さんざん喚くのよ。そして証拠もないのに上役はもっとと大きなこと

してるって公判廷で鎖を引張って暴れたりして。本当かも知れないけどさ、兎も角、それで余計罪が重くなっちゃって。馬鹿な奴よ。

この奴から先に始末しようよ、鎖禪はこれで全部済んだわね。」

「これっ。しゃがんで口を開けて」

「次は、手錠外したげるから、罪石を背負うのよ。」

「しっかりお立ちよ。重いのは分った事だよ。フラフラしないでシャンと立って。ボンヤリしないで、手を後ろに回すのよ。」

「鞭が欲しいのかい？ そんなに足を踏張ると足錠が締って来ても知らないよ。」

二人の婦人看守に、口々に罵られ小突かれて後手錠にされ、足の鎖を鎖禪の中心部に吊られた男は、重い罪石を背に膝を屈めて立って、ポロポロ涙を流しました。

「次は大男ね。お前の罪石は少し重いよ。」

手錠を片手だけ外されたプロレスラーの大男は、婦人看守を怨めし気に見て六十斤の鉄塊を背負い、おとなしく後手錠にされ、膝を曲げて足鎖を鎖禪に吊られ乍ら、背負鎖が肩に喰い込む痛さに呻きました。

「嵌口具はあと回しにして、次は五十五号。おい、お前だよ」

グラマーの頬に平手打が鳴りました。

「お、お願い。この……鎖の禪、少しゆるめて。もう、きつくてきつくて……」

「うるさいわね。お前のサイズが大き過ぎるんだよ。早く背負わないと……」

「こんな、鉄のおもりなんか、どうして背負わなければいけないんですの？ 鎖の禪だけでも恥かしくて辛いのに……」



「おや。今何云ったの？」

「罪石を背負うのが嫌らしいわ。ま、今は忙しいから、あとでゆっくり訳を体に教えて上げるからね。兎も角規則なんだから、泣いて仕方がないよ。焼燂当てるやろうか？」

次にやさ男が齒を喰い縛ってやっとの思いで立ち上り、両手を後へ回して喘ぎました。

「ホホホホ、えらいわねえ、坊や。御褒美に吊り鎖を長くしといて上げようね。歩く時には曲げなくちゃ駄目だけど、立ってる時には膝を伸ばしてられる様にね。お慈悲だわ。」

額に脂汗を浮べ膝を屈めてじっと立っていたグラマー女は、眼尻を吊上げて婦人看守を睨みました。

「今度はこのお嬢さんね。何が不足で家出なんかして、女愚連隊に入ったりして。その挙句、あんなレスラーとくっついて巻添えを喰ったりしてさ。あの男に惚れたのかい？女房があるんだよ。あの男には。」

「か、かんにんして下さい。とても……とても背負えません。かんにんして。このまゝで後手錠嵌めて下さいまし、お願い。」

ほっそりした眼の大きな娘は、身をふるわせて床の罪石の鉄塊を見下ろして両手を合せて哀願します。締めつけた鎖鐐の三本の鎖の端は大分余って、腰枷の金具から垂れ下っていました。

「お前、体は小さくても年は二十を越してるんだらう。サッサと背負うのよ。」

「あゝ、看守様。勘弁してやって下さいまし、その娘の分は私が背負います。そんな重い罪石を、可哀想な」

「お黙り!!」

「私は、兎も角嵌口具を嵌めて回るわよ。このウドの大木。おしやがみ!!」

肩迄もない婦人看守から往復ビンタを喰った大男は顔をゆがめましたが、中央監視台の二人の男の看守をチラと眺めて、よろよろと膝をつき乍らも必死に哀願します。

「この前、有罪と決まって裁判から帰る時も、あの女だけは鎖鐐だけで赦して頂いたんでござい……」

嵌口具が締めつけられました。

「八〇三号。この女を立たせておやり」

背負い鎖に両腕を通したまゝ、床で跪いているかばそい女囚の背の罪石を持ち上げて漸く立たせてやりましたが、可哀想で堪りませんでした。冷酷な婦人看守も流石に彼女の足鎖を吊ることだけは赦してやった様でした。

彼女を先頭にして、大男、グラマー女、やさ男、そして最後に汚職男の順に並んだ囚人達の股間に鉄鎖が通り、鎖鐐の中央の金具に連結され、革鞭が床に鳴って、鎖の音と呻き声がゆっくりと遠去かって行きました。

一時間程の後、事務所の前で靴磨きをしている私の前を十二、三名の囚人が汗みどろになってガチャガチャと入って行き、やがて鼻に孔をあけられる世にも悲しい嗅き声が、遠くで次々に聞えて来たのでした。

二、三日経って私と八〇四号とが、鉄丸を引摺り引摺り広い構内のコンクリート塀の下辺りの草むしりをしておりますと、先達ての汚職男が鼻繩を曳かれてやって来ました。もはや赤い褌も取上げられてしまった股間に鎖鐐が黒々と光り、両足には鉄丸をつけられて



います。

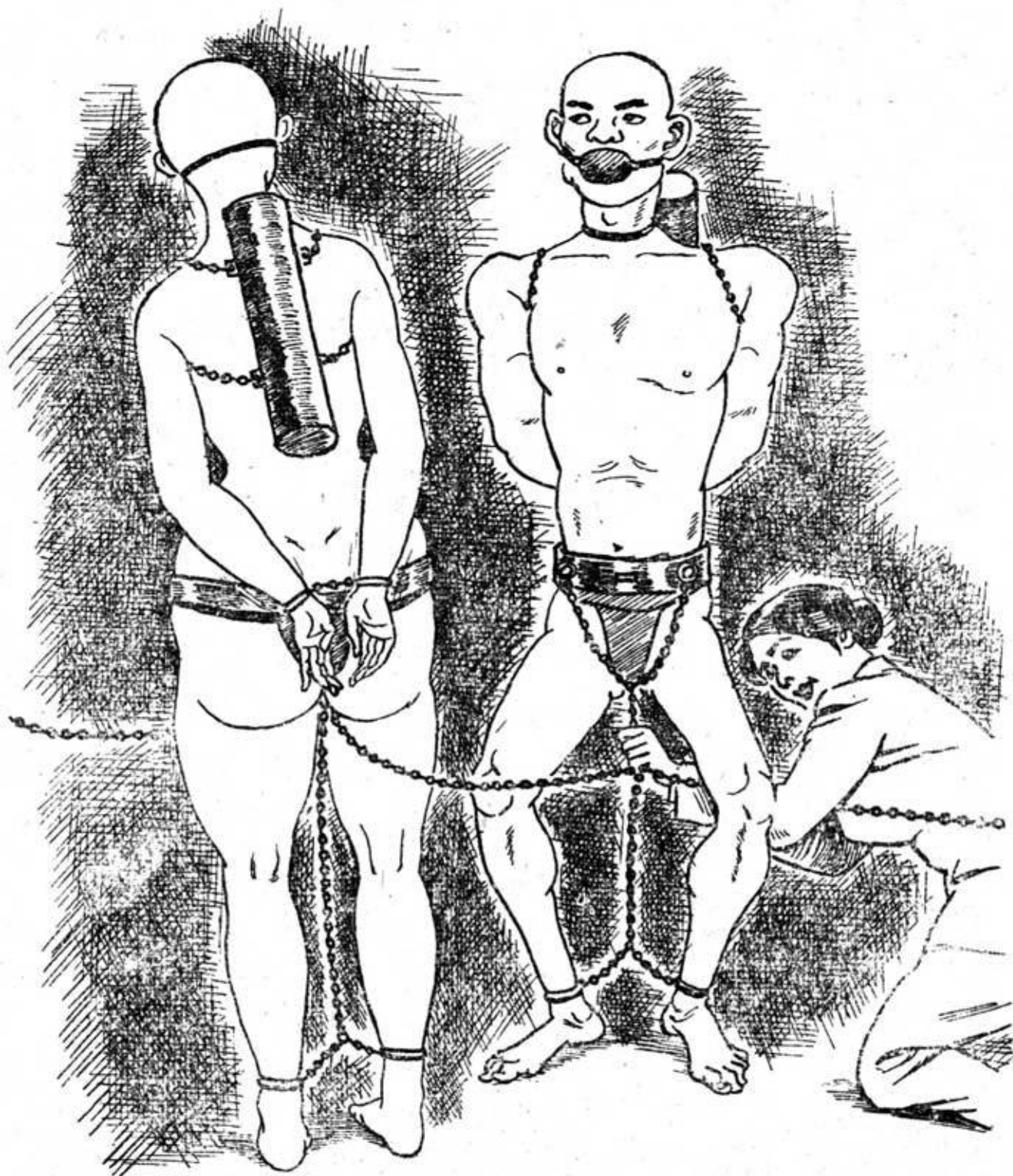
「お前達、この男と一緒に繋いでやるから、鍛えてやってくれ。こいつ、肉体労働をした事がないので、すぐ顎を出してさ、つきっ切りで鞭当てるのも面倒だし。鍛えておいてやるのが慈悲と云うものよ。」

私達二人も鎖鐐をかけられ、二米程の鎖で尻と尻を繋がれてしまいました。その鎖の中央に彼の鼻環が嵌め込まれます。

「お前達は草むしりはしなくともいゝのよ。構わないからこいつを引張っておやり。これっ七〇号。あとで調べて残っていたら、今度は鞭や窄衣位では済まないわよ。焼鑊当てゝやるからね。」

「けど、近頃ではしぶといのが多くなったわね。五、六年前迄はせいぜい電気鞭位で震え上ってさ、死物狂いになったものなのになえ。」

奇妙な私達三名の姿を見た人々は吹き出して嘲笑しました。私なんかはもう殆んど平気ですが、七〇号にとっては堪え切れない屈辱だったろうと思いました。私達の這い方が早いと彼は私達を繋ぐ鎖に手を掛けて引き止めるのです。癪にさわってグイグイ引張ってやりました。一時間も経たないうちに彼はへたばった様でした。窄衣なんかで痛めつけられているのですから無理



もないと、少し止って休んでやった途端、二人の婦人看守が現われて私と八〇四号は、したゝか鞭を食ってしまいました。

「ね、面倒だから、このまゝ連れて行かない？」



「そうね、いゝ考えだわ。」

立上って歩き出した私達二人の間に頭を下げて挟まれた七〇号は、後手錠にされて鎖輝に捕縄をつけられ、ピシリと尻を打たれました。

私達が互いに体を寄せ合って、連鎖をゆるめると、七〇号は鼻環にかゝる鎖の重さに堪えかねて更に低く低く頭を下げて呻き、しまいは膝でいざってついて来るのでした。建物の入口で足の鉄丸を除かれ、見物室へ曳かれました。私と八〇四号は命じられるまゝに鎖輝の金具の痛さをこらえてあぐらをかき、連鎖は床にのび、従って七〇号は顔を床すれすれに近付けて正座させられました。七〇号を見物しに来たのは、六〇年配の紳士二人と一人の娘さんです。

「あゝ、両側の二人は関係ないんだね。真中で這いっくばってるのが、そうらしいな、君」

私達二人を繋ぐ鎖は七〇号が夢中でもだえるにつれて、床にガラガラ鳴りました。

「ハ、そうらしいですな。しかし頭が坊主だし、顔が半分しか見えませんし……」

私達は立ち上がる様に命じられ、嵌口具を外された七〇号は正座して喚きました。

「くそっ、彼奴さえ自殺しなければ……お前達も一緒に、この俺みたいな姿にしてやれたのに……残念だ。俺は、口惜しい……」

鞭が鳴り、鎖輝の捕縄がゆさぶられ、しゃくられ、彼はオイオイ泣きました。

「ウッ、ヒーツ、鼻、鼻が千切れる……ヒーツ……」

「鼻が痛いのはお前が暴れるからだわ。じっと神妙に出来ないの？」

自分の分際が未だ分らないのかい？」

「アハハ、性懲りもなく逆恨みの世迷い事を喚いていますなあ」

「おい君、いゝ加減に自分の非を悔いて、神妙にしたらどうだ？」

お前達二人のお陰でどんなに皆が迷惑したか考えて見るがいゝ」

「くそっ、この……この狸と狐め。ほかの役所じゃあ部長や局長に迄行ったのに……。うまい事しやがって、俺一人だけこんな目に会わせやがって……。今はどうも出来ないが、どうするか覚えてろ。ヒーツ」

「そんな事、喚いてると刑期が長くなる一方で、一生涯自由になれなくなるぞ。悪いことはいわんから、神妙に罪の償いをして来るんだ。そしたら又、身の振り方も考えてやるから。所で看守君。こんな強情な奴も少いじゃろう？」

「えゝ、私達こんな諦めの悪い、しぶとい懲役囚見たことありませんわ。思い切り懲戒してやりましょう。」

「いやいや、まあ勘弁してやって呉れ。そのうちに気も鎮まるだろうから。何しろ新婚十日位いで引張られたんだからな。哀れな点もあるんだ。可愛い細君だったが。」

「家内は、私の家内はどうしてます？ 教えて下さい。お、お願いです。」

「アハハハ、急に哀れっぽい声を出すじゃないか。可哀想だが、教える事は出来んな。そんなことは、今のお前が知る必要もないわい。」

「あゝ、一目会いたい。監獄へ送られる前に、せめて一目だけでも会い度い。」

「ハハハ、しかし、そんな浅ましい恰好を見られていゝのかい？」



ま、お前の願いだけは一応伝えておいてやるよ。」

今迄黙っていた娘さんが初めて口を利きました。枯葉色のドレスに深紅の飾り帯を締めた大柄な令嬢です。

「こいつなのね。お父様に濡れ衣を着せようとしたのは。いゝ気味なこと」

先のとがったハイヒールで、泣いている七〇号の額を蹴って冷笑を浴びせて嘲けりました。

「ハハハ、しかし裁判は公正さ。余計なことを云うもんだから、自分で刑期を五年長くしおったわい。」

「それに、さっきのこいつの言動なんかは、我々が告訴すれば、左様、もう七、八年はふえますな。」

「アハハハ、考えて見れば馬鹿な奴さ。君、行こうか。眼が汚れたから、これから一つ綺麗どころを見に行くか。」

「結構でございますな。おっと、御嬢様、失礼」

私共三名の両足には再び重い鉄丸がつけられ、日が暮れる迄、堀の内側を這って喘ぐのでした。両尻に焼鑊を当てられた七〇号は、鉄の腰枷で腰を締めくびられ、腋鎖、胸鎖、第四種手錠で締め上げられたまゝ、それから一週間ばかり暗房にブチ込まれ、半死状態になった様でした。

### 死刑囚の生体解剖

「課長さん。誰かと代わって頂けません？ 女ばかり三人とは、ちよっとひどいわ」

「そうよ。普通の絞首の時でも、あんまりいゝ気持じゃないのに、解剖に当るなんて、ほんとに運が悪いわねえ」

「ハハハ、そんなこと云ったって順番だもの。丁度、大学から要請があった時にカチ合ったのが、君達の不運と云うものさ。何、見てなくてもいいんだぜ。唯、解剖台に縛りつけられいゝのさ。」

「そんなこと云ったって、ねえ、後始末も手伝わなけりやいけなし。私血を見ると卒倒するたちなのよ。」

「ね、いゝことあるわ。ホラ、あの八〇三号ね、彼奴を連れてって使役してやりましょうよ。」

ある日の午後、事務所の隅を這いずり回っていた私の耳に話声が聞えました。

さては、今日死刑囚が生体解剖されるのかと、自分の事ではないとは知り乍らゾッと致しました。その使役に駆り出されるとは嫌な仕事だと思いましたが仕方ありません。思い出しても震えが止まらなくなる死刑囚監房区画へ曳かれて、死刑囚を大学病院へ送る仕事を手伝わさせられました。男二名、女一名、計三名の哀れな死刑囚を小さな鉄の檻に入れるのです。

恐ろしさの余り必死にもがき回る彼等の手足を掴んで、長さ八〇センチ、巾六〇センチ、高さ六〇センチ位の檻の中へ無理矢理に押込める訳ですが、どうせ殺されると思うのでしょうか、鞭位では到底おとなしく入りません。婦人看守に命じられた私が、鼻環につけた捕縄を入口の反対側から引張り、婦人看守が尻を蹴って押しますと、のたうち乍らずるずるといざって入って来ます。お尻の所で鉄格子の扉がガチャーンと閉められ、鼻環で歪んだ顔で格子越しに私を恨めしげに見て、嵌口具の奥で呻き唸っていました。

未だうら若い女囚の鼻縄を引いて檻の中へ引込む時には、私も手の力が抜けてしまう程可哀想になって、鞭を喰ってしまいました。



後手錠の身を正座して上体を前に一杯に倒したり、又膝を立てた間に頭を突込んだりして、狭い檻でもがいている三名の死刑囚の頭上で冷酷な申渡しがされました。

「お前達は、要請により、生体解剖刑に依る死刑を、執行されるのよ。お前達の体が御役に立つんだから有難いことね。」

三名の死刑囚は鬼気迫る様な唸りを嵌口具ので奥で立て、小さな鉄檻を揺り動かさんばかりにもがきました。中庭のトラックに積み込むのを手伝わせられ、同乗して拘置所の門を出ました。後から検事達の乗用車が一台続きました。

「そんなにもがいたって駄目よ。しょうがない男ねえ」

荷台に私と一緒に同乗した婦人看守は、いつ迄も檻の中で暴れている若い男の死刑囚の頭を、格子の間から靴で蹴って肩をひそめました。

「こうしとかなくちゃ、騒がしくて仕方ないわ。」

彼の鼻環と鎖鐐の真中の金具が、それぞれ鉄格子に短く結びつけられました。トラックが揺れる度に激しくひきつれる鼻環のため、顔がむごたらしく歪みます。女囚は気を失った様に檻の中でじっとうずくまっていたが、時々ビクリと全身を痙れんさせます。全身鞭痕だらけで、黒い鎖鐐が喰い入ったお尻には、焼燙の痕が赤黒く盛り上っていました。もう一人の男は、今生の名残りにと思うのでしよう、流れ去る町の景色を一目でも見ようとして、低い檻の天井に頭を押当て、必死に左右に動かしていました。車は容赦なく走り、とうとう病院の門を潜って地下の搬入口に着いてしまいました。やがて迎えに来た小使風の男に罵られ乍ら、三個の檻を手押車に積んだ私は、陰気な地下の廊下を押して運びます。

「こゝね。いつ来ても嫌な臭いがするわねえ。」

やはり地下に在る一室の大きな扉に白く記した『第二解剖室』と云う文字を見た途端、背筋が寒くなりました。天井の低い大きな室、床はコンクリートで、中央に二つ並んだ解剖台の周りには既にいろいろな器具や機械が運び込まれております。死刑囚達の悲惨な呻きを耳にし乍ら暫く待ちますと、やがて数人の医師と看護婦達が現われました。

「フン。これね。年令は、まあ註文通りのものらしいわね。」

リーダーらしい医師は、細面の縁無し眼鏡を掛けた四十才位の婦人でした。立会の検事達も入って来ました。

「看守さん達、御苦様ですね。じゃ、この男をお願いしますわ。」

一人の男が入った鉄檻を、殆んど私一人で床に下ろしました。

「先生、仰臥でいいですね。」

命じられた私は、壁に立て掛けてある固定具の一つを担いで、コンクリート製の解剖台の上におきます。固定具は『大』の字形になった木製のもので要所々々に鉄製の拘束具や革バンドが取付けてありました。死刑囚を檻から引摺り出し、解剖台に引張って行くのも私の仕事でした。腰が抜けていますし、鎖錠がきびしく施してありますので暴れる心配はありませんが、必死にもがく男を台上に乗せるのには一苦労で、婦人看守と一緒に抱え上げました。

「足を押えて、ね。八〇三号、お前は首環を押えつけておいで」足枷が外され、固定具の鉄環が調節されて両足首と両膝をがっしりと固定し、ベルトが締めつけられました。

「次は手よ。気をつけてね」

何十日振りかで結合を解かれた彼の両手は更に手枷をも外され、



そのまゝ左右に開いて固定具に押さえつけられ、横一文字に手首と肘を鉄環が啣え込みます。

「どうせもういゝじゃないの、思い切り締めときましようよ。」

婦人看守達は、手首、肘の鉄環のネジを骨も折れるばかりに強く



締めつけ、

「さ、もうこれで動けないから安心よ。八〇三号、お前は腰枷やなんかを外しておやり」

私は鍵を与えられたものの、腰枷の錠は後ろにありますし、四肢を固定されて仰臥しているのですから外してやるのに苦労しました。鎖褌も死刑囚になって以来ずっと締められたまゝだったのでしよう、皮肉にめり込んだ様になっていて引離す時に何だか音を立てた様な気が致しました。

突然、絶叫が響いてびっくりしました。両腋から両肩にかけてをそれぞれ革バンドで縛りつけた婦人看守達が、首環に次いで嵌口具を外したのです。鼻環を指に引掛けて頭を浮かさせていた婦人看守が、驚いて手を引込めて苦笑しました。

「びっくりするじゃないの。指を咬まれるかと思ったわ。ホホホホ」

鉄製のお碗の様なもの固定具上を滑って来て彼の頭に被せて押付けられ、彼の上下の歯を一杯に押広げた開口器も固定具に鉄棒で左右から連結固定されて、これで最早頭部も微動すら出来ません。

「静かにおし」



助手の女医が側に寄って来て彼の喉頭の辺りに注射をしました。絶え間なく響いていた絶叫が急激に弱まり、ゼイゼイと云う音に変わりました。声帯を麻痺させられたのでしょうか。

固定具の腰の位置の両側にそれぞれ付いている鉄製の金具が調節されて彼の腰骨をそれぞれ外側からグイと引掛けてくわえ、僅かに動かし得た腰の辺りのもだえも消えて、彼の全身は微動だにせず解剖台上に仰臥しました。唯、胸から腹部にかけて激しく大きく波打ち、新旧無数の鞭痕が蛇の様に伸び縮みしており、鼻や口からは液体がダラダラと流れています。

女医の指示を受けた婦人看守達に命じられ、私は更に残りの二名を曳き出し、解剖台の足許近くに立てた柱に縛りつけて立たせました。へたへたと崩折れてしまいますから、鎖揮の金具に柱の短い鎖を結合させ、首環も柱の金具に結び、更に嵌口具と鼻環を利用して、彼等の顔が解剖台上に向く様に固定します。

「もう動かないだろうね？」

看護婦が近寄って来て彼等の両眼の上下の皮膚に器用に針を通して、糸を柱の後側の器具に連結し、更にその器具から延びている電線の先の針を額の皮膚に横から浅く突刺しました。そして、もう一本の電極針を顎の付根あたりから深く突刺して見ては死刑囚の表情を覗っていました。女囚の方の看護婦が、

「先生。分らないわよ。やって頂戴。」

続いて男囚の顔を、いじくっていた看護婦も、

「私もよ。どうしたら探り当てれるのかしら。」

若い男の医師が、ゴム製の割烹着の様なものの紐を結び乍らやって来ました。

「上の紐を結んでくれ。ウン、有難う。君達、四叉神経ってのは太いんだぜ。しっかりしておくれよ。嵌口具は邪魔にはならないさ。」  
流石に医師は手馴れたもので、先ず女囚の四叉神経を二刺目で探り当て、女囚は全身を硬直させて呻きました。針が僅かにゆるめられテープで固定されます。男囚の方もすぐ済みしました。

「説明しておいてやれよ。」

「そうね。お前達はね。あの男、つまり生体解剖の有様をね、ずっと見てなくちゃいけないのよ。まばたき程度ならいゝけど、少しでも眼をつぶったら、ホラ糸が動いて時限リレーが作動して針に電流が来るの。さっき痛かったら？ 電流だからもっと痛いわよ。顔はビクとも動かせないしさ、まあせいぜい眼球を動かす位の事ね。けど、どっち途、嫌だに眼に入るわ。分ったかい？」

「しかし、何故こんな風にするのですか。今迄は、せいぜい同時に二名だったし、檻に入れたまゝで順番を待たせたものですが……」

検事が訊ねました。若い医師は立たせた死刑囚達の体に、いろいろな測定器具を挿入したり密着させたりし乍ら、

「ああ、御存知なかったんですか？ 今日ね、その……つまり、いろいろな生体実験や薬剤試験の他に精神的なショックの影響についても調べる予定なんです。試料も男女一名宛と云う訳で……」

「先生、こいつにも、その針や糸をつけてやって下さらない？」

婦人看守の言葉に驚いた私は、両手を合わせてお赦しを乞いました。手が震えて両手の枷がガチガチ当って鳴るのが押えられませんでした。

「フフフ、じゃ勘弁してやるけど、しっかり見ておゝきよ。他人事



じゃないのよ。ついこの間も、反抗して御主人様を傷つけた奴隷が、この台で切り刻まれたんだから。」

解剖台の周りの機械の準備も済み、医師達は台の両側に集まりました。

「皆さん、それぞれに自分の担当の仕事は分っていますね。では……」

白い帽子とマスクの間で眼鏡をキラリと光らせた女医はメスを右手に握りました。

眼をつぶったのでしよう、女囚の陰惨な苦痛の呻きが聞え、私も思わず眼をつぶり、途端に腿を握り上げられて喘ぎました。自分が見るのが嫌な癖に、私には見させようと、意地の悪い婦人看守が私の方ばかり監視して薄笑いを浮べて居ました。

「覚醒剤は打ったわね？ 充填は初めから済んだのね？」

波打つ胸から下腹へかけてメスが走り、金属の器具が噛まされ、更に深く切り裂かれ、内臓が露出しました。生きたままの内臓器官の美しさ、しかし、その苦痛を想いますと脂汗が全身に浮び、医師達が鬼のようにも思えました。注視を強制せられて居る死刑囚達の両眼は今にも飛び出さんばかりの凄まじさです。立会の人々は後ろを向いて居ました。

「まだ意識はある？ 時間は？」

「丁度二十分です。まだ意識は完全です」

「そう。ホラ、御覧なさい。内臓移植に於て、この組織の処理が重大なネックなのよ。生体なら、うまく行くの。けど麻痺させると駄目なのね」

「おい君、その腸管をどけて呉れ給え。教授、まだまだ大分生体解

剖をやらなきゃいかなですなあ。じゃ、この新薬を試みますよ」

残忍な会話が続き、私は我慢し切れなくなって眼を伏せました。

「おや、何故見てないの？ 懲罰を喰ってもいいんだね」

こんな恐ろしい光景を見る位なら、懲罰の方がましだと考えた私は婦人看守の足許に坐り込んで額を床に摺り付けました。婦人看守は捕縄を鼻環につけて引張り上げて立たせようと致しましたが

「もう、いいわ。面倒だから。けど、あとで絞ってやるからね」と小声で叱るのでした。

「三十分。意識がかなり弱くなったようです」

「そう。酸素を吸わせて」

四十五分後に彼は絶命しました。

「もう少し保ってくれたらいいのにねえ」

女医は囚人の脈を見ながら残念そうに呟きました。研究のためとは申せ、全く人間とは思えない程でした。

「そっちの二名はどう？」

「ハイ。意識は勿論通常ですが、脳波に面白い曲線が出て居ますよ。精神科の連中に見せてやりましょう」

医師や立会の人々は休息のために立去り、私は鞭で活を入れられて、遺体の処理を独りでやらされました。大まかに縫合しただけの開口部から膜や内臓の一部がはみ出して居る哀れな遺体を固定具から解いてやり、そして再び鎖錠を嵌めるのです。腰骨の所は崩れて紫色に内出血していますし、肘の関節は脱臼しているようでした。カッと見開いたままの赤く充血した両眼を撫でて閉じてやろうとした途端、又鞭を当てられ、床に蹴り転がされました。

「余計なことしないでもいいのよ。馬鹿」



## 人間のエゴ

滝口 理平

「凄いわねえ」と彼女はため息まじりに呟きました。

画面には飢えたライオンが、縞馬に襲いかかって餌食にしている場面が出ていました。

次には鷹が、大空から急降下して、生れて間もない仔山羊を打ち殺してさらって行くシーンが映し出されました。

「動物の世界って、ホントに食うか食われるかなのネ」

彼女は、画面がその番組提供の会社のMCに代るか代らないうちにダイヤルを廻しながら私に話しかけます。

「生きてるのを殺して食べるなんて、残虐だわ」

私は、相づちを打ちながら、ついさっき、夕食によべたカシワのてり焼のことを思い浮べていました。

「本式のバーベキューってのはお庭なんかでやるらしいわネ」  
彼女はそういいながら、器用

に焼いて、自分もおいしそうに食べていましたっけ。

私は、同じテレビで先日見た、ある養鶏場の紹介番組を思い出しました。あの映画では鶏は機械的に卵を産まされ、やがて大量虐殺されてオートメ式にカシワにされて行く行程が紹介されていました。司会者曰く、「まったく、人間のためなら何をしてもいいのか、といったくなるようです」

私は、人間というものは、猛獣以上に恐ろしいものだづくづく思いました。

具体的にその凄惨な状況が眼に入れば残虐だと眉をひそめながら、必ず生きていたのに違いないのは承知の上で、しかも新鮮度は非常に問題にしながら、その肉を食うのに何ら抵抗を感じない。

これ程、エゴで残虐な動物が他の種族にあるでしょうか。

首環、嵌口具、腋鎖、腰枷そして鎖褌を締め施してやり、足枷を嵌めて鎖で繋ぎ、更に手錠を嵌めてやります。俯伏せにしますと傷口から血液や体液がドロドロと台上に溜りました。棒のようになった両手を後手にネジ上げながら、その哀れさに涙がポロポロこぼれてしまいました。

「その木箱の中に入れて。台の上を綺麗に掃除するのよ。そら鞭を当ててやるから元氣を出して……」

三十分の後、残りの二名の死刑囚は、並んだ解剖台のそれぞれに固縛され、内臓の移植試験を受けました。

「万一成功したら、死刑は赦して頂けるんだぞ」

立会の検事から云われた彼等は、一縷の望みをもった事でしようが、研究途上にある手術ですから、それぞれ数十分後には絶命しました。

「やはりネガチブな結果ね」

「ええ、それに先刻から大分消耗してますからね。しかし中々難かしいですなあ。誰が成功するにせよ、ノーベル賞ものですね」

「勿論よ。ああ、くたびれた。今夜は皆におごって上げるわね。御苦労様」

私は再び二コの遺体进行处理させられました。鎖褌を心持ち緩く締めてやったのが私に許されたせめてもの心むけでした。その夜は、うとうとしてうなされ、心身共に疲れ切っているのに拘わらず、とうとう眠れませんでした。そして翌々日非番明けで出て来た生体解剖の際の婦人看守によって、よもやと思っていた懲戒を受け、窄衣の上から捕縄をかけられたまま真暗な暗房の三角の床へ、飲まず喰わずのまま二昼夜放り込まれてしまったのでした。



## ある男の一面

## 落葉の墓

西田 仁

それではお先にと挨拶して、通  
用口のドアにあゆみ寄ろうとした  
相田昌子は、いきなり背後から肩  
を掴まれた。骨の太い硬い掌だっ  
た。振り向いてみるまでもなく、  
いまこの狭い「エデン」の店内に  
は、昌子自身とマスターの内海貞  
造しかないのはわかっている。  
閉店間際になって、夜業している  
隣のビルからコーヒの注文があ  
り、アルバイトの昌子がそれを届  
けて戻って来たときには、もうみ  
んな帰ってしまったて、マスターだ  
けが残っていたのだ。なじみの薄  
いこの老人と二人だけである気ず  
まりから、一刻も早く外へ出よう  
としていた昌子だったが、しかし  
その瞬間には、当然起り得ること  
が起きたのだという気持もどこか  
にあった。

「いけません、マスター」

昌子は、だからわりあいと落着  
いていられたのだ。おだやかにた  
しなめ、わずかに身を避けてドア  
の把手に手をかけた。しかしこ  
れをどう勘違いしたのか、貞造は昌子を壁際  
に押しつけるようにしながら、腋の下から手  
をまわして来た。

「いやです！」

昌子はぞっと悪感のようなものを感じて、  
それを振りはらった。と、同時に、

「あッ、う」

という押しひしがれたような低い呻きが貞  
造の口から洩れた。思わず力のこもった昌子  
の肘が、背のひくい貞造のみぞおちを強く突  
いたのだった。

「あらッ」

胸を抑えて床にしゃがみ込んでしまった貞  
造のかたわらに、昌子も蒼くなって走り寄っ  
た。じぶんの肘が、相手の体にぶすっと突き  
刺さったような不思議な感触が、充分な手応  
えを昌子に伝えていたからだだった。

「マスター！」

青い血管を苦しげに額に浮きあがらせた貞  
造の顔を、心配げに覗き込んだとき、またま  
た男に手を掴まれたのだ。このことが、かっ  
と昌子を逆上させた。間違っても急所でも打っ  
たかと驚ろいて駆け寄ったのをいいことにし  
て、この男は

「え、いいだろう？」



と、床の上にじかに腰をおろしたかっこうのまま、厭らしく引き寄せるのだ。

「いや、いや、離して！」

灯の消えた暗いアスタイルの上で、二個の黒い影がもみ合って転がった。昌子はなんとかして貞造の手から離れようと身をよじった。しかし、小作りだががっしりした貞造の両腕は、なおもしつこく昌子の首にからみついてくる。

「いや、いや、離して！」

昌子はおなじことを幾度も叫んでしゃにむに首を振った。が貞造の上半は、かまわず昌子ののしかかって来て、強い香油の匂いがぶんと鼻をつく。

「あッ」

夢中で床を蹴っていた昌子の靴の踵が、そのとき折よく重いソファの脚にかかった。それに力を得た昌子は、窮鼠の勢いで身を起した。首を抱かれたままぐっと体を前のほうへ乗り出す



と、たちまち形勢が逆転してこんどは昌子のほうが上になった。しかし貞造の足は、なおも昌子の体を捕えようとしてあちこちのたうちまわっている。

「仕方ないわ。」

昌子は思い切って貞造の腹の上を跨いだ。それから首に巻きついて腕を振りほどいて床に押しつけた。それでも貞造は両足を踏んぱり、体をぐっと反らせて起き上ろうとするのだ。

老人らしくもない黒い髪、ところどころに汚点の浮いた貞造の顔が、昌子の顔のすぐ下に醜く歪んで苦悶していた。昌子はさらに一歩身を乗り出して腰を据えた。

さすがに体が火照るような恥ずかしさに包まれたが、すぐ自身にいい聞かせた。

「かまやしない。悪いのはマスタ―のほうなんだから！」

貞造は昌子の体重に圧倒されたようにううっと唸った。胸の上あたりにどっかとお乗っている昌子の



タイトスカートが、膝の上まで捲くれあがって、若若しく張り切った腿の辺がやはり緊張しているのかぴりぴりけいれんしている。アルバイトで働きに來たこの女子大生のはつきりした感じの美貌と、惱ましい曲線に惹かれて、今夜の機会に年甲斐もなく挑んだのだが

文字通りのヒジツを激しく食わされた揚句不覚にも組み敷かれてしまったのはいかにも無念だ。が、貞造にはもうそれを撥ね返すだけの力がなかった。さっき折り重なって倒れたとき、下から昌子の首をかかえて懸命にもがいたのだが、意外に活発なこの娘のためにそれを振りほどかれ、あまつさえ冷たい床にぴったりと押し付けられてしまったのだ。

表通りのネオンの明滅が、赤や青や黄のめまぐるしい色彩を店内に投げかける。下から見上げる昌子の体は、その七色に染められて平生接しているときの何層倍もの大きさに貞造の目には映った。

紺のスカートの裾からむき出しになっている太腿が、貞造の咽喉首を挟みつけるようにして、上からむんずと乗りかかり、しかも左右の膝頭で、両手の付け根をしっかりと踏んまえている。充実した女体の線を惜しみなくさらけ出した姿勢だった。しかし、力の及ば

ぬ悲しさ、それを仰ぎ見て齒ぎしりする貞造の全身から、張りつめていた活力が次第に脱け落ちていった。

昌子も困った。はじめはじぶんを護るために、臨時の主人であるこの老人に対して思い切った先制攻撃をしかけたのだが、しかしこうなってみると、こんどは逃げ出すチャンスを失ってしまった。このままぱっと立ちあがれば、それにつれて貞造も起きあがり、再び襲いかかって来るのはわかりきっているからである。

—どうしよう。困ったナ。

昌子は馬乗りになったまま途方に暮れた。が、なんといても相手の暴力を完全に封じ込めている安心感から、すこし余裕を取り戻し、貞造の顔を横に捻じ向けてまともに目を合わせるのを避けようとした。

「よせ、よせ」

しわがれた声が押し籠められたように微かに聞えた。

こうして、胸の上の昌子に絶対有利な体勢をとられ、首を横のほうに捻じ曲げられたとき、内海貞造の心身は被虐の現状に酔い痴れていた。

前の女と別れてから久しく忘れていた境地

だった。

思えば、勝気そうにきりりと引き締まった昌子の風貌に惹かれたのも、貞造の心の奥にひそむ、この悲しい性癖の為せる業だったのか。

郷里山形の小学校を卒業し、人形町の洋食屋に住み込んだ当初一年ほどのあいだ、その若いお内儀さんに時と場所を選ばず厳しく折檻されたことが、彼の被虐の開眼のきっかけとなっている。それからもうかれこれ五十年の歳月が流れているのだが、彼のそうした願望は折に触れて頭をもち上げ、心を妖しくときめかすことがある。

忘れもしないその洋食屋に奉公した翌日、彼はお内儀さんのいいつけで水天宮の薬屋まで使いにいった。品名を記した小さなメモを持たされて店を出たのだが、暫くあるいてからそれを紛失したことに気がついた。だが、金のほうはべつにしっかり握っており、紙一枚のことだから叱られることもあるまいと思ったのが間違いだった。

「冗談じゃないよこの子は。子供にや教えられない品物だからわざわざ手紙持たせてやったのに、もし誰かに拾われでもしたらどうする気だい、みっともない。うちの名前をちゃ



んと書いてあるんだよ」

その物凄い見事に彼はおどおどして、

「探して来ます。いくらもあるいてないんだから」

「バカおいでないよ。紙きれ一枚、どこへ飛んじまったか、わかりやしないじゃないかね」

お国訛りをまる出しで弁解する貞造の手首を、お内儀は荒っぽく引つ掴んで、廊下の隅に在る納戸のような部屋へ連れていった。

「ど、ごめんなさい……」

なにをされるのかとぶるぶる震えながら、そこへ一ト足踏み入れたとたん、貞造はもう襟髪をとられて畳に這いつくばっていた。

「げえッ」

まるで踏みつけられた蛙のように俯向けに捻じ伏せられた貞造のまだ柔かい背骨が、いまにもへし折れそうな痛みにたわんだ。同時にぎゅっと首根っ子を押えつけられ、貞造は必死にあがいた。

いかに昨日から主従の関係になったとはいえ、男が女にしてやられるなんて、無垢の少年には耐え難い屈辱だったに違いない。しかしいくら女でも相手は大人だ。暴れまわる貞造の利腕をかるく捻じ上げてしまうと、お内

儀は少年の気持を見抜いているように、ふふ、と嘲笑い、

「さあさあ、口惜しかったらいくらでもお暴れよ。間違いをしてお仕置されるなあ当り前じゃないかね。店の大事な書付けなんかだつたら、こんなことじゃ済まないんだよ」

といいながら、なおも邪慳に押し伏せる。

湿っぽい畳埃の臭いが、荒い呼吸とともに貞造の鼻口にねばつくく吸い込まれる。

「動けるものなら、さ、動いてごらん。田舎の母親たあ違うんだよ」

母のことをいわれて貞造の気が怯み、やっとな抵抗をあきらめたところへ主人が姿をあらわした。

「どうしたい？」

しかしお内儀は、あいかわらず貞造の背に尻を乗せたまま、力をゆるめるところか、しやあしやあとして事情を説明しながら、まるでその合の手のように、驚掴みにした襟首をぐいぐい締めつけるのだった。

「ゲッ、ゲッ」

気の遠くなるような苦痛を忍んでいる貞造の耳に、遠慮勝ちな口調でいう主人の声が聞えた。

「もういい加減に勘弁してやれよ。おまえの

力で、そうぎゅうぎゅう締めつけられたんじや、たまらねえや」

○

さて、話は、ちょっと前後するが、喫茶店「エデン」の経営者内海貞造氏が狭心症で急逝してのち「エデン」が人手に渡ったので、サブ・マネージャーだった私は失職し、生れて初めてわずかな暇を持つことができた。一昨年の秋のことである。

私は、半ば強制されたその閑暇を盗むようにして、いままでの体験を基にして、つたない数篇の文章を綴った。そして、それを二、三の雑誌に載せてもらったことから、前述のような思いがけない告白を、当の相田昌子の口から直接に聞くことができたのである。もしあれを書いていなかったら、折角出会った相田昌子とも、通りいっぺんの挨拶だけで、空しく路傍の人にかえってしまっただろうと私は思う。

その日――

貞造氏一周忌の翌日だった。遺族と顔を合わせるので避けて、わざと一日をずらして青山墓地へおもむいた私は、真新しい石塔の前の、むらさき色に立ち昇る香華の煙のなかにじっと蹲っている白絵羽織の女人の姿をみと





めた。

そして、それがいつか「エデン」にアルバイトに来ていた相田昌子であることを思い出すのに、さして時間はかからなかった。彼女が、あの当時、新鮮な魅力の溢れる女子大生であったことは、私の記憶にも強く灼きついて残っていたからである。が、ちよっと意外な感じはした。

「おどろいたでしょう？アルバイトだったあたしが、こうしてわざわざお墓参りに来るなんて」

昌子は、私の抱いたそんな不審を察したように微笑した。

それから私の書いた恥ずかしい文章を一篇余さず読んでいること、そして故貞造氏との異常な交遊の一伍仔什を、インテリらしい卒直さで私に語った。

業界ではかなり知られていた内海貞造氏の暗い秘密の行跡を、こうした経緯で私は初めて耳にしたのだった。それは、五年以上も「エデン」で働いていながら、男の私には片鱗さえ窺い知ることのできなかった、あたらしい事実であった。

もうすこし昌子の話を書いてみたい。

○

内海貞造は、その後も幾度か昌子をホテルに誘った。しかし、そのたびに最初のとくと同じような結果に終り、ついに目的を果たすことはできなかった。そうだ。いや、その目的はもう昌子を奪うことより



は、むしろ、昌子に虐げられることにすり替えられてしまっているようでもあった。

そして昌子もまた平気で貞造の誘いに応じたのだ。そして二人だけの密室にはいると、やがていとも簡単にこの老人を捻じ伏せてしまふのである。そういうことが度重なるにつれて、いままでは想像してもみなかった悦虐の泥沼に、ずるずるとのめり込んでいく自分自身を、どうすることもできなかったと昌子はしみじみいい、

「このひとが、あんな病気でポックリ死んだことだって、きっとそれが遠因にはなっていると思うのよ」

などと、空恐ろしいことを臆面もなく口走るのであったが、なるほどそういうこともあるかも知れない。私も一個の男性として、実感をもって昌子の言葉にうなずかざるを得なかった。

そのうちに、貞造の奇癖は膏盲に入る気配を見せはじめた。昌子のいうとおり、そんなことで死期を早めたのか、または迫って来る死を予感して、もう恥も外聞もなく一途に昌子相手の所業に耽溺したのか。倒れる三日まえ、初めて遠出した熱海の宿でこんなことがあった。

昌子が風呂からあがって、貞造の部屋（部屋は別個にとったそうだ。―昌子曰く―）にいてみると、ちょうど中年の女按摩が、長々と俯伏せに蒲団に這った貞造の体をぎしぎしと揉んでいるところであった。貞造は心地よさそうに目をつぶり、按摩の指の動きに身を委ねている。

「いやだわ」

それを見るなり、昌子はわざと大きな声でいい、眉をひそめてできるだけ露骨に嫌悪の表情を示した。

枕を顎に当てがって自堕落に寝そべっている貞造の肩に片膝を乗せ、たんねんに首筋を揉みほぐしている按摩に対して、昌子は奇妙な嫉妬を覚えたのだった。しかしどんな不愉快そうな顔をして、相手の女にはわからないのだと思うといっそう心が昂ぶって躍起になり、

「なによ、そんなに眼を細めて！男のくせに女の尻に敷かれるようじゃなかつこうして、ほんとに厭らしいわ」

すると按摩のほうでは、醜い顔をいっそうくしゃくしゃにしてにたにた笑い、見えない眼で振り仰ぎながら、

「でも、私は術で押えておりますから、旦那

さまがいくらいきんでも、撥ね返すことはできませんのです」

「まあ、術だなんて、大げさねえ」

昌子は、わざとバカにしきった声で笑い飛ばした。

「そんならその凄い術とやらを、あたしにひとつ施してみない？ あたしが動けなかったら信用したげる」

貞造との倒錯した交際によって、いくら旅先とはいえ、昌子も平気でこんなことをいえる女になっていた。またひとつには、相手が盲目の、しかも年とった同性であるということにも興味があつた。この貧しげな不具の醜女を、さらに徹底した劣敗者の地位に蹴落してやろうという残酷な感興が、湧然と胸の底から溢れ出てくるのだ。

昌子は、湧き立つ得体の知れないファイトを身内に漲らせながら着物を脱いだ。そしてブラジャーとパンティだけになった体を、どさっと乱暴にそこへ投げ出し、

「さあどうぞ」

と煽動する。そして、

「いいんですか？ ようし、痛くて泣いても知りませんよ」

とばかり、力いっぱい押えつけてくる按摩



の体を難なく撥ね飛ばし、情け容赦もなく、手探りでうろろする相手の両足を掬って、思いつきり惨めなかつこうにひっくり返してしまった。

「うわア、ご勘弁ご勘弁」

按摩は頓狂な声を挙げて両手をばたばたさせた。スラックスを穿いているので、その醜態はまあ中ぐらいではあったが、空に伸びた足をそのまま頭のほうへぐっと容赦なく折り曲げられたからたまらない。

「ひやア、痛い、痛い」

「どう？術だとかなんとか威張ったって、こうされちゃったら身動きもできないでしょう撥ね返させるものならやってごらんよ。降参いたしましたって、ちゃんと謝れば許してあげるけれど。どう？謝まる？その代り罰として今日の料金は払わないわよ」

昌子が勝ち誇ったように、そう宣言したとき、突如、

「わっはっははは」

という狂ったような笑い声が、遠慮会釈もなく部屋じゅうに響きわたった。それまで黙りこくって、女同志の格闘に目を据えていた貞造の赤黒くむくんだ顔に、空洞のような口がぱっくりと開いて、ずらりと並んだ金歯の

奥でけけらけらと鳴る舌が気味わるく回転していた。

○

「そのとき、あたしは、このひとに謀られたナって直感したの」

「謀られた？」

「きつとそうよ。あたしがお風呂に入っているあいだに、あの按摩さんにいいふくめて。ね、そういう人って、あたしたちの他にも沢山いるんでしょう。だから按摩さんのほうでも心得ているんじゃないかしら」

昌子は、言語の通じ合う者同志の親しみを籠めて私にいった。

そればかりでなく、貞造氏の墓石の正面にしゃがみ込んでいる昌子は、貞造氏のことを「このひと」と呼ぶとき、白足袋の浮き出したローズ色の草履の爪先で、そのあたりの土を指すのだった。その動作はさり気なくはあったが妙に私の注意を惹いた。墓穴は石造りの花立の蔭に在り、内藤貞造氏はたしかにその土の下に、ひとりしずかに眠っているはずであった。

人形町の洋食屋のお内儀さんが生きていても、いまはもう八十に近い老婆だろう。

私は、骨になってなお昌子の足に踏まれ、

厚い土をへだてて彼女を仰ぎ視ている貞造氏の死霊を想った。

晩秋の墓地を吹き渡る白い風が、墓のまわりに植えられた木々の落葉を誘い、かるやかに浮遊せしめた。そのなかの二、三片が昌子の肩にも舞い落ちた。

「寒くなったわね」

昌子は口を噤み、襟をかきあわせて立ちあがった。

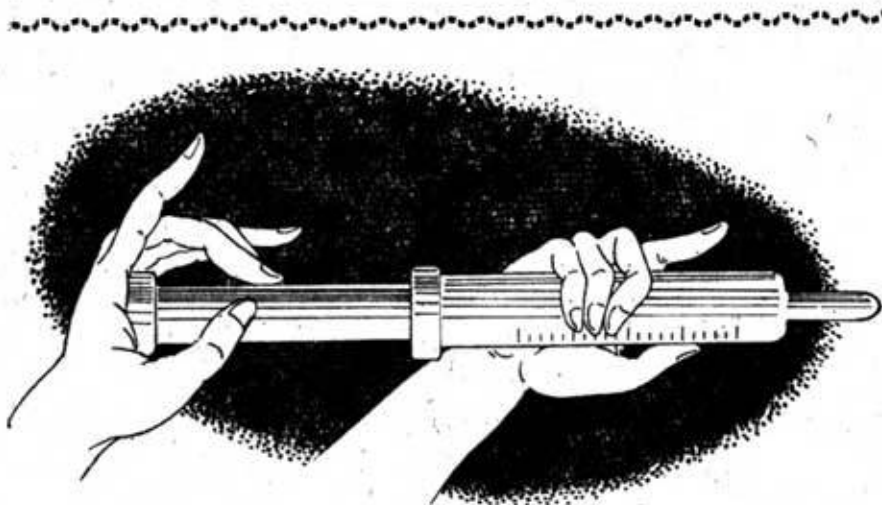
落ちた葉が風に押しやられて、かすかな音をたてながら土の上を走った。私の想いとは別に、視線だけが無意味にその葉の行方を追っていた。

「帰りましょうか」

声に引戻されて転じた視線に、昌子の白い横顔が映じた。

私はそのとき、今聞いた話は、みんな昌子のある欲求から生まれた空想の所産なのではないか、とふと思った。いや、そう疑わずにはいられないほど、木の葉のはらはらと落ちかかる墓前にたたずんでいる昌子の姿は楚々として美しく、薄い霧の下りた夕明りのなかに、いまにも溶け込んでしまいそうな嫋々たる風情を見せているのだった。





## 或る浣腸マニヤの

### スクラップノートより

赤井 茂

償を払って入手した物もある。然し、悔のない物ばかりだ。久し振りにこれらを集めて整理しながら想い出を書いてみた。

スクラップノートの第一冊の始めは戦前の物に依って整理してある。第一頁に貼ってあるのは私が未だ少年の頃の古い物ばかりだ。

#### 戦前の部

私のコレクションは、四冊のスクラップノートである。フォトあり絵画あり、新聞雑誌の切抜きと、すべてこの四冊に収集されている。蒐集し始めて十年余の歳月が経って居る。一枚一枚、私にとっては想い出のある楽しい、又素晴らしい物ばかりで、浣腸とおしめに関する物すべてである。

それは婦人雑誌の付録の「赤ちゃん全集」からの切抜きである。挿絵は両脚を持ち上げられ、硝子の浣腸器を使用している正面ポーズの絵である。浣腸器も図入で紹介されて居り、二〇CCの円筒のゴムの輪の嵌った物。エネマシリ

ンジ。三〇CCの円筒が棒状になって居り、円筒の先端はピストンの様になって居る。両者とも今では全然製作されていない器具である。

次はグラビヤで婦人雑誌の付録で「赤ちゃんの病気の治療法と看護法」という物で、おしめを取り換える時のポーズで、おしめを敷いて二〇CCのグリセリン浣腸器を使用せんとしている素晴らしいグラビヤだ。「浣腸と大便の気持ちの良いさせ方」と題する説明が又楽しいのである。「一日に一回ずつお通じのない時は、こうして便通をつけてやりましょう」とあ

る。

それから、しばらくして婦人雑誌の付録で「小児病一五〇種の手当法」というのを手に入れた。これは全く収穫であった。一冊三〇〇頁位のものだったがカン腸の挿絵が三枚あったのだ。育児上としても常識的な「浣腸の仕方」の項。

「エキリ応救手当」の項。「発熱時の応性手当」の項と、それぞれ異った挿画で全く素晴らしい。浣腸器がすべて円筒の棒状のピストンになって居るのだ。

それから「家庭療法と手当法」という付録は、イルリガートルの注腸の挿絵で、絵から受ける感じは少々矛盾のある物だ。幼児が横臥し、上半身にふとんをかけてあり両脚を上げて、長いイルリガートルのゴム管が描かれて居り、腰に便器が敷込んである」といった物だ。又「家庭療法と看護法」のには二〇CCのグリセリン浣腸器の挿絵に「病児が、ふとんの上に横臥して背部を正面に向けて母親が



彼方から浣腸をしているポーズである。"図の様にして行えば誰でも一人で出来ますが、赤ちゃんは絶えず動きますから、初めは誰かに押さえてもらって行います"とある。全く楽しいものである。

昔はよく折たたみ式の付録もあった様だ。これは色刷で子供を仰臥させて両脚を持ち上げて横からイチジク浣腸をしている絵だ。

"ヒキツケ(けいれん)が来たら浣腸させよ。昔から通じをつければ治るといわれている"と説明がついて居る。主婦の友社発行の単行本でシリーズ式で"幼児の巻"、"児童の巻"といったケース入りのがある。"幼児の巻"に浣腸の仕方が二通り出ている。仰臥位と横臥位でのポーズだ。

"育児日記"には、写真が載せられている。発行所は記憶がないが病院の浣腸である。愛くるしい坊や(赤ん坊)が無心に指をしやぶって居るのを、横から看護婦が両脚を支え、医師が浣腸器をガーゼ

の上に受ける様にして施薬している。勿論赤ん坊とておしめがしかれてある。"非常に硬い便を、容易に排便さす方法はないものでしょうか"という質問事項に説明を加えて絵が出ている。子供がキモノのヒモをとかれ、おしめをしいて母親が浣腸をしようとしているポーズだ。(婦人誌付録)

大体以上が戦前の物の現在蒐集してある二度と入手出来ない素晴らしい物だ。正に私の秘蔵の絵画である。然し戦災のため灰燼と帰した物の中のを想い出して見るとこんなのがあった。うすい婦人誌の付録で裏の内側にイチジク浣腸の広告で紙面一杯に浣腸中の絵があった。無心な子供の表情に彼方から母親がイチジク浣腸を施している絵だった。広告文句は"発熱だ、応性手当に先ず浣腸。浣腸はイチジク浣腸"といったコマースヤルだ。未だに忘れ得ぬ絵だ。

主婦の友社版で赤い表紙ので写真の出ていた記事には、前記した

イチジク浣腸の挿絵もあったが、写真では母親が腰掛けてヒザの上で子供をねかせ、ゴムスポイドで浣腸しているものだった。灰燼と帰して以来、二度とこうした素晴らしい物には、めぐり会えないのは何よりも残念な事であり、こんな時代に今の様に成人してたらと悔まれるのである。こうして浣腸に關しての入手のためには、どれ程書店を廻った事か。ある時は失敗し、ある時は感激にひたつた事も色々想起されて来るのだ。

#### 戦後の部

これは眼に映じたすべての物は集めた。一枚の絵のために何百円といった金を投じて後悔の念が湧いて来ない、むしろ云い知れぬ楽しみ、喜びに浸っているのだ。戦後ののは殆ど集めたつもりだ。然し探し損ねたものもある。

最近では全く常識化してしまい、浣腸の仕方の説明は出ていても挿絵が殆どない事は全く淋しい。"病気の百科"という保健同人社

の青本に、うつ伏せの少女が母親からイルリガートルにて防水布を敷かれて浣腸されている絵がある。"家庭での実地的看護"とかいう本には写真が出ている。仰臥した子供(児童)に、看護婦がイルリガートルを使用してるポーズだ。主婦の友社版の"医学全書"に四、五態が出ているが殆ど略画であって物淋しい。同社版"ママさん文庫、子供の病氣"に、母親のヒザに子供をうつ伏せにさせていちじく浣腸をしているポーズがある。変っていて面白い。

産経社発行のベビーライブラリーの"ベビー病院"の本に、イチジク浣腸の仕方の仰臥横臥位での仕方の二通りが写真で出ているが仲々楽しい物だ。

最近はこの程度で育児書が可成り多く出ているが、絵及び写真がない事は浣腸コレクトマニアには淋しい限りだ。然し私は失望せず、今日も又明日も、蒐集への夢を求めてアブマニアの行脚を続けて行くだろう。



## &lt;読者体験記&gt;

## 私の切腹体験記より

藤村陵子

ノーマルなおとなしい人が聞けば狂気の沙汰とは思えないでしょうが、私にとっては已むにやまれぬ気持で実行してしまった貴重な体験なのです。

それは、私が未だ女子大生の頃でした。郷里が静岡の私は学校の寮に入って、東京で学生生活を送って居りました。寮の部屋は六畳に二人ずつ、自分一人の時間を持つとする上では、決して便利な生活ではありませんでした。

ところが四年前のある夏の日、夏休みで同室の友達は帰省していて私は一人。一人でいる気安さから、少々お行儀が悪いとは知りながら部屋に鍵をかけて、ブラジャーとパンティだけで昼寝をして居りました。そして夕陽が沈みかける頃、つい蒸し暑さのために眼

を覚ました私は、寝乱れた自分の姿に異様な血汐の昂ぶりと胸さわぎを感じました。

じつとりと汗ばんでいる肌がかすかに光りパンティが少しばかりずり下り、そこからお臍がかげをつくったのぞいていたのでした。

こんな事は初めてでした。本当に魔がさしたと云うのでしょうか。私は夢中でパンティを腰のところまで下げお腹をすっかり出して何かに憑かれた様に眺めていました。そして無意識のうちに机の上から鉛筆をとり、そっとお臍の中につきさしてしまいました。チクリとする痛み、でも痛みと共に、頭の方から足先までしびれる様な、奇妙な気持ちに襲われたのです。

それ以来、私はその奇妙な痛みが忘れられなくなりました。二十二才になるまで、どう

してこんなことに気付かなかったのでしょうか。不思議でもありました。

それからと云うものは、毎日、こんな自虐を続けました。やがて用いる小道具がペン先をつけたペンになり、錐になり、そのうちにお臍に突き立てるだけでなく、このお腹を切ってみたくと云う慾望に変わって行ったのでした。しかし、本当にお腹を切る勇氣はやはり無く、お裁縫の「ヘラ」や「ものさし」で、切るまねをしてみるぐらいが精一杯でした。

そうこうしているうちに、一人っきりになれる機会も少くなりましたが、説明のつかないあの自虐の魅力が忘れられるはずも無く、長らくこのブレイをせずに居ると奇妙に気持ちがいらいだって、何も手につかないようになる事もありました。



それから一年半の後、大学を卒業した私は神戸市のある私立の高校の教師に就職し、再び神戸市で下宿をいたしました。下宿と云っても、山の手の静かな住宅地で、老夫婦二人暮らしの家のお部屋を借りたわけです。比較的広い屋敷で、二階の二部屋も提供していただいているのですが、殆ど私の私生活にはノータッチで、私は本当に独立した自分の時間を持つ事が出来るようになったのです。

この様な条件の中で、私のあの密かな楽しみ(?)が急速に発展して行っただけです。

国文科を出た私は、学校では国語を受け持っておりまして。ある日、教材として歌舞伎の話をする事になり、忠臣蔵の話をしておりまして。当然出て来るのは判官の切腹の場、私は何か自分の事を告白する様な恥かしさを感じてためらいましたが、逆に、殆どが男生徒ばかりの中で「切腹」を語る事に異様に血汐の騒ぐのをおぼえました。その上、私は話しながら腹を切る手まねまでつけ加えました。タイト・スカートでぴんと張り切った大柄な私のお腹の上を、左から右へとジリジリ動いて行く手を生徒たちがじっと凝視しているのを感じ、私はかーつと頭に血ののぼるの

を覚えました。

その夜のことでした。

二日前から、家主の老夫婦は城之崎温泉へ行って不在であったことから、私は学校にいる時、いえその講義中に「この機会に」と云う決意をしてしまったのでした。

「この機会に……」今夜こそ一度本当に刃物を使ってお腹を切ってみよう。そう思うと後始末もどかしく、急いで学校を出ました。

さて最初に問題になるのは、その切腹刀です。適当なものが思い浮かばないまゝに、一番たやすく手に入る「肥後の守」の一番大きいのを文房具店で買いました。しかし幾ら何でもそのまゝ用いることにはためらいを感じ切先を六〇七耗残してヤスリで刃をすりつぶしました。そこにガーゼを少々厚く巻きつけ、かつ、好の短刀が出来た事に胸を躍らせたものでした。

切腹を実施するのは勿論深夜、それまでに準備を完了して置かねば……。私は、まるで義務づけられた者の仕草のように、一生懸命でした。

切腹の座はと考えた末、屋敷の奥の隅にある土蔵の中と決めました。頑丈に作られた階

段があり、古びた調具品の一ぱいある土蔵の中は、切腹に余計悲愴感を盛り上げてくれると思ったからです。一階のちょうど中央の辺りが幸い広く空いていたので、そこに、白いシーツを四角く二つに折って敷き、四方を画鋏でしっかりと留めました。そして、大きなローソクをシーツの四角に四本立てました。神棚用の三宝を拝借して来て、分厚い半紙をなゝめに二つ折りにして、その上に短刀を置きました。

夜の更けるのが、どんなに持ち遠しく思えたか知れません。

夜七時、戸閉りを確かめてお風呂に入りました。切腹の礼儀として身を清める事は常識だと思ったからです。肌脱ぎになって今更の様に我が腹に見惚れました。もうしばらくの後に私はこの腹を自分の手で切りさばくのだ。そう思うと、居ても立っても居られないような気持でした。同じやるのなら思いきり切ろうと、改めて心にいい聞かせながら、身体に香水をふくませる事も忘れませんでした。

夢中に準備を整えながらも、十二時までどんなに長かった事でしょう。



十二時を目標に私は切腹を執行する事に決めていたのです。十一時四十五分、私は切腹の座に灯をつけに行きました。まっ暗な土蔵の中の切腹の座は、四方を灯りに照らされ、くっきり浮き出しました。ぞっとするほど悲

愴感をかもし出します。

再び自分の部屋に戻って、身につけたものを全部脱ぎ捨てました。いよいよ切腹にのぞむのです。まっ白の長襦袢を素肌に着こみ、やはり白の太いしごきを締めました。



部屋を出て静かに切腹の場に向かいます。途中、仏間に立ち寄って、たとえ形式的にしろ町寧に拝み、お線香台に、たった一本きりお線香を立て、それを捧げ持つようにして切腹場へ入りました。土蔵を中から閉め、線香台を正面の三宝の向うに置きました。線香の香りがツーンと鼻をつきます。あれからもうかれこれ十五分はたった様です。

切腹の座に正座し、暫く目を閉じて気持を落ちつけようと思いました。が、とうてい無理な事でした。さあ、いよいよ私は切腹しなくてはならなくなったのです。しごきを少しゆるめてずっと下の腰のあたりにしめ直しました。そして、おもむろに襟元をくつろげて白装束を右肩から脱ぎました。もろ肌をくつろげ、少し腰を宙に持ち上げ、白装束を腰もあらわに押し下げお腹を十分に露出しました。ローソクの灯にお臍が大きく窪んでかすかに息づいています。

思わず、あゝ、とため息がもれてしまいました。この白い滑らかなお腹を、私は自ら切りさばかなくてはならないのだ。目の前がともすれば興奮のためにぐらぐら揺れます。

これから無惨に切られる我が腹に最後の訣



別を告げました。刀の切先はどんなに突き立てゝも六〇七耗、憶することなく、思いきり切りさばこう、そうして最後には、この可愛いお臍に短刀を突き立てゝ直下へ、そう十文字に立派に切りたい。そう云い聞かせる様に心に念じ、そっとお臍の窪みに右の人さし指を入れました。ほとんど指の第一関節まですっぱりかくれてしまうほど深い窪みです。

もう一刻の猶予ありません。右の手に逆手に短刀を握りしめ、左手で作法通り三宝をさっと後にまわし、背筋を伸ばして短刀をかまえました。

「藤村綾子、これより切腹いたします。お見とどけの程を……」

はつきりと口に出して云いました。左手を軽く下脇腹にそえ、下腹にうんと力を入れ「えい」と声をかけて左の下腹に短刀を突き立てました。「ちくり」とした痛さだけで、むしろ切れた痛さより打撲痛の方が大きい位でした。しかし、そのまゝ力をゆるめずにぐいと右へ引きまわした時、まさしく刀がぐい込みました。

はつとするほど激しい痛み、少しの切り傷でも痛いのに七耗の切先は完全にお腹の中に

入っています。絶対に手心を加えない最初の決心です。一旦手をとめたばかりに、左の脇腹からは二本の筋をひいて血が流れ落ちていきます。

何とすばらしい光景でしょう。ものに憑かれた様にぐいぐいと右へ切り廻して行きました。お臍の下二廻ほどのところを通って真一文字に右の方へ。はらはらと血が幾条もの筋を作って流れ落ちます。例えば七耗程度と云ってもわずかに傷は口をあけています。

あゝ、とうとうやった。やったわ。私は自分で私のお腹を切ったのよ。いや、まだ終わっていない。十文字に、お臍から下へ十文字に――。

右の脇腹から離れた短刀を今度はお臍へ、更にお腹に力を入れ、思い切りお臍の窪みへ切先を叩きつける様に突っ込みました。痛みは背筋にまで伝わりました。さあ、こゝから真下へ、――しかし、私は不覚にも右下腹から抜いたそのまゝの握り方で突き立てゝいたのです。

どうしよう、一度抜こうか、そして刃を下に向けて持ち直してもう一度突ッ込もうか。いやそんな手ぬるい事は――。瞬間私は、そ

の突き立てたまゝで刃を下に握り直そうと決心しました。

しかも突き立てた力をゆるめずに、ぐいと刃を下に向けました。「ぞりっ」切先はお臍の中を抉りました。思わずのけぞるような激痛。血汐が吹き出して来ました。

これしきでひるんでは――。そのまゝぐつと力を入れて切り下げようと思いました。しかし切先はお臍から簡単に出ません。お臍がぎゅっと長く下の方へ伸びたと思ったとたん、ぴりっとお臍の下を切りさいて短刀は下に走り下しました。ぐいぐい、一文字の傷口を越えて咲いた様に鮮血に染まっていました。

とうとう立派に切った。私は女ながら、こんなに見事に十文字腹を切ったのよ、そう叫びたい気持ちでした。

(注) この傷は全部自分で手当をして治しました。十文字の傷は十二日で治り、お臍はやはり一カ月ほどかゝりました。勿論今でも鮮やかに跡が残っています。

(おわり)

☆

☆

☆

☆



## ファンタジヤ

## マゾヒスティカ



山 本 節 夫

## マゾ趣味の広告

最近マゾ好みのPR広告が多くなったことは、すでにいろいろな方々から御指摘があったが、それから洩れたもの、一、二を挙げてみる。

まず、T薬品のビタミンC剤「ハイシー」  
勿論C分がエロエロだということであろうが、ハイシーという語感の好き。うら若い女性が薬屋で、「一寸。ハイシーくれない」などは想像するだけでもぞくぞくして来る。この製品の発売当時、新聞では大きなスペースを取って、三人位の若い男性が肩を組むその中の一人にがっしりと肩車にまたがったガールティン・エージャーが、美しい脚を思い切り伸ばし、上体を後ろにそらして、何か大声ではしゃいでいる写真が、連日掲載されたことがある。この構図が「若さにあふれる青春の力ハイシー」という文句にぴったりであった。それからこれは一寸旧聞になるが、平凡な明星であつたろう。あるチヨコレイト会社の懸賞で雪村いずみちゃんが西部スタイルの乗馬服姿で二丁拳銃を構え、両脚を大きく開き、腰を少々おとして、こちらを向いて狙いをつけているところの写真があり、これにび



ったりの文句を募集していた。二、三号後で、当選発表をみると、何とまたマゾ好みであったことか。しかもこれが、さる地方の若い女性の応募であった由。曰く

「ヘイ。ユー達。誰かミーのホースにならないか。」

「どう、見て。このりりしい姿を。このまま西部にいったら愉快でしょうね。何とかおっしゃいよ。ええ？ 何ですって、惜しむらくは馬がないって。そうなんだ。だから私、いま馬を探してるのよ。ちよっと、その男の子。私の馬にない？ 可愛がってやるからさ」

早い者勝ちですよ。さあさあ。

### 推せんマゾ・ポーズ

この所、マゾ・フォトも大変にぎやかで、一時は夢にまで画いていたような、そして到底公開誌などでは無理であろうと諦めていたような首乗り、顔乗り姿が写し出されて、マゾ男性はまことに楽園に遊ぶ思いがするのは御同慶の至りである。

ところで目新しいところで次のようなものはどうであろうか、その第一は題して「脚ばさみ」

これはいぢめっ子がよくやるスタイルで、相手の前に立ちほだかって、その頭を押え、

そのままぐっと自分の腹の辺りまで押し下げる。相手は四十五度の最敬礼以上の深さで腰を曲げさせられ、苦しがつて逃げようともがく奴を、開いた脚をずいと前進させて、首の辺りに逆さ馬乗りになって両脚で挟み上げつつ尻を頭上に落としてやる。犠牲者が上体をおこして逃げようとするのを押えつける。自分の目前に奴隷の折れ曲った背中と、盛り上って動く尻がうつるのだから、征服感もなかなかよろしい。しばらくその姿勢でハイシイハイシイとやってから、後は転がしてまたがるなり、馬にするなり御自由という次第。囲りで眺めている奴等に向い、美しい眼でキュッと睨みつけ、

「やい。お前達も抵抗するとうだぞ」

とか何とかいいながら「脚ばさみ」を楽しむサチスチンは居りませんか。

その二つは複数プレイ、これは格別新しい工夫ではないけれども、女王様の責めの公然性を明確にする事によって、馬になれる幸運者のマゾ精神を掻き立てるのに、効果が大きいと信ずる。

勿論、乗手の複数と馬の複数、またはそれ

らの組合せとケースはいろいろであるが、例えば

御一人は既に奴隷を馬にして意気揚々と室内乗馬を楽しんでいる。もう一人の方は、逃げようとするのをいまやっと組み伏せて、グツとのどの辺りに馬乗りにもたがって降参させているところ。

「早く馬にしてまたがんなよ。一緒に駆けっこさせてやるから。」

或は数匹の男馬が四這いにつながれて、その目の前を愛馬に打ち跨った女王様がハイシハイシと責めているところ。

「まっといで。こいつがすんだら、お前にまたがってやるから」

その三は、二の応用でもあるが男二人での馬。つまり芝居の馬の脚の覆いをとったものと考えれば良い。

前足の男はそのまま立っていて、後足の男は前足の男の腰の辺りに背を曲げてしっかりとかかる。この二人馬なら鞍をつけても結構またがれるし、乗馬気分も十分味えることだろう。

これで思出したけれど、少女歌劇でも時々馬が出て来る。颯爽とした男役がひらりとその美しい脚を思い切り開いて、人間の二人入



っている馬に跨る。『ああ、馬の足になりた  
い』とマゾ男は心の中で叫ぶ。女剣劇なんか  
で大江さんあたりが、裸馬にまたがる光景は  
ないであろうか。

### 若きサヂスチンの会話

初夏の東京を一目に見下す名物タワーの娯  
楽室には人影も無く、ショートパンツ姿の高  
校生が二人、西部風に仕立られた自動木馬に  
並んで乗っかり、心持よさそうに身体をゆさ  
ぶられていた。

十円玉の時間は短い。けれどももう何分か  
馬上にゆられて、暫くは休憩するのか、二人  
は専らおしゃべりに余念がない。

『昨日は愉快だったわね。あいつ等ったら、  
完全にいかれてたじやない。』

『大体人を見損って、そこら辺のおとなしい  
娘と間違えたのが運のつきさ。』

『でも恵子が大きい方の奴に押えこまれそう  
になった時は、一寸どきっとしたわ』

『ダイジョービ。こっちはいささか拳斗とレ  
スリングに馴染みがあるんだから。けど正直  
いって、始めのアップーカットがストレート  
で入るとは。』

『お釈迦さまでも』

『……ってとこね。あとはこっちのものよ。あ  
いつめ、すんません、姐さん達、だって。笑  
わせるわ』

『男は血をみると弱くなるってけど、ほんと  
ね。あの鼻血がとび出したとき戦いの勝負は  
きまったのよ。』

『女は逆に血をみると元気が出るんだから。  
あたいたなんか、むらむらと日頃のサヂ心が湧  
いちやって。』

『すごくよかった。あの態度。恵子の前に手  
をつく奴の首筋にぐいとばかりにふんまたが  
って啖呵を切ったとこなんか。胸がすっとし  
ちゃった。』

『首を締め上げて、全然無抵抗なのさ。こ  
いつはいけると思ってね、そのまま押し潰し  
て仰向かせてやった。チー坊だって、ころが  
して馬乗りで、さかんにハイドウハイドウや  
ってたじやない。』

『あれは恵子に刺戟されたからよ。きっと子  
分ね、あいつ。全然弱いよ。親分があっさ  
り“ノックダウン”されたら、もう逃げ腰な  
んだもん。そこをすかさず首をしめて、脚の  
下に土下座させ、えいとばかりに首に乗り、  
締め上げて降参させ、やい、こいつめ、仰向  
けになれ……』

『何よ、それ、芝居のせりふみたいに節つけ  
て。チー坊も馬乗りじや一人前になったわね  
でもハイドウハイドウはお腹の上だけじやな  
いのよ。ぐいと御尻をすすめて』

『顔の上にどっかりと……でしよ。私、頭に血  
がのぼっちゃった。いつか恵子にやられた時  
みたいに。』

『お馬鹿ちゃん、さあもう十円いれて動かそ  
うか。』

『あたし本ものの馬に乗ってみたい。むずか  
しいでしょうね』

『へっちゃらよ、馬なんて。またがればいい  
んだから、またがって手綱をにぎればこっち  
のものよ。あとは気の向くままにハイシハイ  
シと走らせればいいんだから』

『今度つれてってね。おねがい。』

『よし、よし、だけど、それよかまた、男の  
子つかまえて馬の代りにして遊ぼうよ』

出ることなら馬に生れ変りたい。

お美しく、お元気な御姉様の馬に生れて  
毎日乗り廻して頂けたら、どんなに嬉しいこ  
とであろう。

荒い馬の鼻息が耳許できこえ

お姉様のやさしい御顔が近づいて来る。



華奢な御手を真白い手袋でつつんで  
静かに手綱を絞りながら

女神様の鈴のような御声がきこえて来る

(坊や、また来てたの、悲しそうな御顔を

して。御姉様が御馬に乗っているから？

いい子ね。もう少し待ってらっしゃい。

坊やも御姉様の御馬にして可愛がってあ

げるから。ね。おとなしくいうこと聞く

わね。」

そういう終るとぐいと馬首を立て直し

にっこりと御笑いになりながら

愛馬に拍車を入れて最後の責めにおかかり

になる。

愛馬「春風」はヒヒンといなきながら美

しい人を乗せて走り去って行く。

### 「少年の日の夢」

御花畑を通りぬけて馬場にくると、

御姉様に颯爽と愛馬に打ちまたがって

いましも駈足の真最中

カッポカッポと響きの良いリズムが

馬場一杯に春の空気を震わせる。

ふさふさとした柔かい黒髪が

雪のように白い高貴の額になびいて

エメラルドそのままの澄んだ大きな瞳が、

うつすらと微笑みながら前方をみつめる。

黒い背広に真白のジョーブス、

ああ。それに包まれた神聖な御み足、

ピカピカにみがかれた黒長靴は

ぴっちり馬の胴をしめつけて、

時折、銀色の拍車がきらりと輝く。

花の精のように美しい御姫様。

私の尊敬するやさしい御姉様は、

いま黒鹿毛の背に身をゆだねて、

心持よい乗馬の気分を味って居られる。

忘れられた私という存在。

「待った？坊や、さあ、今度は御前の番

よ。乗馬服のままが良い？どっち？

よし、よし、じゃ両方だね。さあ、馬に

なって、またがるわよ。ハイシ、ハイシ

もっとがんばって。はい、右へ。ドウド

ウ」

少年は大好きな大好きな御姉様の馬にして

頂いて、嬉しさに顔をほころばせながら、

一生懸命に力を入れて御部屋の中を這い廻

る。時折り軽く鞭が飛び、細い少年の胴の

辺りは、尊い女神様の乗馬靴できっちり

締めつけられる。

「それそれつかれたようね。これ位で許

してあげる。お馬鹿ちゃんね、仰向けに

潰れる馬なんてありますか、どう？御姉

様のジョーブスは馬の匂がするでしょ

う。いやよそんなにもがいちゃ、くすぐ

ったいわ」

美しい女騎士はすつくと立ち、乱れた御ぐ

しをお直しになる。少年は起き上ると御姉

様の前に膝まずき、いままで「春風」の腹

を思い切りせめたてた、黒い乗馬靴をおぬ

がせる。

「ありがとうよ、坊や、早く御馬におな

り。嬉しいでしょ。ヒンヒンないたりし

て、まだ潰れるのは早い。いうこと聞

かないと承知しませんよ。仕様のない

子。ほんとに降参した？じゃあ勘弁し

てあげる。重いでしょ、苦しいの？さ

あ、もういいわ、また、あしたね。」

さようなら、さらなら、

大好きな御姉様、やさしい御姉様。

美しい女神様、僕は馬になりたい。

今夜も夢の中で私は本物の馬になって、

心ゆくまで綺麗な女騎士の鞭と拍車を

受けるのです。私は待っています。

「可愛い、私の小馬。」

という御声を。

(おわり)



## ある女の記

作

創

## 平 家 部 落

楠 佐 和 子

「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった」……これは有名な小説『雪国』の書き出しです。何故、私は今それを思い出したのでしょうか。トンネルを出た汽車は、満々と水をたたえたダムの上を走っているというのに……永い間、離れていた故郷の美しい自然は、この巨大なダム工事で近代化へと進んでいるようでした。昔、この辺は天下の絶景、巨岩奇岩を縫って急流を下る球磨川下辺りで美しい紅葉を誇っていた処でした。しかし現在、その汚れたような青さの水面の真中にはまだ枯葉の樹が立っているのも、このダムの新らしさを物語っているようです。

「変ったワ……」私は胸の中でつぶやき乍ら、なじめない白いダムをじっとみつめました。

汽車は再びトンネルへ入りました。八代から人吉へと走るローカル線の煤煙に汚れたガラス窓に映る蒼白い顔。それは東京から長時間の旅に疲れた私のやつれた顔でした。

見られている。誰かに見られている……。

私は、はっとした胸騒ぎを覚えました。でも見られている筈がない。車中には誰も顔見知りの人はおりません。実際に私を見つめている人はいないようでした。でも何かに見つめられているような、暗いトンネルの中の射る

ような二つの眼が、私の意識の中から消えないのです。そんな馬鹿な……私は否定しましたが、故知らぬ恐怖感は去りません。

いえ、そんな筈はない。車中の客は、きつとこんな地方では見慣れない私の着物が珍しいのだ。商売柄、安物ではあったが、派手な和服なのです。花模様を散らした赤地に黄色の大きな扇の型を浮き出した柄が異様だったかもしれない。

それにしても私は何故、人にみつけられる事がこわいのだろう？ 私は、わざわざその人達の前に姿をあらわすために帰って来たのではなかったのか……。私にどんな恐ろしい制



裁が待っているかもしれない事は、もとより  
覚悟の上なのです。

なつかしい故郷へ帰って来たというのに……  
だが、得体の知れない射るような視線

から、恐怖にこわばった顔を崩す事が出来な  
かったのです。

汽車は直ぐトンネルを出て、やがて、まだ  
昔の面影をそのまま残している球磨川の清流

に沿い、薄暮の終着駅、人吉盆地へと入って  
来ました。

自分でも掴みがたい、おののきの思惑とは  
離れ、機械的な時間の正確さに縛られて非情  
のルールは流れて行きます。

縛られる……それは私の運命で  
もあったようです。私は縛られてお  
仕置を受けるために帰って来たので  
した。縛めの仕置を甘受するために  
……。

原子時代のこの世にそんな馬鹿な  
事が、と皆様はお思いになるかもしれ  
ませんが。悦虐の道を歩んだ愚かな  
三十女の夢物語とお笑いになるかも  
しれません。そうです、私自身にと  
っても思いもかけぬ夢のような人生  
でした。まるで作り話のような。

すっかり暮れた秋の空。山にかこ  
まれた人吉の町の小さな旅館の窓か  
ら私は遠い山肌を眺めています。私  
の前には宿帖があります。

“楠佐和子、三十五才、女給、東京  
都豊島区池袋”私は、正直に書きま  
した。

球磨川の上流が窓の下に流れてい





ます。そしてこの流れの源である深い山の奥に明日は行かなければならないのです。

わびしい町のネオンも一つ二つ、急流に映って逆に淋しさをさそうような中に、一際、物悲しく汽車の汽笛がなりひびきます。終列車の出て行く合図でしょう。

思えば十五年前、私はその汽車に乗ったのです。何処へ行くというあてもなく……。

明朝、私はこの駅前から、がたがたのバスに乗らなければなりません。東京へ帰るなら今のうちです。ここから帰ってしまえばいい……。

でも私の意志とは別に、もう一人の私は否も応もなくバスのステップをふむ事でしょう。私の身をがんじがらめに拘束した眼に見えない縄尻を曳かれているように、後手の私は強制されているのです。

溪流の流れに沿って二時間ほど山道をゆられ辺鄙な部落に着きます。ここはバスの終着点。人の住むのもここまでのようです。それから私は、更に七、八里もある山奥へ登っていかねばならないのです。恰も義務づけられた行動のように……。

四時、頂きに雲をいただく県境の山奥、笹深く、峻しい山道。しばらくは歩き慣れぬ山

道に足をとられ、せつかくの晴着の裾を濡らすことでしよう。

美しい着物は私の幼い時からの憧れでした。旅の道とて新調したばかりの振袖こそ着ませんでしたけど、本当はあでやかな振袖姿で故郷に帰りたいかったです。それで秘かにスーツケースの隅に長いたもとはしまつて来ました。私の、東京でさえ、「まるで京人形のように」といわれた美しい姿を、一目でも盛夫さんに見せたい、いえ、見て貰いたいがために。

盛夫さん。その人は今、どうしているのでしょうか？

ようやく人の通わぬ山道を登り、なつかしい部落の入口に辿り着きました。そこには必ず部落の若者が立っているのです。民治かもしれない。それとも参吉か、いえ、或いは盛夫さんかもしれない。盛夫さん、盛夫さんであってほしい……。ああ、盛夫さん。私は秘かにそう念ぜずにはいられませんでした。

部落の入口には、見張りとか客の取次ぎを受持つ若者が輪番制で立っています。部落で密醸酒をつくるので官憲への見張役にもなっているのです。そして、この役目は一人前

に成人したばかりの若者にしかあたえられない、名誉ある仕事でもあったのです。

でも、警察への警戒は別としても、いえ警察だって恐らくは来ません。それなればこそ他から干渉されない法律……私刑を持っているのです。かくも山奥の、恐らくは殆んど他からは訪れる人もいない木根部落で、今もこんな事が行なわれているのを、あなたはお信じになるでしょうか。

それは、平家の落人部落としての永年の習慣だったのです。凡そ八百年も前、栄古盛衰の理に従い、祇園精舎の鐘の音に、源氏に都を追われ、壇の浦の戦いに生きのびた平家の公達やお姫様達が追手の眼を逃れ、やっとの思いで、この山奥に落ちのびて安住の地を見出したのです。それでもなお、都人達は慣れぬ深山の生活で風の音におどろき、夜の怪鳥に心胆を寒からしめた事でしょう。その当時からおびやかされつづけてきた部落の見張役の慣習は物悲しい平家の末路を語るにふさわしい役目でもあったのです。現在も尚、私達部落民の胸には高貴な先祖を誇る思い出にそれを捨て切れず、若者から若者へと受けつがれてゆく、重要な仕事ともなっているのです。



私は、やっとの事で部落の入口に辿り着きました。着物の裾は泥にまみれ、ふくらはぎには岩にかすった血さえにじんでいます。見張りの若者は私の華やかな出現に驚きました。無理ありません、殆んど来訪者のないしかも滅多に女性の訪れをうける事がない異境の部落なのです。

「私よ。サワ子……サワよ」

私の言葉に若者は、まじまじと私の顔をのぞきこみました。

「盛夫さんは、どうしていますか？」

その質問に彼は答えませんでした。

「お前、本当にサワ子か？」

きっと彼自身も反問している事でしょう。

何という迂闊な質問だったのでしょうか。あれから十数年余、盛夫さんも、もう立派な壮者として部落の働き手になっている事でしうに。

途々、見張りが盛夫さんであってくれればいいけど、と思いつめて来た私のあさはかさ。あの人はもう若者ではないのです。

「あッ。あんた、真ちゃんね」

私は、まだ子供だった彼の面影をみつくなつかしく呼びかけました。その成長が十数年という才月の長さをしめしてくれました。

でも、彼は私が本当に佐和子であると知ると、不意に私に襲いかかり私の両腕を後に捻じあげました。

「あッ!!痛いッ。何をするの？」

千切られるような痛さに、私は思わずはげしく抵抗しました。しかし彼の逞しい力には敵うはがありません。私は彼の腰にさげていた荒縄で忽ち後手に縛り上げられてしまいました。はかない私の抵抗で着物の襟も乱れ、折角の晴着も荒縄で滅茶苦茶にされてしまひ、帯も解けて浅間しい姿にされてしまったのです。でも自由をうばわれた身にどうする事も出来ません。

でもここで括られる事は覚悟はしてました。いえ、それよりも永い被虐の生活に、むしろ括られる事を甘美な思ひにしてやって来たのです。それはこの部落の常として部落からの逃亡は、殺人につぐ重大犯罪だという事を知っていたからです。

人里はなれた深山の生活とて、それに対する私刑は極めてきびしく、警察の眼もとどかず今もなほつづけられているのです。私も幼い頃、その禁を破り部落を捨てた若い女が人吉の町で捕り、縛られたまま部落の裁判にかけられて気が狂ってしまったのを、恐怖の

眼でみた事があります。今の私には、それと同じ運命が待っているだけでした。

「でも、せめて括られる前に盛夫さんに会いたかった。美しい姿をみていただくために、どんなひどいお仕置も甘んじてうけるつもりで帰って来たのに……」

縛られたまま、更に歩きにくい山道を裸足のまま追いたてられ、今も変りないわが家の座敷牢へとじ込められた私。

年老いた父も母も悲しそうに、後手に縛り上げられた私の姿を、格子ごしに見つめていました。

座敷牢……今時、日本にもこんなものが存在しているのを御存知でしょうか。いいえ、私の部落に、現にこうして私は縛り上げられた縄も解かれずに、押込められているのです。

それも、やはり平家落人の悲劇のあらわれであったのです。十幾人かの人達によってつくられた部落。外界から逃げかくれるためには、当然、部落内の近親結婚が行われて、この部落を形づくったのです。純粋に平家の流れをくむ人達も、今では千幾百人とふえました。でも、そんな近親結婚の結果として、この家庭でも一人や二人の精神薄弱児や気違



いを出してしまい、各家では、いつからともなくその人達を収容するために座敷牢を作って、一生涯閉じ込めてしまおうようになってきたのです。現在ではもうその必要もないのですが、古い伝統の格式は一種の建築様式としてその名残りをとどめ、押入れや物置がわりとして使用されているのです。

……私は暗い座敷牢の板の間の一隅に縛られたままの、自分ではどうする事も出来ない不自由な身を横たえ乍ら、ひたすら盛夫さんの出現を待っていました。でもその人が現われたとしても、どうすることが出来るというのでしょうか。

以要以上なお仕置でした。私の再び逃れる事を防ぐために着物をはぎとられ、長襦袢姿のまま、高手小手に縛められているのです。きつい縄目の痛さを訴えても、部落長の厳命には肉身の父や母といえども手

を触れる事は許されない非情の掟です。

おども 勧進 勧進

あん人達や よかし

物悲しい子守唄が流れて来ます。この部落の貧しい生活をうたった落人の娘達……淋

しい諦めの中から口ずさまれて来た単調なひびきは、世間で唄われているようなお座敷臭ではなく、山間にこだまする素朴な、うただけなのです。

両手が、背中の上で既にしびれて感覚もなく、乱れた裾に羞恥の感も忘れて、私は貧しい少女が唄う無心な唄声にきき入りました。

おども 盆ぎり 盆ぎり  
盆から先きや居らんと  
盆が早よ来りや 早よも  
どる

………そうです。あの時にも、私は同じようにこの座敷牢の中でお仕置の縄を受けながら、この子守唄をきいていました。

その時の私には今のようにな静かな諦めもなく、ただ恋しい人との仲を無理にさかれた悲嘆の涙にくれ、身の自由をうばった呪わしい後手の縄からなんとかして逃れようと身をよじり泣き





乍ら、あの人の……盛夫  
さんの名を呼びつづけてい  
たのでした。

おどんが打死んちゅて

だいが泣いてくりゆき  
や

山の鳥と 蟬ばかり……

何故、私はこのようにひ  
どい折檻をうけねばならな  
かったのでしょうか。

幼い頃、いたずらが過ぎ  
て、よくこの暗い牢屋に閉  
じこめられた事は何度かあ  
りました。でも、こんなに  
きつく括られて放り込まれたのは、十五年前  
のあの時が初めてでした。

私とあの人は、人の噂にもならないよう  
な、ただあたり前の恋愛でした。しかし山育  
ちの私には、おそまき乍ら初めてもえ上った  
不思議な情熱の灯だったのです。

私は父の手伝いとして炭焼きに、そして盛  
夫さんはすでに立派な若者として、自分の家  
の炭焼に精を出していました。私の家とあの  
人の家は近くにあったものですから、自然、  
会う機会も多くなっていました。でも、せ



まい部落ですから部落の人に気づかれぬよう  
滅多に話合う機会ありませんでした。かつ  
ての日本の支配者の子孫として、すべて格式  
に生きてきた私達には、たとえ土にまみれた  
ボロを着ていようと、若い男女の勝手な交際  
は特にうるさかったのです。

それでも私達には楽しい日々でした。お互  
いに重い炭俵を背負ってすれ違う山道も生き  
生きとして、たとえ口はきけなくとも私達に  
はあたたかい愛情の交流があったのです。希  
望にもえるような日々でした。

こうした楽しい日々の中  
にあって、ある晩、私は父の  
目を盗んで盛夫さんと一刻  
を過したのでございます。

月の美しい晩でした……。  
でも、私が体の変調に気  
がついた時、そこには私の  
将来を変える恐ろしい運命  
が待ちうけていた事に気が  
つきませんでした。私の秘  
密にも母が気がつかなかっ  
た筈はありません。母の胸  
には、娘の異常を心配する  
あまりの、恐ろしい計画が

秘められていたのです。

それから四、五日後の夜、夕食も終って快  
い仕事の疲れを憩っている時、父から、炭焼  
小屋に鋸を置き忘れて来たから取りに行つて  
くるよう命じられました。私は夜道の怖さが  
気にはなりましたが、楽しい気分と、それに  
或いは盛夫さんに会えるかもしれないという  
希望に胸をふくらませて出かけました。

けわしい山道で私の希望通りに盛夫さんに  
会う事は出来ませんでした。でも私は二里も  
山奥の闇の道をここまで来た事を決して後悔



はしません。帰ったら盛夫さんの事を両親に打聞けて許していただく事を考えていたからなのです。その時の切り出しの文句を思わず顔あからめて考え乍ら、ほの白い提灯の火で暗い小屋の中から鋸をさがし出し、外に出ようとした時です。

「あっ！」

私の声は思わず恐怖にひきつりました。誰かいる……。暗闇の出口に大男が立っているのです。

「誰？ 誰なの？」

私は小屋の一隅に身をひそめ乍ら危険を感じて問いかけました。その男は突然、大声をあげて笑い乍らいいました。

「俺だよ、俺。おどろいたのかい、あっははは」

ぬうっと入って来たのは……。高島の叔父さんだったのです。

私は、ほんと安心しました。でも何故、今頃この叔父がこんな山奥にあらわれたのでしょうか。私の胸に不吉な予感がよぎりました。「心配する事はない。サワちゃんの倅せのためには相談に来たのだよ」

叔父は卑らしく笑いしました……。卑らしく。私はこの叔父が大嫌いだったのです。脂の

のった中年の男に本能的な嫌悪感さえ感じているのでした。

しかし、その言葉にやっと安緒を覚えて叔父と相対しましたが、切り出された話は予感通り盛夫さんとの事でした。しかも、はるかに私の予想をこえた恐るべき話……。叔父の静かな口調は、静かなだけ余計に不気味なものでした。

シェークスピアの「ロミオとジュリエット」の悲劇は、どこにでもあるものです。

私の家と盛夫さんの家も部落の役職をめぐって宿敵の間柄だったのです。何という事でしょう。初めてきく意外な話に、私はくらくらとして倒れてしまいました。

おまや平家の公達ながれ

おどま追討の那須の末よ

お隣りの椎葉地方にうたわれるひえつき節に、この時ほど、格式と面目にのみ生きる武士の血筋をひいている事が、呪わしく思えた事はありません。この部落の異常な掟は、日本の民主化とは関係なく、それだけでも結婚をさまたげる大きな理由になり得る事は、私の恋に燃えた胸にもはっきりわかる事です。

私の眼前は真暗になりました……。

「サワちゃん、お前、本当に盛夫と？」

やさしい叔父の言葉。私は思わず肯いてしまいました。

その時、突然、私の体は驚くような強い力で小屋の壁に叩きつけられたのです。

「フシダラ女！」

叔父は、はっきりそう叫びました。私は叔父の意外な態度の変化と、はげしい痛みに呆然として起き上る事も出来ません。

「お前、本当に産む気か？」

怒気にふるえた叔父の声に、私はおののき乍ら答えました。

「産む……」

「馬鹿野郎」

腰のあたりを思い切り蹴とばされ、私の体は一転しました。

「来い！」

私は襟がみつつかまれてずるずると曳きおこされました。

わかりました。その時、叔父は何のためにわざわざここに来たのか、はっきりわかったのです。私の抵抗は益のない事でした。何度も地面に叩きつけられ乍ら、私はただひたすら盛夫さんの救いを待ちました。しかし、その事がかなう筈はありません。すでに気を失いかけていた私は、叔父のなすがままにさ



れました。僅かに残った気力と力無い抵抗はしたものの、所詮はかないもがきでした。私は小屋の表につき出されました。処かまわず振下される叔父の手の枝鞭。

私の悲鳴以外に何一つ物音もしない暗闇の深山です。ただかすかに谷川のせせらぎが遠く聞えて来た筈です。

そのせせらぎ……私はそこまでひきづられて行き、その水の中に投げこまれました。

身を切られるような冷めたさに思わず逃れようとした私の体は叔父の手でしっかと押えつけられ、そして僅かに水面に出していた顔も、やがて水中に没してしまいました……。

やっと気がついて家へ逃げ帰った時、母は私の顔をみて、悲しそうにぼつりといいました。

「すまなかったね。でもこうする以外にお前のふしだらをかくす方法がなかったのだよ」私はただ口惜しさと悲しさに、わっと泣き伏しました。その晩から私は高熱におそれたのでした。そしてこの野蛮で幼稚な方法は成功したのでした。

盛夫さんとのことを闇から闇に葬ってしまった悲しみの病床にあって、更に悲しい話、盛夫さんが他の女をお嫁さんに貰うという話

もきましたし、私は高島の叔父さんのところへ嫁に行かなければならない事も話されました。

叔父は先年、奥さんをなくしたばかりだったのです。この近親結婚も他部落とは孤立している関係上、別に珍しい事ではありませんでした。

私は黙ってその話をきいていました。そんな事はどうでもよい。私は盛夫さんを信じていました。そして、恐い事を考えていたのです。

逃亡です。このいまわしい部落から逃げる事です。盛夫さんもきっと一緒に逃げてくれるだろうと……。

何という浅薄な思慮でしたしょう。私の決心を打開けるため両親の目を盗んで盛夫さんに会った事は、父を激怒させてしまいました。年老いたとはいえ、怒りにふるえる父は泣いて許しを乞う私を組伏せ、情容赦もなく縛り上げて座敷牢にぶち込んでしまったのです。後手のきつい縄目は私が改心する迄は決して解いてもらえないでしょう。そしてその時、私はあのいやな叔父の花嫁にならなければならぬ時なのです。誰かがうたう子守唄をききながら盛夫さんの事と「死」を考えて

ました。

時間が流れ、もうその子守唄もきこえなくなりました。

家の人達も寝しずまった様子です。きつく喰い込む縄目に身動きすら出来ず、私は牢の板間にころがっていました。死んでも叔父の処へなんか嫁ぐものか、と歯をくいしばってしめつける縄目の痛さをこらえていました。

「サワちゃん、サワちゃん……」

低く押しつぶしたような声で私はよばれたような気がしました。かたまりと小さい牢の戸口があいて入って来たのは盛夫さんではありませんか……。

「あ、盛夫さん……」

「シッ……静かに。さ、早くここを逃るんだ」

そういう乍らあの人は私の後手の縄を解こうとしますが、暗いうえに、きつく縛ってあるので、なかなか思うようになりません。

若し誰かに気がつかれたらどうしよう。焦った盛夫さんは山刀で私の縄を切ってくれました。その時、私の腕も少し切られました。でもその時は、そんな痛さにも気がつきませんでした。

歓びと自由の身になった私は、ほっとする



間も惜しく盛夫さんと一緒にひそかに、しかし急いで家の外に逃げ出しました。

「さ、ここに僅かだけのお金がある。これを持って八代で待っていてくれ」

「いや。一緒に、一緒に行きましよう」

「駄目なんだ。俺は一寸都合が悪い、二、三日経ったら必らず八代に行く。待っていてくれ。さ、早く！誰も来ないうちに……」

「じゃ、八代で……きつとね」

私は気もそぞろに急いで山道をかけ下りました。盛夫さんの言葉を信じて疑わなかったのです。

でも、盛夫さんはその時、私と別れる決心をしていたのかもしれない。

幸い暗闇にまぎれて誰にも気づかれずに部落を逃れ、人吉の町に出たのは翌日の昼頃でした。その夜の終列車で、私は八代まで出ました。ここで私は、日本の敗戦の現実をみたのです。

人里を遠く離れ、社会とは隔絶された私達の部落には敗戦がいかなる

ものか知るべもなかったのでしょう。いえ、日本が戦っていたことにも、余り身近な感覚はなかったでしょう。

戦火に焼かれ、混乱している都会。旅館もなく住む家もなく橋の下で野宿している人々。勝手知らぬ私もその中に入って、ひたす





ら盛夫さんを待ちました。三日、四日、一週間、そして十日。でも、遂に盛夫さんはあらわれませんでした。あの時、預ったお金も闇で買う食糧のために、もう残り少なくなってきました。

そして、ある日、どうしようかと心細さに駅へ来て汽車をみていた時、私は、はつきりとみたのでした。部落の若者の姿を。私を探す追手でした。

今まで盛夫さんの事ばかりで、若し捕ったなどと考えた事ありませんでしたけど、もし部落へ連れもどされたら、私には恐ろしいお仕置が待っている事でしよう。

“もう待てない”私は追手の目を逃れて、満員列車に乗ってしまいました。何処へという目的もありません。もう、ただ遠くへ逃げたかったのです。

そして二晩日……。私は人にもまれて東京駅のホームに吐き出されました。

東京。この巨大な暗黒の大会。一面の焼野原と、きびしい敗戦の混乱。山育ちの私には、どうしたらよいのか見当もつきませんでした。

呆然として無我夢中で生きて行くこと、私の進んだ道は結局、お定りのコースをたどる

以外にありませんでした。場所こそ銀座裏から新橋、新宿、上野、渋谷、そして最後は池袋へと転じましたが、毎夜ネオンの下に立つ女になっていたのをごさいます。

その間の苦しい自暴自棄の生活は、皆様の御想像におまかせ致し、敢てくどくどと申し上げたくありません。本当はその辛苦の生活を思い出したいからなのです。ただ申添えておかなければならない事は、殿方のおもちゃとしての生活が、いつか悦虐へのマゾに交っていった事です。自らを人間以下に蹴落す自虐の生活。その生活の手段が私に本性を狂わせ、苛め抜かれる事に甘美な思いを嗅ぎ出すことを会得させたのでした。

ようやく敗戦の混乱もしずまると、ただそれのみによって生きてゆく事がはずかしくなり、まして、山育ちの私には男性を繋ぎとめて置く魅力に自信がありませんでした。そのために無意識にそうなったのでしょうか。池袋に定着する頃から、私は縛られる女になっていたのです。それはある晩お客に縛られた時からですが、それが次第に評判になると、急に客が付き始めました。そんな変態的な魅力が客の好奇心を呼んだのでしょうか。

私も始めは背後に重ねられた手首にぎりぎりとロープがかけられる時、部落でのあの忌

わしい思い出につながり、とても厭でしたが、次第に馴れて来ますと、その忌わしさを越え、盛夫さんへの思出につながり、いつしか、細引を要求するような気持になってしまっていたのです。長襦袢と生ある細引は、私の新しい営業方針として貯金の額をふやしていきました。

それから、とんとん拍子でした。貯えた資本で池袋のマーケットの中にお店を一軒買って、飲み屋を始めるところまで漕ぎつけたのです。何度か結婚のお話もありましたが、盛夫さんとの夢を捨て切れず、すべてお断りした感傷的な女でもあったのです。

とにもかくにもお店を持って人間らしい生活にもどったある日、マーケットは魔の業火に襲われ、私の店もすべての財産も一握りの灰となってしまいました。

勿論、火災保険などありません。呆然として涙もかれ果てた私の胸の裡に懐しく浮び上ったのは、あれきりになった盛夫さんのやさしい笑顔でした。

会いたい、一目でいいからお会いしたい。ただむしようにそう思うと、耐りませんでした。一時の制裁はどんな事があっても堪え忍べる。

どんなお仕置だって盛夫さんのためなら。たとえ一年や二年、いえ一生縛られたままの不自由な身であっても。



私はそんな自分の弁解めいた気持の中に、長い事忘れていた悦虐の血がもえ上っている事に気付き、思わず顔をあからめました。部

落へ帰れば必ずお仕置が待っている事はわかっていのですから。  
……そうして、その思い通り、私は今、長

## 女装 通信

### 女装プレイについて

小田 奈美 夫

皆様お元気ですか。私は女装マニヤですが、最近長い間求めていた同好のSさんを得て二人で思い切ったプレイを楽しんでいます。それで今日は、皆様に私とSさんのプレイの一例をお話します。

その前に私とSさんが、どうして知り合ったかを話さなければなりません。半年ほど前、私がある古本屋に入った時です。ふと見ると丁度、私と同年輩位の男の人が熱心にKK誌を立ち読みしているのです。さり気なくその方を注意して見ていると、その人は女装のページを見ているのです。その態度、目つき等で私の第六感が、この人が私と同じ傾向であることを知りました。ややあって、その人はKK誌を二冊買って出て行きました。

私は悪いとは知りながら、その人の後についていき、思い切って声をかけました。それがSさんでその後、ずっとお付き合いしていただき、今日に至っております。Sさんも私と同じように和装が好きです。

自分の事を言うのを忘れていましたが、私は二十六才の独身のサラリーマンです。身長一六〇センチ、男子としては肌が大へんなめらかで肉づきもよく、のどぼとけもほとんど出ていません。特に首すじから肩にかけての線は、私の最も好むところで、練白粉で塗り上げると私自身惚れ惚れするくらいです。残念なことには色が太へん黒く、その為でしょうか、私の女装は和服の濃化粧をした芸者に作るのが好きです。

私とSさんプレイは、毎週土曜日夕方から、私のアパートで行います。待ち遠しい土曜日が来ると、会社から飛ぶように帰って、約束の時間までに女になるためのたしなみとして、風呂に入り全身を石けんできれいに洗い、白粉ののりを良くするために白粉を塗る場所のうぶ毛をきれいにカミソリでそり、コールドクリームでマッサージし、最後にスプレーで香水をたっぷり全身に吹きつけます。

やがてSさんがやって来ます。二人で今

襦袢の上から、きつく縄をかけられ座敷牢にころがっています。

それにしても盛夫さんは？ 私がかうして捕えられている事はすでに部落中に知れわたっているでしょうに……。

翌朝まで後手に括しあげられた縄を解いてもらう事は出来ませんでした。そして陽も昇り、やっと自由の身にされた時、私は部落長の庭先につき出され、一枚の荒ムシロの上に坐らされたのです。先祖伝来の兜や鎧の飾つてある庭先の部屋が私に対する法廷でした。そこで私は、先ず意外な質問に驚かされたのです。

「盛夫はどこにいる？」

あゝ……私は何という愚かな女だったのでしょうか。盛夫さんにたゞ一目だけでも、とそれだけを望みに帰って来たというのに、盛夫さんは部落にはすでにいなかったのです。いえ、あれから間もなく私を追って東京へ逃げたんだそうです。

帰らなければよかった……もう後悔しても追いつきません。同じ東京の空の下なら、いつかは会えたかもしれないのに……。

部落長の門先の樹に再び後手に括られ、その縄尻をつながれて晒の刑をうけるのも、あの人がいるのなら忍べるのに。

すべての希望を失った今となっては、たゞ羞恥と自虐の情にもだえるだけでした。



日のプレイのストーリーを考えます。例えば最近行った例で言いますと、姉芸者が妹芸者に無理な事をさせようとする。妹芸者はそれが出来ないで、縛られ、むちと浣腸で責められる。姉芸者はSさん、妹芸者は私というように配役がきまります。

次にお化粧です。先ず「ピンツケ油」をていねいに襟から顔にのびします。練白粉は私は舞台化粧用を使います。その方がずっとよく附くのと、濃化粧をしてもむらがないからです。板ばけにたっぷり含ませた練白粉を襟から肩にかけて塗ってゆくのひんやりとした感触、ほのかな白粉の香り、その心地良さはマニヤの方でなければわからない気持でしょう。ボタンばけでならしながら真白に塗ります。背中も思い切って深く、手は二の腕まで塗ります。顔を紅でぼかし、目くまを入れ、口紅をぬり眉をえがく頃になりますと、鏡に写る美しい姿に私は妖艶な興奮を味うのです。

次に真赤な腰巻を素肌に巻きます。真白な肌との対比がたまりません。私はそのサリとした感じが好きなので、下着は全部ナイロン製を使用しています。それに私の場合、一度使用すると、下着に真白に白粉がつきますので、洗う時にも便利なのです。

着物は襟足の白さが引き立つように、紺系の縞模様には黒襟をつけたものを愛用し襟を思い切り仇っぽくぬいて着ます。帯をしめ、かずらをつけると完成です。Sさんの女装も完成しますと、二人は思わずお互に顔を見合せ、ちよつとしなを作ってほほ笑みます。

いよいよプレイが始まります。姉芸者のSさんは妹芸者の私に、いろいろとはずかしい事をさせようとしています。私は「どうぞお許し下さいませ」と手をついてあやまりますが、許してくれません。私達はこのような女としての仕草や言葉で完全な女になり切り、倒錯の世界に酔うのです。

言う事を聞かない私を、Sさんは遂に縛ります。後手に縛られた私は、床にころがされます。着物の裾がみだれ、真白な脛が露出すると、Sさんは狂気の如くむちで打ちます。そして最後に私は強引に浣腸責にされるのです。

心地よい疲労、まださめやらぬ興奮に、お互に満足し切った濃化粧の顔に汗がにじみ、私達は私達だけにしかわからない幸福感をしみじみと味うのです。

以上が我達のプレイの一例ですが、女装マニヤの皆様の何か楽しいプレイがありましたらお知らせ下さい。

でも、あの人はあの時、私と別れるつもりだったのかもしれない。あの人はあれから私を逃した事を部落の人々に告白し、いさぎよく刑をお受けになってから何処ともなく姿を消したのだそうですから……。

部落の人達の好奇の眼は、樹につながれた後手の私の姿に注がれています。すべては諦めなければなりません。土の上に座らされている私の五体は、しびれと疲労に感覚を失っています。明朝まで又、縛られたまゝ夜を明さなければならぬのです。その被虐の苦痛から解放された時、私は部落を捨てた罪に対する最後の、そして最大の刑を受けなければならぬのです。

高島の叔父……あの肥満した中年の男の花嫁にならなければならぬのです。それは着飾った花嫁姿を荒縄で縛られ叔父の家まで曳かれてゆくという最大の屈辱の礼をもって。

縛られた花嫁。すべての自由をうばわれた絶望の姿。こうして私は近親結婚という特殊な制度の中で、高貴な平家の純粋な血筋を守りぬく誇りの山の中で、半生を、いえ、自らもその身を埋めて一生を終る事でしよう。私を後手に縛りあげ、胸へもかけられる縛しめの縄と、もに、たゞ平家部落という目に見えぬ縄が、私を一生、縛りつけておくことでしよう。そして私は、もうそれに抵抗出来ない女になってしまったのです。



## 女斗美マニアの告白

## 娘相撲と格闘場面

円 山 景 三

人は誰しも色々と趣味が有るが、私が現在の様に女斗美マニアになったのは、やはり次の様な機会からで、これが年と共に嵩じたのであると自分では思っている。

幼児の頃私は田舎で育ったが、祖父が大変な相撲好きで、よく宮相撲見物に連れて行ってもらったもので、当時私の地方の宮相撲では、最後の方になるとマゲを結った力士（巡業力士かも知れないが）が一、二番取組んでいたが、男とは知らず子供心に強い女の人だなあと考えたものである。小学校三年の時、父が近くの町で呉服商を開いた為に転校したが、毎年夏休みは田舎の祖父の家で過すのを例としていたのである。

私が商業学校一年の夏休み、例年の如く祖父の家へ行ったのであるが、当時祖父の家族は祖父母と叔母になる二十一才の多恵姉さんと女学校一年の多津子姉さんが住んでいた。多津子姉さんは、私の父とは親子程開きがあり、叔母と云っても私が早生れの為一才年長の叔母で、小さい時から姉弟の様につき合っていたのである。当時、祖父の家は三町歩程の地主で、広い屋敷には米倉も二棟あり、他に小さい乍ら以前筍のカンヅメ工場だったと云う倉庫もあって、仲々立派な構えである。

特に此の工場跡の倉庫には土俵が築いてあるが、これは村の青年達が秋祭りの相撲の練習の為、雨天にも稽古出来る様にと造った由で此の年は新しい公民館に立派な土俵を築いたので不用になり、そのままになっていた。

或る日祖父母は「親類に用事が出来て今晚帰らないから、戸閉りをしっかりして早く寝るのですよ」と云って出られたので、私達は比較的早く床についたのである。

夜中に用便に行った処、裏の倉庫から灯りが洩れているので不思議に思い、多恵姉さんを起しに行ったが見当らないので、多津子ちゃんを起し、二人でこわごわ戸の隙間から覗いて見ると、倉庫の土俵で誰かが相撲を取っている様子なので

「なんだ相撲か、泥棒かと思って驚いたよ」と云い乍ら中へ入った処、其の場の光景にあっと息をのんだのである。相撲は相撲でも知らない姉さん方二人が素裸になり、稽古禪を締めて土俵上で取組んで居り、多恵姉さんも禪一本の姿で村の大地主の能田さんの兄さんと立って見て居り、私達二人を見ると

「景ちゃん見てたの」

と云い

「多津子も見てたんでしょ」





と聞くので  
「今見たばかり」

と云う二人に  
「誰にも云ったらあかん、え？」

と再三念を押し、

「そう／＼いい事がある」

と云って、母屋から並巾の天竺木綿を二すじ取って来て、私と多津子ちゃんに裸になってこの褌を締めろと云う。いやがって逃げようとする私と多津子ちゃんを皆でつかまえ、素裸にして褌を締めさし、さあ二人で相撲を取ってごらんと、私と多津子ちゃんを取組まそうとするので、当時非力で小柄の為、相撲嫌いの私はいやだと云うと、能田兄さんがこわい顔をするので、能田兄さんがこわさに承知したのである。

いくら小柄だったとは云え商業学校一年生。しかも相手の多津子ちゃんは美しく、体も私より少し大きく、胸もプクとふくらんで居り、体を見るのが恥ずかしくて弱ったが、ままよとばかり取組んだが多津子さんは思ったより力が強く、簡単に押出されてしまうと「何だ男のくせに弱い子だなあ、もう一番」と能田兄さんの声。何くそとこんどは本気で取組んだが、如何にせん非力の為寄倒され、三回目にか寄倒して勝ったが四回目にも又もや負けたので、能田兄さんも「もうこれ位で良いだろう」

と云い、私に



「景三君、今日の事は誰にも言ったら承知せんど。もし知れたら君が女の方多津子ちゃんに負けた事を云うからな」

と念をおされ、私は

「誰にも云わへん」

と云ってそばで姉さん達の相撲を見ていたが、三人の姉さん達は見事な体で多恵姉さんの白い肌、それに対照的な小麦肌の人が房枝さんで、ポツテリと羽二重餅の様な体の人が雪代さんと分り、三人三様で仲々良い勝負であつたが、最後に誰が一番強い決める事になり、能田兄さんが小さな箱に入つた指輪を懸賞に出されたのである。

初めは多恵姉さんと房枝さんが当り、二人が相対されたが房枝さんは五尺三寸、十六貫位で筑波久子に似た顔立ちの仲々の美人で、対する多恵姉さんも三原葉子に似た顔、体付きであるが皮下脂肪に富んだ常腹で五尺三寸位。目方は房枝さんよりやや重い十六貫三百位と思われ、二人は型通りの作法をし仕切二回目、同時に立上つた二人はガツキと左四つに組み、一気に勝負せんものと房枝さんが上手投げを放てば、多恵姉さんも負けじと下手投げで応酬し、投げの打合いから寄合い押合いとなり二人の筋肉がビリ／＼とケイレンす

る。最後にじわ／＼と多恵姉さんが寄り勝ち、懸命に堪える房枝さんを「どうー」とばかりに寄倒せば「ずしん」と地響きを立て、東の溜りへ落ちたのである。

代つて次は雪代さんが土俵へ上り、多恵姉さんとの取組みである。私達が多恵姉さん頑張れと応援すれば、多恵姉さんに負けた房枝さんは雪代さん頑張つての声援である。雪代さんは身長は二人より少し低い五尺二寸五分位であるが、体はぼつてりと良く肥えており、感じは丁度春川ますみを思わせる様な体の、愛嬌のある顔立ちであつた。能田兄さんの軍配で立上つた二人は押合いから雪代さんが寄り勝ち、ぐい／＼と寄つて出た処を、多恵姉さんははずすと下り乍らすくい投げを打つと、雪代さん危うかつたが良く残し、土俵中央ガツプリ右四つに組めば多恵姉さんは不得手と見え、巻替えんとした瞬間、雪代さんずと寄り進み、土俵際真赤になり打つちやうとする多恵姉さんを、重量を利用して浴せ倒せば、二人は重ね餅の如く「ずしん」と音を立てて土俵下に落ちたのである。

負けた多恵姉さんの背中からお尻迄一面、溜りの土が付き安部川餅の様であつた。

再び房枝さんが登場し雪代さんと向いあつたが、やはり雪代さんの方が重量もあり強そうに見える。力の雪代さんに対し、技の房枝さんの対戦で、こんどは房枝さんも真剣な表

情である。二人は気合充分、一瞬早く立つた房枝さんがパン／＼と雪代さんの頬を張れば、思わぬ強烈な張り手にたじ／＼となり、二三步退つた雪代さん、すかさず双差しになり腹を合わせて一気に寄り立てる房枝さん、たまらず後退し乍ら雪代さんは咄嗟に右腕を房枝さんの首に巻き、瞬間腰をひねって首投げを放てば見事に決り、房枝さんの体が半回転したかと思つたと「ドシン」と横転し、その上、雪代さんの体が反動で房枝さんの腹の上へ落ちた為、「ウン」と低い声を出した房枝さん、一瞬気絶した、と思つたが、ゆっくり起上ると、よほど痛かつたのか。それとも能田兄さんの前で最後の真剣相撲に負けて口惜しかつたのか、目には涙が浮んで居り、子供心に非常にかわいそうに思つたものである。

其の後商業を出ると、京都の呉服問屋へ一年程見習に行つたが、或る日得意先に行つた処相憎同店の慰安会で主人始め店の人は全部出払つて、息子の博君と博君の姉さんである二十一才の貴代子さんと二十才の和子さんの三人が留守番をしていた。雑談から相撲の話になり、その二人のお嬢さんが大変な相撲狂で、誰もいないし相撲をしようと云つて当時の事として、黒いズロースにシャツ姿になり、兵子帯を纏にして、畳の上で博君も交え交互に取組まれたが仲々良い勝負で、特に二人のお嬢さんの白い脚が魅力的で、当時の私には



刺戟が強すぎ、目の置き処に困ったものだ。  
次にこれは相撲ではないが三年程前「わたしを抱いて」と云う洋画が有り、見られた人も多数居られる事と思うが、この映画は一人の若者をめぐる三角関係と娘同志の嫉妬、又海浜での大胆なラブ・シーンなどに娘同志の格闘が中心となっている。中でも十数分間、

二人の娘が泥だらけになり海浜での喧嘩の場面、殊に真物の鰻取りの網に互にからみ合い格闘する処は一切のトリック無しで、これは喧嘩場面撮影中、二人共新人女優の為、ほんとの喧嘩格闘になり、服が破けお尻も出して上になり下になりなりしてなぐり合い、泥だらけになって格闘している処を、ルイ・フェ

リックス監督は止めもしないでそのままフィルムに収めたと云う、実に得難い一場面で、見ても迫力があり、男性をして熱中させずには置かない、女斗美マニア必見の場面であつた。  
これらが私が女斗美マニアになる動機、又マニアになってから見たものである。

### 本誌最近号在庫一覧

新装10月特大号 (35年10月号) 定価百四十円

グラビヤ——緊縛艶姿五十態

口絵物語——暗黒集団(四馬孝)

新装11月特大号 (35年11月号) 定価百四十円

画集——被虐の白い花びら

グラビヤ——夢の緊縛アルバム

新装12月特大号 (35年12月号) 定価百四十円

写真——恍惚女体ハイライト

画集——吊責遊び方教室

新年増大号 (36年1月号) 定価百五十円

画集——新妻教育(こんな愛し方)

アルバム——表情とアツプセレクション。蛇倉の恐怖

新装二月増大号 (36年2月号) 定価百五十円

絵物語——瀬降りの男、グラビヤ

——美しいましめ、珠玉の餌物

新装三月増大号 (36年3月号) 定価百五十円

口絵写真、緊縛女体ポートレート特集、読者の声と通信、口絵

——美と幻想の構図

新装四月増大号 (36年4月号) 定価百五十円

グラビヤ、華やかなモニタージュ。口絵——異常光線の綾

新装五月増大号 (36年5月号) 定価百五十円

口絵——吊責めの種々相

写真——甘美と清潔の構成

新装六月増大号 (36年6月号) 定価百五十円

グラビヤ——清美と艶容の造形色刷口絵——美女力士の激突

新装七月増大号 (36年7月号) 定価百五十円

グラビヤ——醜化と婉曲美の探究(写真による散文詩)口絵——傑作責画特選、倒錯絵巻選

新装八月増大号 (36年8月号)

定価百五十円

グラビヤ——余韻の陰微と断面

緊縛フォト撮影の実際(亀甲縛りの一例)

新装九月増大号 (36年9月号) 定価百五十円

グラビヤ——アブ・シーン・アラカルト、緊縛フォト撮影の実際(高手小手縛りの一例)

新装一周年記念号 (36年10月号) 定価二百円

告白特集——偏執記録の断層、

グラビヤ——S Mモードの組写真集、緊縛フォト撮影の実際(ゴムの感触とフェチ好み)

新装十一月特大号 (36年11月号) 定価二百円

特集——私を責めて下さい(雑踏の中の孤独)グラビヤ——緊縛

美の祭典、アブ双曲線

新装十二月特大号 (36年12月号) 定価二百円

特集——読者通信の女性を縛る

特集——(ひろ子緊縛記)緊縛フォト撮影の実際(前手縛りと縄抜けの一例)

新年特大号 (37年1月号) 定価二百円

特集——カバー・ガールを縛る

グラビヤ——美しき緊縛

緊縛フォト撮影の実際(逆エビ縛りの一例)

二月特大号 (37年2月号) 定価二百円

グラビヤ——責められる女。組写真II女性の血紅切腹。

懸賞百枚読切小説「契約書」

三月特大号 (37年3月号) 定価二百円

グラビヤ——「暗黒の麗人」

「嵌口に憑かれて」人間馬の調教「女性の切腹」

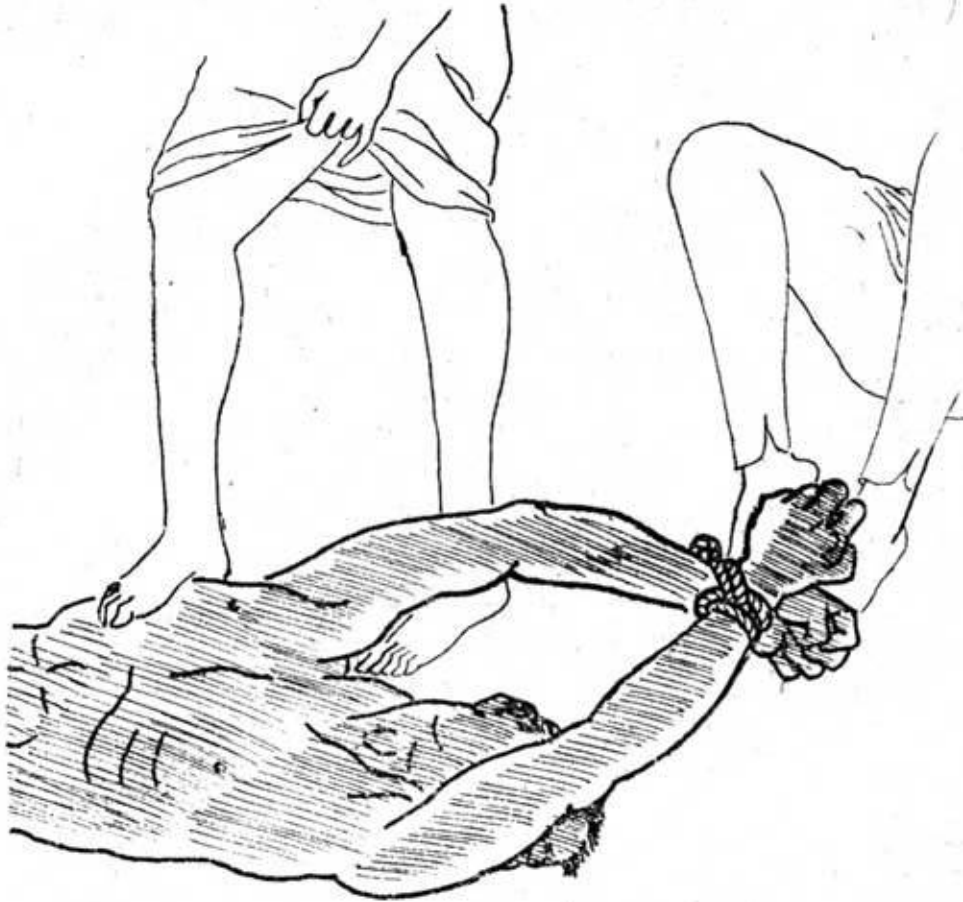
緊縛フォト撮影の実際(水責めと煙草責めのテーマ)



浣腸責めのイメージ

## 華々しき報復

古沢 五一



「ウーム、ムムム」と、真中の一人が体を動かした。ウッスラと眼を見開き、首を左右へゆり動かし始めると、「ソレッ」とばかりに待ち受けていた女達がかけ寄る。

男はイキナリ鼻をつまみ上げられて息苦しさに開いた口の中に、何か白い布の丸めたものを押し込まれる。ハッと、女達の意図に気付いてもがこうとするが、手首と足首を大の字に張って縛られてしまっているから、いたずらに胸をゆり動かすだけの結果になる。いつの間にか、アンダーシャツとパン

ツだけの姿にされてしまっている。

「畜生！ はかりやがったナ、このドスベタめらッ！」

真中の男へ、さるぐつわをかますのに夢中になっていた女達は、この叫び声にハッとなって振り向く。

「あわてるんじゃないよ。どうしようたつてできるもんじゃないわ」

女達の中の姐御株らしい女が、さっと正気ずいた男の傍にかけ寄って、なおもワメこうとする口に、素早く丸めた布を押しこんだ。ウイクリー・パンティのピンのヤツだ。男はそれを、頭をめちや





くちやに振って避けようとするが、女の手捌きの方が早かった。吐き出そうとする男の頭を、かかえこむようにして、女の一人がさし出したベルトで、うむをいわず口の中の物を押えてしっかりと巻きつける。

男の顔がみにくく歪んで、眼にくやしさを湛えて女を睨んでいるが、やはり部屋に張り渡した綱でしっかり四肢を張り伸ばされているので、僅かにもがく以外にはどうにもならないのだ。

最後に目ざめた三人目の男は、ウツと叫ぶ

間もなく処置されてしまった。

三人の男の自由ばかりか声まで奪ってしまった女達は、白眼をむいている捕虜を見下しながら、どのようにして復讐してやるかの相談を始めた。いろんな責め方について、これまでも種々の案を持ち寄ったこともあるのだが現実には男達が捕らなくては決定版は出来なかった為らしい。

女達は総勢十四人。首領株のミッチイを除いては、皆、ペチャクチャしゃべるものだから騒々しいことこの上ない。

ミッチイは、その喧しい中であって艶笑とした微笑を浮べて腕を組んでいた。十二才の年令に過ぎた落着きと妖艶さを備えて、チャンネエの首領らしく男装して、キビビビした態度にも貫禄がうかがえる。

事の起りは、グレン隊の三人連れが、ミッチイの仲間の一人の女に、それとは知らずにチョッカイを出したことに始まる。

その娘は、ミシュレーヌ・ドモンジョに似たプチイであったが、気を失ったまま、公園の中に転っていたのを通行人に介抱されて、やっとのことで巣に帰り、泣く泣く、チャン

ネエのミッチイに訴えたのである。

その娘、スガちゃんが、首すじから胸にかけてアザだらけにされ、眼の廻りを真黒に充血させているのを見ては、ミッチイとしても報復を決心せざるを得ないのであった。

しかし、相手はこのK町でも定評のある暴れん坊のグレン隊隼組の者である。迂かつには手が出ない。だが、幸いなことにミッチイは、隼組の組長とは、割合に話がうまく通じる仲であったので、素直にこのことを打あけて、三人を懲戒させてくれるように頼みこんだ。組長はニヤリとして「乾分の体に傷をつけない」ことを条件に、考えたより簡単に三人の引渡しを承知してくれた。

後で聞いたところに依ると、その後で組長は同席していた幹部の一人に「傷がつかねえように女達から責められるなんて、やつらはなんと間がいいんだらう。俺が代りてえぐれえのもんだ」と話していたそうである。

問題の三人は、何も知らされずに女達の巣へ組長の使いとしてやって来た。そして多くの女達に囲まれて、女護ガ島へでも来たつもりで鼻の下をのばしている内に、一服盛られて眠り込んでしまったという訳であった。



男達は、だらしく床に張り吊られたまま、呻き声をすらのみ込みながら冷汗をかいていた。だが、取り囲む多くの女たちがかもし出す艶めかしい雰囲気、全く自由を奪われて、理由は判らぬながら何をされるか知れないという危惧や不安と共に、何か甘い、楽しさに似た奇妙な気持ちにおちいらせていたのだ。それでもやはり、女達の低く囁き合う声と、ただならぬその気配とは異常に部屋

の空気を緊張させていた。

と、真中の男がハッとしたように首を廻した。無理に起した視線がスガちゃんの顔を捉えると、急にガククリとなって眼を閉じた。他の二人も前後して、今夜の謀計の理由を悟ったようだった。

三人が眼だけで何事か語り合ったらしい。自分達の置かれている今の立場と、覚悟しなければならぬものとが、電波のように通じ合った悲しげな眼の色であった。

「それがいいわ。ね、おスガちゃん、それにしましうよ」

「そう。やっちゃん、スガちゃんよう」

やっと相談はまとまったらしい。スガちゃんが決心したように唇を噛むと、キッと男達を睨み据えた。その眼は憎悪に満ち、報復の

念に燃えて輝いていた。

男たちは、不安の色を覆い隠せないながらも、「どうとでもしろッ、たかが女のすることじゃねえか」という、たかをくくったどうまんさを見せてふてくさっている。

「よしッ、やろうよ」

スガちゃんの一言を待ちかねたように、サッと女の一人が、真中の男に襲いかかった。何十本とも知れぬ小さな生物。桜色、あるいは真赤に染められ、それぞれが長く、先端を鋭く砥ぎすましたようにとがらせた爪が、憎悪といったぶりをこめて乱舞する下で、強いるぐつわに押し潰された呻き声が湧き、唸り、断続し、そしてやがて静かになった。

稲の穂にむらがるイナゴの群の如く、女達の鋭い爪先が次の獲物に移った後には、無数のひっかき傷につつまれて、文字通り血と脂汗の塊りと化した男が、ボロ布のようにグッタリとのけぞっていた。

やがて女達の攻撃が一段落した。

三個の物体は、死んだもののように身動きもせずに床に貼りついていていた。

「フン、だらしがないねえ。サ、次よ」

ミッチイの声で、女達の群が再び真中の男をとり囲む。

サルグツワを外すされた男は、ぜいぜい喉をならしながら、胸を大きくあえがせて空気を貪り吸った。

「少し吊り上げた方が面白いよ」

男は四方から張りつられていた綱の代りに天井の滑車からの綱に引き上げられだした。

グッタリしていたのが、急にすこし暴れだしたが、何の役にもたたず、しゃちほこ立ちに吊られてあえいでいる。

「グリセリンはストレートでいこうよ」

と女の一人が叫ぶ。

「でも汚れるワネ、床が」

別の声が挙る。

「そうそう、それを忘れてたわ。風呂場へ行こうよ」

ミッチイの命令と共に、男は荷物のように曳き摺られて運び出された。

後には、依然として身動きすら出来ぬ二人だけが残されていた。嚴重な縄目がなくとも男達は、関節を外すされたようにガタガタになっている体を動かすことはなかったろう。

無気味な沈黙がしばらく続いた。

と、ワーンとはやし立てる女達の声が出て二人の男をピクッとさせた。

女達の声がしずまると、激しい男の呻きが



地を這って来た。何かを必死にこらえているらしい悲痛な呻き声だった。それはずいぶん永く続いた。その隙間を縫うように、女達の喚声が、さもおかしそうにまつわりついて流れて来た。

二人の男は、力のなえた身を硬直させ、全神経を両耳に集めて、仲間の受苦の態を窺おうとしているらしかった。

水道の水が、激しく何かに叩きつかる音が出て、やがて引きずられて連れ戻された男は濡れ鼠になっていた。よほどの苦しみを味あわされたのだろう、どう扱われても泥人形のように眼も開けなかった。失神しているのだった。

女の足が、そんな男を踏みにじり、蹴返してうつぶせさせ、両手を背に取って高々と縛り上げた。

女達にとり囲まれた次の獲物は、青ざめた顔を振って赦しを乞うていた。力なくのびていた五体がブルブル震え始めた。

風呂場の冷たいタイル床に引据えられた時には、電気にでもかかったようにとび上って女達にギュウギュウ押えつけられた。

「今度はエネマを使ってみようよ」

女の一人の提案にミッチイが同意すると、

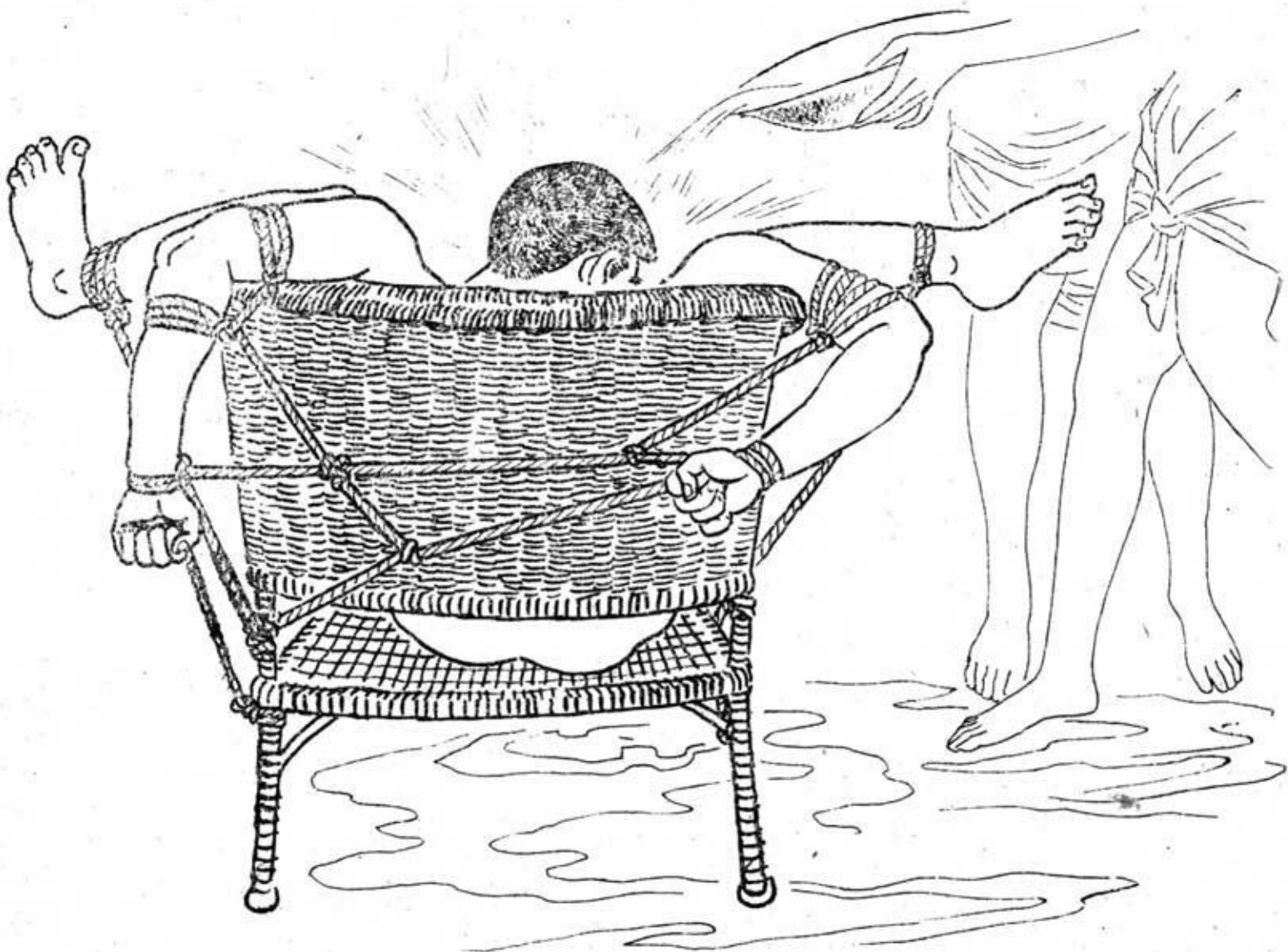
他の一人が前掛をして洗面器を手に進み出した。男は忽ちのうちに四つ這いにされ、逆にして置かれた机の脚にしっかりと四肢を固定されてしまった。

「いったい何をされるのか」男は不安におののきながらも、眼をあけて見ることも出来ない程の切迫感におびやかされていた。

そのとたん、グイッと激しい苦痛が襲って彼の不自由な体が奇妙な身悶えをみせた。

どっと挙がる女達の笑い声。

前掛をした女が、容赦なくポンプを操作し始めるにつれ、男は絶え間のない苦しみの表現を、その全身の身悶えでみせながら、女達





の残忍さを十二分に思い知らねばならなかった。脇の下や、膝の裏から冷汗がしぼるように湧き出る。苦しい!

「ちよっと泣声を聞いてみようか」

さるぐつわを外されると、グッショリと唾液を吸ったピンク色の布が吐き出された。

「く、くるしい。許してくれ、ゆ、ゆる……」

女達はそんな男のさまを、興味深げに見守っている。

「ハ、ハラが、や、やぶれる。あッ、ああ」

男の悲痛な呻きに、尚一層、はりあいが出たといわんばかりに、エネマシリンジの操作はピッチを上げる。

だがついに、限界が来たらしい。

男はガクンと首を落した。生きている人間とは思えぬほどに生色というものは失なわれていた。奇妙にふくれ上った腹は、驚異の眼を惹くに充分の価値があった。

「サア、皆、退避しなきゃ、ヒッカケられるよ。いいかい?」

外へ出た女達の顔が、窓に鈴成りになるのを確めてから、前掛けの女が、エネマシリンジを持ってとび退いた。

それから一刻、女達の口から喚声と、嬌声と、嘲笑の声が湧き上った。

三番目の男の場合は最も凄惨であった。

この最後の男は、放置が長時間に亘ったためか、爪の攻撃を受けたときに神経がまひしてしまったためか、二番目の男が連れ戻される寸前に、不覚の地図をその床に描いてしまったのだった。

せめて女達の眼前でなかったことだけが、彼のヤリキレない気持を救っていた。だがしかし、それだけ余計に、他の二人は遭わずに済んだ仕置が増えた結果になった。

女達はイキリ立った。

一人が突然、とび上るようにして彼の頭を蹴りつけたのが口火になって、二十数本の足が、彼に集注して乱舞し始めた。

蹴る、踏む、にじる。

彼は、杵で搗かれる餅のように、グンニャリとして攻撃の的になっていくより他はなかった。

肉が砕け、骨がバラバラになった想いの男の首に、グルグル巻きに縄がまといついた。

「掃除をおし。綺麗にするのよ」

彼が着て来た、ワイシャツが投げてよこされた。男はフラフラしながら立上る。

「早くするんだよ!」

グイとひかれた首縄に、よろけてのけぞる

ところへ、またしても数本の足が飛ぶ。

こうめちやくちやにやられてはたまらないだろう。男は這いつくばって粗相の跡始末をししたが、眼がかすんででもいるらしく、見当違いを拭いては、幾度も足蹴の洗礼を受け、首縄を引かれて不さまにひっくり返った。

漸やくにして拭い終えはしたものの、それはあくまでも彼自身の撒いた種による余興であり、責めの前座に過ぎず、女達の予定した浴室での実験台は依然として彼を待ちかまえていたのである。

浴室一杯に女臭のたちこめる中で、彼は簾のスリーピング・チェアの背に両手をギシギシ縛りつけられた。上膊から指先に至るまで、痛ましく細引が喰いこんでいたが、何故か胴にかかる紐はなかった。次いで両足を手すりにつけ、同じく細引が噛みこんだ。

手足を締めつけられる痛さに、男が固定されていけない胴や尻を振って悶えるのを見て、女達の嘲笑が湧き上る。

女の一人が進み出て、バケツに一杯汲んだ水をぶっかけたのを皮切りに、残虐な責めが始まった。

彼の受けた苦しみは、内臓全体をカキ廻わされ、しぼり抜かれるような苦しみだった。



強力な浣腸薬の効めは彼をのたうたせたが女達の考案したものは、その流出を完全に阻止して、彼をいつまでも激しい苦しみに耐えざるを得ない状態に置いた。

女達は、彼の奇妙な苦しみの表現に手を打って興じていた。

「もっと面白くなるわ。これ硫酸マグネシアよ、とっても凄く効く下剤なんだよ」

一人の女が仲間に説明して、男の頭を抱えこむように薬瓶を傾ける。

ほんのしばらくの後、男の口から物凄い叫喚があがり出した。あわてて女がその口に布を詰めこんだ。椅子が今にもこわれそうにギシギシと鳴って動揺する。

男の身にとっては悲愴極まる尻振りダンスが、やがてガクガクするケイレンに代り、悲鳴を封じられた代りに、しばらく上げる腹腔内の高鳴りが明瞭に聞きとれた。

「大丈夫かしら？」

男の苦しみの余りに激しい様子に、だれかが心配そうに呟く。

「大丈夫よ。こんなことぐらいでどうってことはないわよ」

誰かの答える声が返る。

「でも、もう大分テンポが遅くなったじゃない

い、ダンスのさ」

「そうね。よし、今日はこれ位にしとこうよ」

ミッチイの声だった。

処理役以外の女達が、ゾロゾロと浴室から出て行く、ホッとしたような溜息が皆の口々をついて出た。

一刻の後、それぞれ高手小手に縛られてマグロのように転がされ、死んだもののようになっていた三人の男は、再び浣腸器の洗礼を受けた。だがそれは、苦しみのそれではなくて、体力回復のための滋養浣腸だった。

「フン、ざまはないね。ちったあ骨身に泌みたかい？」

ミッチイが足の爪先で男の頭をこずきながらいつていると、一人の女が、ミッチイの耳に何ごとか囁いた。

「フフフ、いいだろう。おやりよ」

承諾を得た女は嬌声を挙げて四五人に合図して部屋を出ていったが、しばらくして、それぞれ両手に自分達の古着を抱えて帰って来た。

「おまえ達にはモッタイないけど。おとなしくしないとどうなるかわかってるわね」

女達はそういいながら男の一人を引き起す。

男は縄をほどかれても、抵抗する気力も体力もないらしかった。

女はマネキン人形でも扱うように、キヤァキヤァいいながら持って来た古着を着せにかかった。

一人の女はブラジャーをつけさすといい、他の女はバンドを穿かそうと提案する。

嬌声と揶揄の裡に珍妙な捕虐の女装が始まったのだ。

興がのるにつれてウェストニッパーまで持ち出し、ストッキングを穿かせ、踵の高いハイヒールで歩き廻される男達の姿は哀れにもこっけいな見世物だった。

それでも、爆笑と嬌声の渦に囲まれた男達は、先程の恐怖と苦痛の形相に代って、何か、このたわむれを楽しんでいるような面持だった。そして、面白半分にはせられる化粧にも、おとなしく白粉や紅を塗られていた。

やがて、この珍妙な美女三人は、その扮装のまま再びギッチリと高手小手に縛り上げられて、転がされた。カーテンにさえぎられた窓の向うには音もなく夜が訪れていた。

(おわり)





# 歪んだ少年期

## 森太一

年が、誰でも禪を日常生活で着用しているものと決めているいい振りであった。住職は、自分の少年時代からの体験でこうだったのであらうか。私は、そんな事を、一時に頭の中で想いめぐらしていた。

私は、その時、禪はしていなかった。残念だった。中学一、

寺というにして貧弱過ぎるK君の家の表に

は、『〇〇山××宗』と『温湿布療法』とい

う二つの看板が掲げられてあった。K君の病氣見舞に行った私は、玄関にすぐ続いている本堂に通されて茶菓を接待された。本堂といっても、平家の広間に仏壇だけは立派であったが、これが寺かと思われる粗末なものでしかなかった。

K君の父である住職は私にいろいろな事を訊いた。最初は学校生活の話であったが、次第に説教めいて来た。私はいささか退屈していたし、足がしびれて来た。しかし膝ひとつ崩さない住職の前では、あぐらもかけない。内気な私は、なかなか、「もう帰ります。」といい出せなかった。住職は私の目を射るように見詰めるので、ともすれば私は目を逸らすようになった。住職はそんな私の気持を察し

てくれない。

「森君は身体は達者ですか。」

「はあ、別に悪い所はありません。」

「目が潤んでいます。疲れ目ですね。中学三年にもなると勉強で夜更しをするんでしょう。どうです、治療して上げましょうか。私は『温湿布療法』もやっているのです。疲れなほど直ぐ取れますよ。」

私は突然のことで返事に困った。しかし、

「うちの息子も時々湿布をしてやるのです。」という言葉に心を決めた。

本堂の片隅の狭い治療室に案内されると、どうでもなれと覚悟を決めていた。板張り床に、木製のベッドがひとつあるだけ。

「服を脱いで。禪一丁になって。」

私は「禪一丁になれ」という言葉に動揺した。住職はさり気なくいった。私のような少

二年の頃から、あんなに禪に憧れ、こっそり種々様々な禪を作ったり集めたりして着用して楽しんでいたのに。もし、心掛けが良く、越中禪であれ、六尺禪であれ、もっこ禪でも水泳禪でも、また、私の手製である帆前掛の禪でもしていたら、きっと健気を認められたのであらうに。私は、そんな他人が知れば変人と思われるであらう事が、深い関心事だったのである。

私は、裸になってベッドの前に直立した。何かいわれる事を待った。体軀堂々とは行かない私は少しみじめであった。

「均斉のとれたいい体ですね。」

「細いです。」

「いやいや、そんな事ありませんよ。家の息子に比べると、骨組みがしっかりしている



な。」

照れ臭かった。私は、仰向けに寝た。住職は、私が禪でなく猿又であったのを、どう思っているだろう。期待外れだと、がっかりしているだろうか。そうして、毛布を掛けられて待たされた。窓際の台の上では、湯沸かしが湯気を立てていた。ガーゼや脱脂綿が拡げられていた。

私は或る期待を持っていたのである。このようにして、全く思いがけないで裸で治療を受けるなどは、望外の喜びとして私の脳裏に強く印象づけられる事であつたろう。しかし、惜しむらくは其処がK君の家であり、住職が彼の父である事だった。これがもし、私の家から遠く離れた土地であり、住職が全く見知らぬ治療師でもあれば、たとえ私が如何に突飛な様を見せようと、醜態を演じようとも耐えられる場合だったであろう。

私はベッドの上では、なるだけ邪念を払うよう努力した。「禪一丁になれ」といった住職の心と、私の邪念とは、全く関係がないかも知れないが、ひよっとすると……という気持ちが無かった訳でもなかった。私の心は、いつでも相反する心が働く。表面は貴公子然と保ちながらも、心の中では、無残な目に会わ

される事を念願しているのだ。

やがて準備が整えられたらしい。住職は私の頭の上に位置した。そして頭部と顔面を指圧し始めた。私は老人めいた施術に照れ臭かったが、入念な急所圧迫に頭の疲れがすうっと消え、顔面の硬わ張りが取れ、快よかった。散髪屋で鼻をつままれたりして顔を剃られている時より刺戟があつた。首筋にもしこりがあつた。押さえられると痛かつたが我慢していた。毛布が跳ねのけられて胸が出た。そして其処にも指圧が行われた。腕の時は、吹き出しそうなこそばゆさであつた。毛布は腹から下を包んだ恰好で、湿布が首から行われた。厚い脱脂綿が重く首に巻かれて、油紙で包まれた。

暖かい湿布の何と心地良い事であつたろうか。これで全身が湿布されたら、どんなに素晴らしいか知れない。胸を大きな脱脂綿で包まれると、まるで胸部疾患の治療を受けているような気持であつた。快い重圧感と暖感、初めて体験出来た温湿布療法に私はすっかり陶醉していた。私のように病気がなく、唯の疲労であれば、一度に治ってしまう信頼を覚え、活力が溢れて行くような気がした。湿布は唯の温湯ではなく、薬品が混入されてあつ

たのか、鼻を刺戟した。両腕は、指だけを残して、大怪我をした人間のように、ぐるぐる巻きにされた。

「猿又の紐を緩めて。」

私は、今にもあらわな恰好を呈しないかと怖れたが、躊躇すると怪しまれると考へて「はい。」

と返事をし紐を解いた。腰と、少しずらした臀に湿布が敷かれて腹巻きにされた。これは圧巻であつた。――禪をしておれば良かったのに――とつくづく思った。水泳用の三角褌でも六尺褌でも緊めていたら、どんなにか落ちて着いて治療を受けられた事であろう。

湿布は、両脚をもすっぽりと包んだ。かくして全身が湿布されると入浴しているようである。そして、腹部にも指圧して貰った。だが、私は懸命の緊張を続ける斗いがあつたのだ。しかし、相手は住職であり立派な治療師でもある。――俺はどうかしている。――身体各部の指圧が行われている間に、冷めた湿布は取り換えられた。

私は永い指圧を受けた。時には圧迫される苦痛があり、揉まれるこそばゆさがあつた。経験の少ない少年である私が、快さより苦痛であつたのも無理からぬ事であろう。かくし



て治療は終わった。私は安借して服を着た。  
「週に一回位するといいいね。」

といわれてK君の家を辞した私は、夕暮れ  
迫まる外気に、まだ暖もりのある体が、蕩然



となった。何と素晴らしいひと時であった事  
か。第一回の温湿布療法で完全にその虜にな  
った私は、次の機会を見つける事が至難であ  
った。「週に一回位」といわれたが、私の頭の  
中は、異常な展開を想像してからであった。  
六尺禪をがっしり締めて行けばいいんだ。  
と、取るべき態度を決定すると良かった。し  
かし私は、もっと圧倒的な場面に自分を演じ  
ようと思うから厄介だった。中学生、K君の  
家。それが大きな抵抗だった。しかし、その  
抵抗を乗り越えて突進するのが私の運命。過  
去、一度も果たし得なかったが、ここに大な  
る魅力を感じる。

中学三年の春、真剣に自殺を考えたこの私  
に、生きる喜びを与えたものがこれなのだ。  
小学生時分より抜け出せず、親兄弟にも打ち  
明けられないこの悩みを解決したいものと広  
告で見た医療相談に手紙を出したものであっ  
た。自分を比類なき早熟少年に思われる屈辱  
をしのんで出した手紙の返事が来た。——是  
非一度来院されたい。よく話して上げます。  
——という文であった。私は、実名と年令を  
知られて、行こうか行くまいか迷った。私は  
日曜日でも相談を受けるといい好都合に心が  
動いた。しかし、交通費が足りなかった。そ



れで紹介された相談所へは行けなかった。が、理由は、「君のような中学生は、悪習を止め、ひたすら勉強するのです」と説教されるのがおちであろうと思う気持ちが強かった。

自分の異常な体を親切に診断してくれる事を念願する気持ちがよいよ強烈になり、いつか中学生という年少さを省みず、診察を受けに行った医院で私は、無残な衝げきに、打ちのめされてしまった。

……森太一。年令十七才。酒屋の小店員。悪習から脱けられません。一般障害について診察して下さい。本人は、おしですが、性質温厚……云々……

という手紙を読んだ医師は、厚司と帆前掛姿の酒屋の小僧に化けた私を見下ろし、あきれた顔をした。私が、泌尿料と札の掛けてある病室に入って行った時、受付にいた看護婦が、私に筆談をした。

「全く無茶だよ。」

と軽蔑した医師の言葉、私は言語に絶する屈辱を覚えたものであった。

K君の家へ行ってから二週程経って、私は図が当たって、再び温湿布療法をして貰えるチャンスが来た。払うべき治療代を用意していた。住職は私を快よく迎えてくれた。私と

て、ちゃんとした患者であったのだ。私は治療室でどんどん裸になった。六尺禪一本。六尺禪は私にある勇猛心を呼び起こさせてくれる効果があった。K君は留守だった。

——どうです。K君のお父さん。僕の六尺禪よく似合いますか。僕は、この前、都合で猿又をはいていましたが、本当は、いつもこの六尺禪をがっしりと締めているのです。どうかゆっくり僕の禪姿を見て下さい。——

と心の内で誇った。私は、ベッドに寝た。住職は、別に私の禪姿に興味を持っでは見なかった。私は期待外れでがっかりした。やがて治療が始められた。が、二回目の何と感激のない事よ。私はこの分では期待出来ないと失望した。

禪のおかげで、私は安心出来た。腰部も、禪だけでは、その儘、湿布しても充分効果があると思っていた。ところが、住職は、禪を緩めるようといった。私は、すかさず返事をして禪を緩めた。住職は、私のような少年に対する態度は乱暴なのであるか。それとも私の意中を推察しての処置だったのだろうか。臀の下に湿布が当てがわれると、あっという間もなく、私は赤ん坊のオムツそっくりに湿布されていたのであった。顔がかったし

た。住職は、脚に湿布を巻いていた。『完全なる全身療法』。劇しい羞恥の中に、歓喜力行の姿だった。住職に何と見下ろされているであろうこの姿、顔を除いて全身余す所なく脱脂綿とガーゼに湿布され油紙で覆われた姿を。私は、哀れにも冷静さを失った。しかし、私の意中をちゃんと見透して治療したであろう住職に、報いる態度だと自負した。

私はすべてを住職に委せた。K君にも治療するというからには、同じ年輩の体の状態も知り尽くしているから、必ずや私の心を辱かしめないで、慎重に処置してくれるものと信じ込んでいた。さぞや奇態であろう中学生のオムツ姿。これが温湿布療法の最高良法と思っ

た。——住職は、全身療法の場合は、いつもこ

うするのであるか。それとも、僕のような中学生だけにあはするのであるか。——その夜、寝床に入っても、いつ迄もその暖かみと緊縛感が思い出されて眠れなかった。とんでもない恰好をさらけ出した私は、さすがそれ以後治療を受ける勇氣はなかった。やましい心の秘密を表現しなければ、何度治療を受けたとしても何でもない事だったのに。

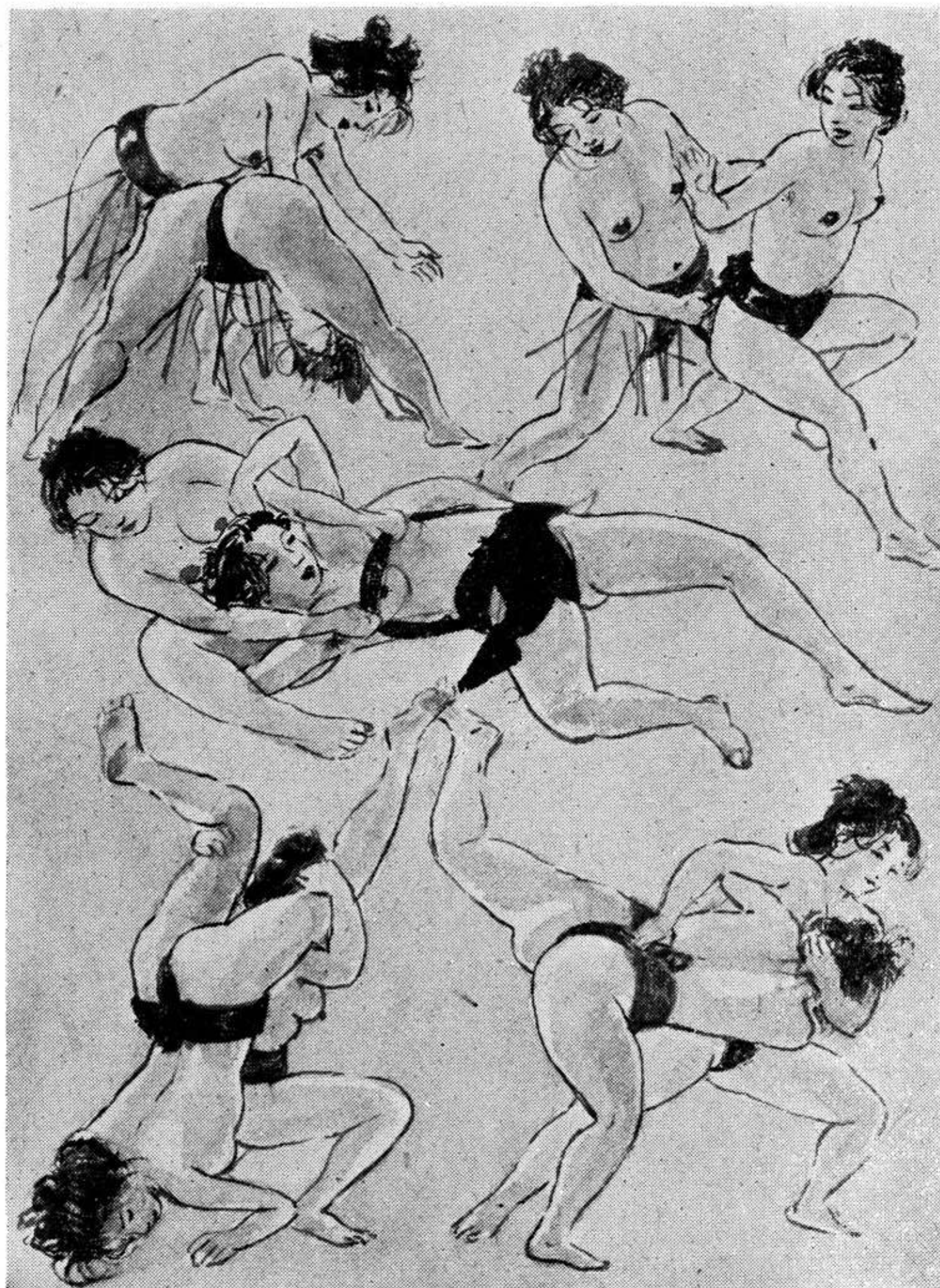
——僕は、何と意気地がないんだろう。——



女斗美絵巻  
シリーズ No. 10

激 斗

提 供  
雪 崎 京 人







人生は孤独だといわれる。事実華やかなパーティや忘年会などの宴会がはてて、深夜ひそかに自室に帰ったときなど、一入その感を深くしないではいられない。

人達の集いが賑やかであればあるだけ、そのあとの侘びしさは深いということもいえる。たしか、辻村隆氏のフォト・ストーリーの中に「雑踏の中の孤独」という文句があったような気がするが、私達のグループは、特異な性向を有するだけに、一入その感が深いのではないかと想像される。

しかし、ある反面、何千人、幾万人に取り囲れていても、孤独を感じるときもあれば、たった一人の理解者と相対しているだけで百万人の味方を得たような気持を抱くときもある。

本誌がすでに十幾年に亘って、

私達を孤独の淋しさから救いあげ人生の喜びを味わせてくれた功績は大きいと思う。砂糖を嘗めたことのない者には、砂糖の甘さはわからない。しかし、私達は、本誌の出現によって、すでに砂糖の甘さを知らされてしまった。

私達を孤独の泥沼から拾いあげ甘美な春の夢園へ案内してくれた本誌のレーゾン・デトールは、丁度、人間に於ける水とパンのように切っても切れぬ間柄となつてしまった。もう、こうなつたからには、本誌の内容や表現の巧拙をとにかく言う時代は過ぎ去つたといつてよい。

水やパンが人間の生存に欠くべからざるものであるように、本誌が私達にとつても欠くべからざるものであるからだ。私は願う。本誌が天地の水と共に、永久に消え去らないことを――。

とにかく、本誌が大磐石の基盤のもとに永続されることを衷心から願つてやまない。現在では、職域団体や、同業者関係は勿論のこと、宗教団体に至るまで、自分らの代表を選挙によつて、国会議員に送り込んで自己の代弁者とし更に発言権を強めようと企てている。

私達は孤独であり、そして永遠に孤独たるべき運命に置かれてゐる。僅かに本誌の出現によつて発言の場所を与えられたのであるがしかし、依然として同志的結合の気運を見出すことはできない。そして、その責めを孤独な一人一人の個人に負わすことの出来ないところに、永遠に孤独たるべき運命が私達の頭上にかかつてゐるといつてよいだろう。

私は青年期の一時代を吉田弦二

郎の著書を愛読することによつてセンチメンタル的な人生の孤独観を味つたことがある。しかし、その後、幾多の人生の辛酸を嘗め、且つ苛烈な戦争の中で、戦士員の一人としての経験もへて、今や不惑の年を迎えるに当り、愈々孤独の感を深くするものである。

そして、その孤独感を慰めてくれるひとときは、本誌を繙くことによつて、そこに展開される空想の花園が、次から次へと私の眼前を往来するときである。

私は最近、本誌の仲介によつて一人の友を得た。如何なることも隠しだてせず胸襟をひらいて語りあえるこの友は、私の孤独を慰めるよき相手となつてくれる。私は彼と月に一、二度の会合を持つことにしている。辻村隆氏の「奇譚三十九夜」の如き華麗さはないのは勿論だが、この二人きりのささやかな会合は、私達二人にとってこよなきリクリエーションとして明日の活躍へのよき原動力となつてゐる。

プライベートな生活上の知己として、私は彼との交際をいつまでも続けるだろうし、本誌と共に私の孤独をいやす、よき伴侶となつてくれると思う。

## 孤独の人生観

永田伊佐夫



## 切腹フォト評判記

南方純



最近、本誌上には優秀な切腹写真の発表があり、代理部扱いにはニューフェースの登場があるといった按配で、マニアにとっては何とも嬉しい限りである。

この機会に一愛好家として「切腹フォト」はどうあるべきかについて私見を述べてみたい。趣味は当然人によって違うのであるからこれは単に私なりの考えに過ぎない。「切腹フォト」のあるべき姿は中康弘通氏の所謂「悲愴美」の表現にある。出来るだけ写実的で

あると共に、現実のものではなく、夢幻的な趣きのあるのが望ましい。ややくだくだしくなるが、「切腹フォト」の良否を判断する手段として十項目の判定基準を考えてみた。

(一)連続性。「切腹フォト」には一枚だけのものと数枚組んだものがある。組写真が一般に興味を深い。それも単なる組写真ではなく連続した動作を表すものがよい。いろいろ異なったポーズをとった組写真もあるが、大体切腹は一人が

一生に一度やるのが精一杯の筈だから、いろいろあることは何か変な感じがする。一度の切腹を最初から最後まで、その段階ごとの感情をこめて、一つの流れとして作製された連続写真が最高である。なお、既にこと切れて倒れている姿まで写し出されたら一段と迫力のあるものになると思われるが、お目にかかったことがない。

(二)服装。演出全体に通ずることであるが時代をいつに設定するかというところが問題である。趣味としては江戸時代にした。パンティをつけてたまの切腹などはいたゞきかねる。端然と白衣をつけ双肌を脱いだ形がよいと思うが余程帯を下げなければ下腹部が露出されないであろう。長襦袢で前の乱れを両足でおさえるなどあぶな画じみて面白くない。裸で禪美という手もある。しかし禪をはっきり出すのは品が落ちると思う。

(三)背景。出来るだけ時代がかった背景がよいが中々思うようなセッティングを作るわけにはいかないであろうから、家具等を写しこまないで屏風位にしておいた方がよい。背景の単純なことが望ましい。

(四)小道具。短刀、場合によっては脇差でもよいが、本物では危いから演劇用のものがよい。刃の部分に紙か布を巻くこと。つきささった擬態をするために刃先を取替えられるよう仕掛けがしてあればなおよい。鎌腹は余り感心しない。

(五)血紅。迫真の感興を呼びおこすには血紅の使用が不可欠。カラーでなければ必ずしも紅でなくてよいが、この塗り方は大いに工夫がいる。鮮血りんりとして実物を見るが如きものが望ましい。

(六)髪。時代に関係してくるが、短髪より長髪、洋髪より日本髪又は洗い髪がよい。

(七)助演。介錯人をつけると一段と効果が上る。「腰元」はその意味で極めて優秀であるが、刀の振り上げ方がデタラメだ。大上段に振り上げなければ、首など切れるものではない。顔の前に白刃をつきつけたポーズもよくない。責めとか、なぶり殺しなどは違うのだから、こういうことはないはずである。実際介錯人は刀を抜くにも切腹人に気附かれないう静かに行うと聞いている。

(八)肉体的条件。フォトは美的でなくてはならない。演技者は美ばうであって均整のとれた体軀であってほしいし、特に清潔な印象を与える人が望ましい。





## 廣作「自刃画」

原 桐 清

最近藤山さんの作品に接しませんが、軍服姿の切腹に興味のある私が、流れい子先生の絵をいろいろ切り継ぎして、敷写して出来たのがこの絵です。我ながらよく出来たと思いますのでお送りします。

(九)動作。合理的なポーズでなくてはならない。それには古例などの研究も必要ではないか。

(十)表情。最も困難性のあるのはこの表情である。悲愴美の世界は実にこの表情の如何によって、左右されるものである。裸になって腹に刀を当てさえすれば切腹フオートになるといった無神経なことではこまる。生死の境目に立った悲痛な表情、身を焦す苦痛に耐える表情、悦虐の境地に陶醉する表情等最高の演技力が要求される。充分その趣味を解する演技者が好適であるが、さればといって、マニアが必ずしもよい表現が出来るとは限らない。

今手許には代理部分譲の六組の

フオートがある。そこで私案の判定基準によって、感想を書いて見よう。六組の内、時代を江戸にとつたのは(三)の腰元成敗のみで、助演者、即ち介錯人の出ているのもこれだけである。

(一)略号「えつ」七枚組。モデル名不明。背景に荒布を張ってある。間に合せのだが感覚はよい。全裸ひざにハンカチをひろげている。血紅使用。短刀に布を巻いている。但し刃先の見えるのはつき立てる前の一枚だけで、その他は布を巻いた棒を擬装している。臍上一文字切り、更に下腹に一文字、ついで鳩尾から縦に丁度半形に切っている悲壮、苦惱、法悦と表情に変化あり佳品。ただ短刀の握り方が

おかしいのがキズ。

(二)略号「によ」五枚組。モデル絹川嬢。揮使用。裸の上に丹前をひっかけ、切腹につれて全裸になる段取り。血紅使用。但し流れ出る感じが出していない。足をなげ出したり、寝そべったり連続性のない不可解なポーズ。背景は旅館の床の間といったところ。表情に緊迫感なし。

(三)略号「こし」六枚組。村井嬢。背景床の間、屏風をめぐらしている。髪はかつらで島田。ほつれをかなり見せている。長襦袢の前をただけている。右ひざを立てたりべたりと座ったり動作に連続性がない。短刀。紙をまかず柄を握っている。血紅を使用していない。

介錯のポーズ二枚。表情が能面的で苦心の作とは思えるが、物足りない感あり。

(四)略号「マニ」三枚組。某女。ひざにタオルを掛けて、バックは障子。脇差に紙を巻き紐で結んでいる。両手で臍下に突立て、右手で右へ引廻すポーズ。血紅使用せず御本人は大いに楽しんでいるらしいが、その割に感興をそそらないのは何故か。

(五)略号「はろ」三枚組。梨花嬢。下着をたくし上げた奇妙な形。短刀の一枚、脇差の二枚。血紅使用。臍下一文字。バックが黒であるのがよい。表情もよし。

(六)略号「おせ」三枚組。大塚嬢。揮使用。アップで、一枚は部分写真。美事な肉体美であり長髪を振り乱し、悲痛な表情をしていて佳作と称すべし。脇差。血紅使用。流れ出る感じが比較的良好に出てい。一文字に切った後、更に刃を上に向けて突込み、上に切り上げるポーズ。鳩尾にさし、切り下げたり、一文字に切って、あばらに向けて切り上げることであると聞いているが、中央から切り上げるとは珍型。

以上、簡単ながら私見、私案を述べた。時代ずれのある切腹凝態を演じきるモデルの出現を待つ。



ルポルタージュ

## 名古屋駅前に跳梁する男娼群

南 里 俊 明

私は商用で東海道線を利用し、そして得意先訪問の日程で、よく名古屋市内で宿泊する事がある。名古屋市内の集金を朝からやる予定で、近鉄急行の終で名古屋に着き、さて、割安のホテルでもないものかと、改札口を出た途端、柱のかげから、和装の中年の婦人が近寄ってきた。

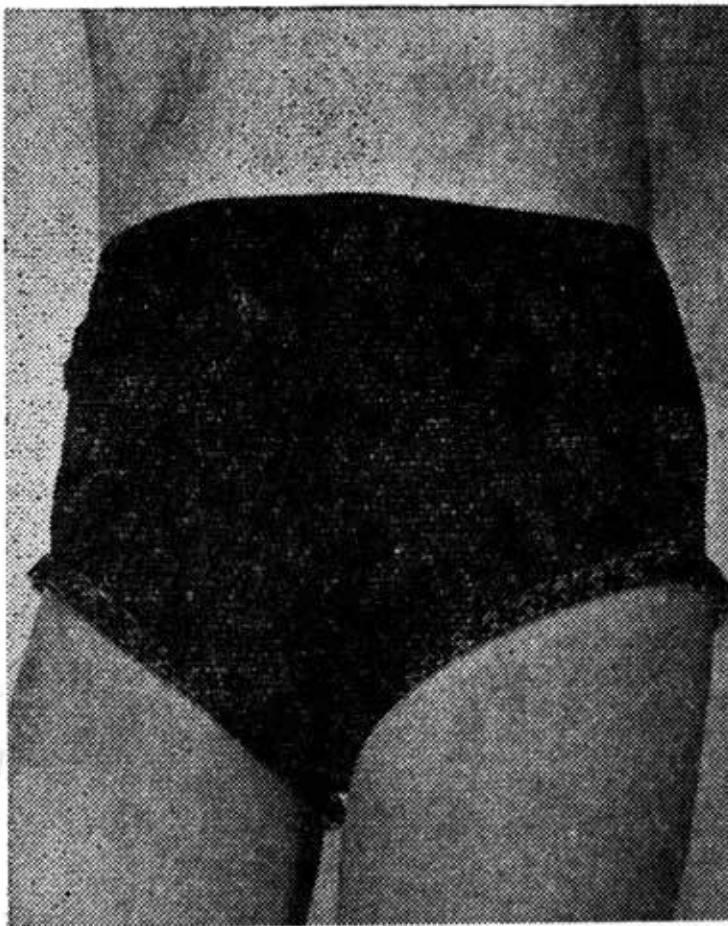
どうせ、今夜は泊るのだからと誘われるままにその女のアパートというのに一緒に行ったのだが、それが、なんと、女装の麗人。思わぬことで、旅のアバンチュールと、アブ経験を持った。

そんなことで、名古屋には男娼が多いな、とは思っていたが、昨秋、東京からの帰り、名古屋で商売をすまし、夜行で九州まで出ようと駅まで向ったときのことだ。汽車の時間があるままに、駅前の中華料理店でふらふらとビールを飲んだのが失敗だった。附

近のホテル、旅館と契約していて旅の鼻下長連をカモにしているのだが、地元の警察が何故放っておくのかと、思うくらいの跳梁ぶりである。大阪や神戸、それに東京あたりは、同じ男でも、もう少し控え目のように思う。

## 私の下着

毎日愛用している  
私の下着です。



マダ遊び

トレイじや出来ぬ趣向立

二月号所載山本節夫氏の独演に垂涎万丈。だが、いかに人目を避けるかが苦勞のタネだ。



マゾ遊び

(まぞ川) 柳自註 西 田 仁

保母を娯母とは

気の利いた誤植なり

バカにつける

薬はこうと保母伝授

おなじく二月号「まぞ川」五句目の註に誤植あり。まさか植字さんが気をきかしたわけでもあるまいが、なるほど「娯母」というものもあるかも知れない。しかし一緒に連れて帰郷した精薄児が、列車のベルをいたずらしてケガ人を出したりする現実。監護の厳しいのは当然だろう。

絵のところばかり

無筆の女王さま

「アタシッテ読ムノニスゴクヨワインダ」知能に於る下剋上はマゾ小説永遠のテーマだそうだがたまにははくのもお読み願います。春川さんの絵ばかり眺めてないで。

継母に父子相伝の馬にされ

「強情で泣き虫なのはきつと死んだ母親に似たんだよ、あたしにこんなひどい目に遭わされたってお父さんにいつけてごらん」しかしそのお父さん、若く美しい後添えの尻に敷かれっぱなしとは、わが団地の噂はなし。



## &lt;誌上通信&gt;

私の好きな  
責め方

東浦ひかる

近藤一様。

誌上での通信ありがとうございます。お返事を書くとう書こうと思いがらも、つい、なんとなく、ためらわれて、おそくなり、申しわけありませんでした。

先月号で初めて読者通信を投稿して、ちょっと、勇気が出てまいりました。それで、はじめてお呼びかけの通信を書いてみました。

近藤様は、私の裸身の事ばかり云われていらっしゃるようですが、私は自分自身で、どのようにすればいいのか、けんとうもつきかねています。

近藤様のおっしゃった通り、私はマゾヒストです。といっても、心のそこまで、本当のマゾヒスト

にはなっていないません。

今までの所では、まだ一度も本格的に責められた、という経験はございません。今までに、三回か四回くらい、縛られたという事はいろいろございますが、責められるという言葉であらわすほどのひどい事はされていません。

私の気持としては、うんと責められてみたいと思うのですが、実際には、そんな目にはあっていません。

新年号の「最近号の読後感」と

して、近藤様を書いておられるように、要所要所をギュッと締めつけたり、ウエストをギリギリ絞り上げた厳しい縛り方をしてほしいものだと思います。

相手の方は、有難いくらいいろいろと気をくばって下さるのですが、かえって私には物足りなく思われるのです。といって、私の方から、もっときつく責めて下さいなんて、いえませんしね。

今までの経験で、一番ひどいというわけではありませんが、私の一番満足したのは、縛られて身動きのできない私の肌を、ヘヤー・ブラシで、ところ嫌わず、すみからすみまで、まるで何かを磨くよ

うに、ゴシゴシとこすられたときです。

次にスリルを感じたのは、やはり後手に縛り上げられ、あお向けになったお腹の上に、火のついたローソクを横にして、タラタラと熱い蠟涙をたらされたときです。

後で考えると、皮膚が少し赤くなる程度で、思ったより熱くないのですが、そのときは、とけた蠟が直接お臍のまわりへ、落ちてくるのですから、思わず息もつまりそうに緊張したものです。

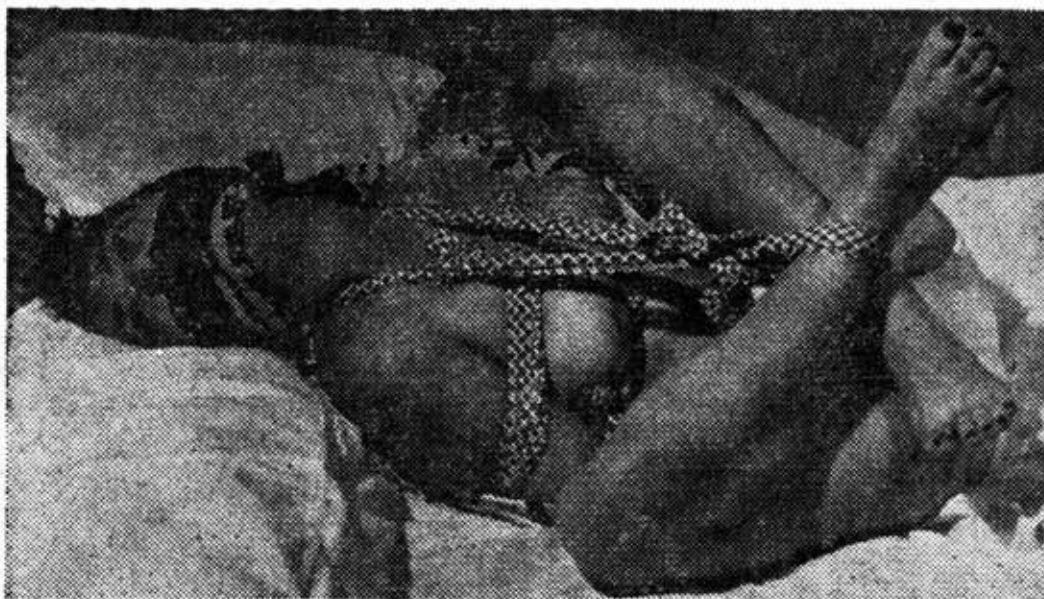
私は、まだまだ、ほかに色々責められたいと思っています。

縛りのほかに例えば浣腸んなかに興味があります。そんな責め方をしられたこともありますが自分から、そんなことを口には、恥しくて、ようしないのです。

それで、私、人に聞かれたいときは、とんちんかんなことばかり答えています。きつと、にえきらない娘だと思われているでしょうけれど、私って、恥かしがり屋だから、仕方あり

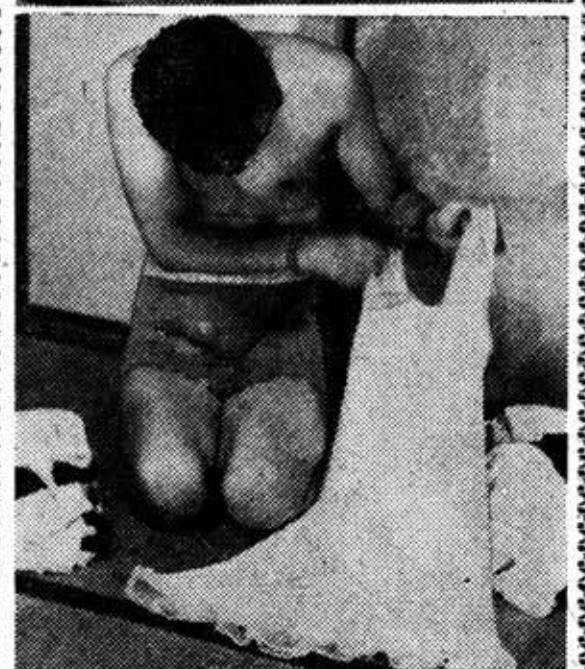
ませんわ。

では、愛読者の皆様、お元気でそれから、私、これから、つとめてグラビヤにも出して頂きますから、わるいところがありましたらどしどし叱って下さいね。さようなら。





## M 写真「洗濯奉仕」 美 枷輪生



## 「誌上通信」——津久井毅君へ

## ドレイ・ボーイ願望の君に

美 奈 味 裕

津久井君、二月号の君の告白を読んで、真実か否かを考えるまえに、その願うところに僕は耳、いや眼を疑うおもいだった。

あの手記が真実なら、僕はよるこんで一生、君をドレイとして僕の側においておきたい願だ。君の年令、体格、性格（尤も容貌はわからないが）も、僕のもっとも理想としていところで、満足出来るそうだ。

君が、ドレイ・ボーイとしての奉仕を一生捧げてくれるならば、僕も大いに君をドレイとして使ってみたい。

僕と共に一つ部屋に起居し（勿論、睡眠を許すときには、牢を作って君を入れておく）、昼は勤めに行き、夜間と休日にはドレイとしての君に、あらゆる奉仕をさせるのだ。

頭髮はG Iカットとのことだが

僕のドレイとなったからには、出来たら五分刈りさせる。服装は四季を問わず、上半身はハダカ（ドレイにシャツは禁物）。下着は外出の時のみGパンを許すが、屋内では薄いナイロンブリーフか三角褲ぐらいでおきたい。冬の外出はギッチリ緊縛した上でオーバーの着用のみをゆるす。春、夏、秋の外出用としての衣類はショーツ・シャツを支給しよう。

生活は、互いに大いに働くことは当然で、僕も君も精勤に会社に出ること。君の給料の半分はドレイの飼育費にあて、残り半分はドレイの将来のために強制貯金にする。勿論、酒、たばこ、女色は固く禁じ、若し反則のときは厳罰に

処する。勤めから帰ると君は早速夕食の準備、清掃、整頓一切をやる。少して悪いと仕置を覚悟しておくことだ。

君のドレイとしての言葉は、君の希望通りの二種類のみに制限しよう。次にドレイの道具化に関する僕の方法を述べよう。

## A、人間灯台

君の願う方法もよいが、僕の好みからは、君の後手後足を一つに縛り、額と胸、腹にローソクを立ててやる。又、逆さ海老縛りにしてもよい。ちよつとでも動けばロー人形のお仕置だ。

## B、人間椅子

これも君の願いを受け容れてやるが、机の脚を上に向け、手足を



その脚に縛りつけて、吊り下げた格好で椅子に於てやる。

C、人間食卓

後手縛りの上、両足を後ろに曲げ、仰向けにさせて、そり反り気味にして固定し、食卓にする。

D、その他

① 毎夜の三時間は次の通り日課としてドレイの奉仕をさせる。僕のマッサージ。僕の好みのドレイ責め。思いつくままの奇抜責め等を各一時間宛。

② 僕のドレイは、一旦牢に入ればいかなることがあっても、又どんなに長時間に亘っても絶対に用便を許さない。若し汚せば嚴重

な仕置の上、勿論、道具なしで清掃させる。

③ マジックインクで烙印を押し、所有者を明確にする。

④ 僕の入浴の際には、必らず入念に三助役をさせる。

以上、僕の君への希望を述べたが、縛りやムチは日常の茶飯事と思つて僕に奉仕する気持があるのなら、いつでも使つてやることを約束しようではないか。

ただ、途中で悲鳴をあげたり、逃げ出そうとしても許さないからその決心が必要だ。

それでもと願うなら歎願書を速かに送るといい。必ずや君の悲願は達成出来るだろう。



捕えられて来た少女達はキンチャクツバ団長の前に引き出され無体な衣服を剥ぎ取られるのだ

キングカッパス団との対決の巻

4怪少女スリーX

南村 駿平 作・画

2  
そして泣きめ  
彼女達を手下の  
カッパ共は卵形のピンに押  
し込み天井から吊してしま  
した「ハッ、どう並べた奴はな  
かなが社長だ」

国電山手線の或る駅でこのことである。地下道を通つて、この階段を上れば出札口というところで、下をむいて第一段の階段を上ろうとする、コロコロと黒いハイヒールが転がって来た。?!と顔をあげる、七、八段上にいた若い女性の片足から脱げたのだ。あわててあがる拍子につまずいたのか、或はひとりで脱げたのだろう。私は素早くその靴をかがんで手に持つと、丁度鼻の高さの、彼女の足許へキチンとすぐはけるようにして差出してやった。

「あら、すみません」  
「いやアー」

私はさっと出札口を出る。

ふりむくのが悪い気がしてそのまま街へ……。歩きながら私は女性の足許に靴をうやうやしく差出した瞬間のよろこびを味わった。ただ残念なことは、その女性の顔を全然見なかったことである。そ

生活の中でのM

捧げたハイヒール

春木 俊野

れと悔やむことがもう一ツ。  
「どうして俺は、キッカケをつかむのが下手なのだろう」

此の頃は会社の女事務員、即ちB・Gもなかなか快活で、時折M心を満足させてもらえる。紅葉シーズンには旅行でと一泊二日の社員慰安会があった。私達は旅館で三階の奥の方に陣どったが、この三階は殆んど部屋が女性連の割当てになっていた。宴会終了後、私と一緒に悪友一人、自分達の部屋で二次会としゃべっていたら、日頃のことごとく仕事上で相反する女性軍の襲撃をうけて取っ組みあいの大騒ぎ。然し多勢に無勢で我々二人は布団むしの運命にあわされたが、グルグル巻きにされながら背中や腰の上に、馬のりになって騒ぎ、笑いこける女性達の体重を布団を通して感じるよろこびは格別だった。



わたしの夢

アブ・ノートの一頁

香川和彦

わたしは二十八才の独身青年。ある商事会社のサラリーマン。仕事がおわって、下宿の二階に帰ってから、わたしの愉しみがはじまります。

部屋のかぎをかけて、カーテンをしめて、わたしの秘密のトランクを開ける。そこにはわたしのプレイに必要な小道具が、びっしりと詰められている。

わたしはオシメマニア。わたしのトランクには色とりどりのオシメとオシメカバーがつめられている。アメ色のゴムのカバー、白いビニールばかりのカバー、薄い黄色のゴムをはったカバー、ビニールのパンティ、総ゴムばりの白のズロース……。そして、紺や白黒の模様のはいたオムツ。赤や緑のガラのゆかた地のオムツ……そして紙オムツ。

わたしは浣腸マニア。とくに洋装の、しかも、女学生の女装マニ

ア。紺のセーラー服とフレージャーのスカート、白い半そでの夏服。赤い胸リボン、白いリボン、黒のストッキング、ガーターベルト、白と黒のスリッパ、シュミーズ、女性下着、白のブラジャー、ピンクとブルーのメンスバンド、黒と紺の運動用ブルマー、白いパンティ、ピンクのパンティ、黒いズロース……。

わたしはマゾヒスト。白いロープ、黄色い細引き、黒い腹帯、赤い腰ヒモ、細い金ぐさり……。

わたしは、毎夜毎夜、これらの小道具をくみあわせて、わたしのプレイを愉しみます。

さっき、いちじく浣腸を二本して、紙オシメをあてて、その上から総ゴムばりのメンスバンドをはめて、ゴムのオシメカバーをあてて、その上から、黒いブルマーを

穿いています。黒いストッキングに赤いガーターベルトがかわいい、ときどき、スカートの下のブルマーの裾口のゴムを手でパチンパチンとならしながら、これを書いています。

お腹がゴロゴロとなつて、今にも粗相しそうなのを、一生懸命にこらえながら……。

しかし、わたしはトイレにはゆけません。だって、両方の足首が白いロープでびっちり縛られています。ああ、もう少したつてこらえきれなくなったら……。

この、何ともいえない気分の中で、わたしの夢はひろがってゆくのです……。

わたしが、ある日、街角で、突然タクシーに触れて、外科の病院につれてゆかれる。

ちよつと足首を痛めただけなのに、人びとは心配して、ムリやり私を診察させる。白い衣の看護婦さんが二人で、わたしの着衣をぬがせにかかる。

ズボンをとって、ズボン下を下げたとき、そこにブカブカの黒いブルマーを穿いた脚がでてきたときの彼女のおどろき！  
そして、そのブルマーの下から

「奇クサロン」の

原稿を募る

『奇クサロン』は愛読者の皆さまの共通の広場です。絵でも、写真でも、文章でも、通信でも、なんなりと御遠慮なくドシドシお送り下さい。型破りの雑誌の型破りのページとして最大限に活用して頂きたいと思っています。この欄だけは、何んでもあけすけに言える楽しいセクションとして、皆さまと共に末永く育ててゆきたいと思ひますので、どうぞ、よろしく。

ピンクのメンスバンドがでてきたとき、看護婦は真赤になつて、ためらう。……わたしはベッドの上で横になつたまま、さっきの事故のときにその衝撃で、つい洩してしまつた粗相に濡れたゴムをぬがしてもらうならば。……

ある夜ふけ、私は公園を散歩しているとき三人組の不良少年にとりかこまれる。

私があり金のこらず出しても、彼らはまだ不満げに、私をそばの小屋にねじこんで、両腕をロープで縛ってしまう。そして、わたし





の洋服のあちこちをさがしながら  
遂にズボンもぬがしてしまう。  
その時、ズボンの下に、黒いス  
トッキングにピンクのガーターベ  
ルトをはめた脚があらわれてきた  
ら！ しかも、白いスリッパのレ  
ースのししゅうのついた裾があら  
われて、その下に純白のズロース  
が穿かれていたら……。

不良たちは嘲笑しながら、わざ  
とその縛ったままの姿で放って去  
ってゆく。……夜気の冷い床の  
上で、わたしはたえかねて、ズロ  
ースのままで放尿しなければなら  
ない。

山道で一人の女学生が倒れてい  
る。  
わたしがそばの小屋につれてい  
って、いろいろ介抱してやる。気  
がついた少女が、突然真赤になっ  
て、もじもじする。……みると  
紺のセーラー服のスカートにシミ  
が大きくついている。さっき気を  
失っている間に粗相してしまった  
らしい……。

わたしは恥かしがる少女ををね  
かせて、ズクズクに濡れたパンテ  
イをぬがしてやって、その代りに  
又、汚さないようにオシメを当て  
てやる。そして白い大腿にピッチ  
リとゴムのオシメカバーをはめて

やって、その上からブルマーを穿  
かせてやる。

○ わたしの夢は尽きない。……  
しかし、わたしの時間には限り  
がある。夢中になって、このノー  
トを書いている間に、わたしはし

っかり、こらえていたはずだった  
のに、何時の間にか？

「ああ、あなたは、また、お粗相  
したのね、ごらん、ブルマーもス  
カートも、じゅくじゅくじゃない  
の！」

(了)

## 切腹小咄集

須藤 律夫

### 空 砲

### 回 春 法

よって手は洗わなんだのじゃ」

木枯しの吹き荒ぶ寒い如月の夜  
殿様は夜毎の癖で丑の刻ともなる  
と厠に立った。宿直のお小姓は御  
寵受の菊丸、いつもの様に御手洗  
から出て来た殿様、何を思ったか  
菊丸には目もくれず、手も洗わず  
にそのまま寝所にお戻りになる。  
さあ大変、自分では気付かぬ乍ら  
何か不調法でも、否、殿のお気に  
触った事でもあったのではない  
か。菊丸は色々と考えあぐねたが  
思案がつかず、お叱りを受ける位  
なら深く切腹して相果てようと覚  
悟を定め、この事を恐る言上  
した。すると殿様、呵々と笑って  
「殊勝なるぞ菊丸、だが最前予想  
空砲だけで実弾は放たず、じゃに

お殿様が或る夜庭先に出ると、  
築山の赤松のかけ、今しも密会し  
ている家来の侍と奥女中とを発見  
して仕舞う。迎も粋な殿様で、態  
と見ぬ振りをして少し行き過ぎ、  
ふと振り返ると女は素早く逃げて行  
った。ところが侍は後ろ向きに座  
ると双肌脱ぎとなり、どうやら切  
腹しようとする様子、殿様咄嗟に  
大音声で、「たわけ者め！ 誰が  
切腹などしろと言った！」  
すると侍は、筆を逆手に握った  
まま、  
「と、殿！切腹などとは滅相もな  
い。某、臍の穴に油を注ぐ、回春  
法を施し居りました」



## 無情なる電話

厚木千志夫

大方の用件は片付いた。午後の書類の受け渡しさえ済めば、今回の大阪出張の社命は完遂出来る。肩の荷の軽くなった気安さで眺める室内。どこの旅館にでも掛っていいような美人画が、床の壁からじっと私を睨めている。

「プレイ」……私の頭の中に、縛られて悶える美女の姿が一杯にひろがる。「ここは大阪。絶好のチャンスだ」……胸が早鐘を打つ。「俺は十数年来の愛読者だ。訳をいって、K誌にマゾ女性を紹介し

て貰おう。いや、モデルさんがいい、絹川嬢か大塚嬢あたりを」……私は戦慄する想いで、電話器に手を伸した。

「お気持はわかりますがネ、当社は出版社です。何かお間違いないなってるんじゃないでしょうか？」

受話器を流れる声と共に電話はプツンと切れた。私は気負い立っていただけに、水をぶっかけられた思いで腹が立った。

「宇宙雑誌社がロケットを射ち上げるかしら？」……床の間の美人が囁いたように思う。私は大声で自分の独りよがりな嘲笑した。お茶を運んで来た女中さんがポカンとしているのを認めながら……。

## 「手記」 相撲雑記

林 田 長 一

今迄、私は此の題の下に二回にわたり小文を記させて頂いた。しかし、その反響は余り無かった様で残念である。又、同様の相撲に関する記事の現れるのを期待したが、これも余り見られないのは残

念である。禪と相撲は切っても切れない関係にあるもので、又、その昔の軍隊のあの封建制社会を今日求め様とすれば、相撲社会しかない。最近では本誌にも禪が可成り認識され、愛好者もかなり増加し

## 連作「少女」"身悶え" 牧村 興次



たようなので再び記事とした。

力士の普通使用の禪は雲斎といって専ら稽古用のものであるが、十両以下は正式の土俵上でもこれを使用する。これはとても固い布地で、一人では締められず必ず相手に手伝って貰うのである。普通は禪はじかに締めるもので、下にサポーターを着用すると云われるが、その様な事はない。禪は恰もテント地の如く固いもので、入門当時の慣れない少年の力士の卵達

は股ずれして痛くて困るそうで、私の知っている某部屋の十八才の少年力士が語ってくれたように、力士に痔疾の多いというのも、こう云ったところに原因があるのである。又、万一の汚れを防ぐ為に小さな布を当てるのも居て、かつての大豪横綱の男女ノ川が、弟子が差出す小布れを尻に当てて、それから弟子の差出す禪を巻いて行ったのを見て居る。禪は砂と汗にまみれ、これは時々弟子が洗う





が、大方は天日にそのまま干して使用するので、それが故に不潔になり易く、所謂禪かつぎと称される入門したてから序二段迄の若い者の部屋は、雑魚寝の關係もあってその青春の盛り、人一倍体のよい彼等の体臭でムンムンするらしく、此処を訪れた女性ファンはボートとするという。又、前記の少年力士は秘かに私に「インキンが多くてネ。入門したては困っちゃった」と語ってくれたが、前記の事より当然であろう。入門の少年力士の、これ等力士

の卵達は兄弟子に配属され、付人として兄弟子の一切の身の廻りの世話をするのである。新序、序の口、序二段、三段目と次第に徹底的に鍛えられ、しぼられる。朝は早くから叩き起こされ少しでも怠けると遠慮なく竹の鞭、平手、拳骨が飛んでくる。土俵に追い立てられ、素裸となって禪を互いに巻き合い、稽古し、兄弟子が起き出すと布団を上げて兄弟子の禪を締め、その胸を借りてぶつかり稽古をする。汗と砂にまみれ、ヘトヘトに立てなくなった彼等に「此の野郎」と叱声が飛び、水をぶっか

けられ、殴られ、或は引立てられその尻に遠慮なく竹の鞭やカシの棒が飛ぶ。あの太鵬でさえカシの棒で叩かれると語って居るのを読んだ。又、最近柏戸が竹の鞭を持つて若い者の尻を叩き上げて居るのを見た。

此のしぼる事を「可愛がる」と云うそうで、汗と砂でベトベトになり、殊に寒中及び夏の暑い時、わけても炎天下の山稽古（野外でやる）はえらく、汗が禪を通してその稽古の傷や鞭の跡にしみ、その上強い日光で、その禪の股ずれと共に堪らない苦痛だと、少年力士は話してくれた。

稽古が終ると兄弟子に従って風呂に入り背中から足先迄流すのである。此処でも怠けると遠慮なく鉄拳が飛ぶ。上ると、扇で風を入れ、体を拭かねばならない。それからステテコ、パンツ、越中を着けるが、兄弟子は足を入れるだけで、皆弟子が上げてくれるのである。これには野球の長島選手も風呂に入って驚いたと云う。

一方、チャンコ係は料理をし、兄弟子達が美味そうに食べるのを傍で給仕をして見ていなければならぬ。稽古に朝食は禁物なので腹ペコとなる。兄弟子の食事がや

っと終って、自分達がかき込む頃には汁ばかりで魚や肉の一片もない。段が違えば虫ケラ同然と云われるが下ッ端の悲哀を感じるのがある。こうした精神、肉体共にスパルタ式鍛練は早く強くなれ式と云うか、他のスポーツ界には見られない習慣である。

午後は又、兄弟子の下着一切、禪の洗濯をせねばならない。こうして夜、センベイ布団で雑魚寝をする少年力士達は互に涙を流して辛さを同情し合うという。平生はパンツ、ブリーフ一丁、又は越中禪が使われるが、若者の中には黒ネコと称する、あの水泳用の黒禪を使用するものも居て、真黒く、そして鞭と稽古の傷の鍛え上げられた尻に、こうした禪の喰込む様に締め込まれて居るのは魅力的である。兎に角、十五才位より二十才迄の少年達が、二十才より二十五才迄の青年力士（三段目、幕下級）に鍛えられてゆく様子は、相撲社会でのみ見られる光景である。尚、付記して、私は他に大学、高校、中学生の相撲部の稽古もよく見に行くが、学校によってその更衣室風景や、シャワーを浴びる風景、下級生が上級生の禪を締めるところなど仲々魅力的である。





## あるカメラマンの自伝

## 鮮鋭なるレンズ

毛利敏久

実物大のヌード・フォトというのを、何かの雑誌の口絵で見たことがあるが、毛利がAから藤野珠子をモデルとして、身体の各部分をアップでキャッチして、それを一枚一枚四ツ切り引伸してくれと依頼された時には、一寸した制作意欲にかられた。

Aは写真の上ではともかく、ま

だ実物の珠子は一度も見えていないのである。だから、写真を見ただけの目では、珠子の恰好のよいすんなりとした手足、脛、それに、瑞々しい水蜜桃のような膨らみを持った胸、縄で自由を奪われた女性の各部分の微妙な変化を、皮膚の凹凸に至るまで細かなデテールを把握することは、面白いと思っ

た。

逆光線で狙えば、生毛の一本一本に至るまで、鮮鋭なるレンズの目に捉らえることが出来るだろうと思う。それは、とりもなおさず藤野珠子という一個の女体を解明することになるのだ。

はじめて若い女の肌を目前に見たときの感激と驚きは、今の毛利にはなかった。それよりも思わぬところに出来た皮膚の皺なんかを如何にして醜くカメラに感じさせないように出来るかと、ライトを左右に動かして、ファインダーに映ずる映像をルーペによって仔細に検討するだけの冷徹な眼が養われつつあった。

温かき血の通う柔肌の持主としての女体ではなく、一個のオブジェとして、一個の被写体として見る眼が養われつつあった。そんな毛利の眼からは、若々しいモデルの藤野珠子も欠点だらけの女体であることがわかってきた。

なんとか、この女体の中から美だけを抽出したいという激しい意欲が燃えさかってくると、毛利は歯がゆい、いらだたしさをまぎらわすように、麻縄できびしく高小手に縛り上げた珠子の目を、黒い布で掩ってしまった。こういう

アイデアで写真を撮とられるのかと思った彼女は、素直にされるがまゝになつていたが、一向にシャッターが切られる音がしないので、不安な表情を全身にあらわしていた。

毛利は、カメラから離れてじつと腕組みしたまま、そんな珠子の全身を眺めるともなく眺めていたが、突然、カメラに近寄ると、絞りをF22にセットして、ぐっとレンズを被写体に近づけた。カメラの近づいた気配を感じた珠子は、不安の表情をやわらげ、いつもの緊張に身体をこわらばせた。

ファインダー・ガラスの上に珠子の肌が、ぐっとクロース・アップされて映ってきた。ピン・ホールのように極度に絞り上げられたレンズの目からは毛穴の一つ一つに至るまで、はっきりと微粒子のフィルム乳剤に刻明に印されることだろう。

ジーという二分の一秒のシャッター音が毛利の手に快い手ごたえを与えた。三脚に据えられたカメラは忙しく位置を変えて、珠子の全身をくまなく嘗めましてゆく。珠子は、目かくしをされていて視覚の自由がきかないだけに、バリライトの暖味が肌に近づくと、今





自分の肌の一部がカメラのレンズに狙われているという、擦ゆい感じに襲われて、足をもじもじとさせた。

逆光線に肌を浮かび上らせたとき、金色のウブ毛が、まるで熱帯の海に光る夜光虫のようにそよいでいるのが、肉眼で見えた。この神秘的な美しさが、どこまでモノクロの写真で表現されるだろうかと毛利は一抹の危惧を覚えた。

目かくしを取られた珠子は、今の今まで、何が行われたのであるうかという不審の念で、思わず、きよきよと辺りを見まわしたが、そこには三脚にのせた一台の

カメラがあるきりで、何一つ不思議なものもなかった。不思議といえば、胸の上から肌もへこむばかりに力一ぱい掛けられた縄が、当然、そうなるのが当り前といった恰好で、自分の両腕の自由を奪っていることだった。

この頃では、毛利は写真の撮影が終っても、慌てて縄を解くことはなかったけれど、珠子の方も、もうそれが当然でもあるかのよう



## 超人間の面白さ

庇 曾 間 賀 理

本誌の読み物は面白い。だが、この場合の面白いという言葉は、わが秘やかなアブ心理が満されるからとか、他誌ではお目にかかれぬ場面であらうというからとかいう言葉ではない。

いまさらいうまでもないが、僕をも含めて、アブニストほどエゴイストも少ないだろうと思う。全く自分の好みのままをヒロインに強制するのだから。

勿論、読み物だから、理屈を並べるのが間違っているのだから、でも、僕自身が夢想していながら、そのつじつまの合わせに呆れはてるのが際々ある。

美と智性と健康を兼ね備えた女性というものは万人の望むところだろうが、本誌上に登場する女性には、それに加えてスーパーマン的要素が不可欠となっている。S小説にひっぱり出されるヒロインは

殆んどが鞭で少々傷つけられても直ちに回復して「牛乳を塗り固めた」ような美肌を絶えず保ち得る肌質の持ち主であり、欠食粗食にも耐えるばかりでなく、その容色にも衰えをみせぬ強壯者揃いであり、尚且つ、諦めと恭順の心境に到達するに敏にして、苦境の内

に自己の悦びを見出し得る感受性の極めて発達した女性ばかりなのだから楽しいではないか。

M小説にしてもそうだ。女神なる女性は、「絶世の美」を備えていついまでも若く、そのくせ精神的には高度の男性観に達し、嬌慢で冷厳で贅沢な、世間的にいえば全く手のつけられない女性が登場してくるのである。

本誌がアブニストの鬱憤の吐け場として存在しているからだろうが、この超人間達の活躍を、呆れがら楽しんでる僕なのだから余計面白い。



ガン作・マニヤのノート

(私のバーでの会話)

芳野眉美



A トルコ

私のバーの近くは、トルコ風呂が十二、三軒かたまっている。だからお客から、スベツシャルなトルコ女性を紹介しろとよく云われる。が、そう簡単に話が運ぶわけではない。

「ありましたね」と私、「そんなトルコさんに出合ったことありますか」  
 「ないねえ」  
 「いつもいたって、簡単ですよ」  
 「そう、いつでもさっぱりしたもののさ」  
 「何が簡単で、何がさっぱりなのよ？」と麻美。  
 「洗ってくれるのがさ」とN。  
 「誰が洗うのよ」  
 「トルコ風呂の若くて美しい女性さ」  
 「ああやだ、フケツ」

「恋人ができれば、自然に洗いたくなるよ」  
 「絶対に洗ってやらない」  
 「やれやれ」  
 「私のアパートに愉快的トルコさんがいますとね」と私「面白いことをいってましたよ」Nのタバコに火をつけて「私なんか、おたのしみのお手伝いさんみたいなものだって」  
 「ははあ」  
 「飛ぶのね、ですってさ」  
 「それはケツサクだ」  
 「何が飛んで、何がケツサクなのよ」  
 「フッフ」  
 「実験してみせようか、麻美ちゃん」とN「お手伝いさんになるんだぞ」  
 「何を手伝うのよ」  
 「あとで、二人っきりになってから。な」  
 「イーッだ」

B シャワー

その愉快的トルコさん、藤子さんとの会話は次の通り――。  
 Nが「メニウ」の話をもちだしたので（初対面のくせに。そんな話をもちださなければ、いい男なんだけど）、  
 藤子「私のお友達にはいません

わ、そんなヒト。でも奇クを読んでいるヒトはいますわ」  
 N「自分で買って？」  
 藤「いいえ、おなじみさんがくれるんですって」  
 N「ハハア、あやしいな」  
 藤「そのお客さんのことなんですけど」  
 N「やっぱり」  
 「何があやしくて、何がやっぱりのよ」と麻美。  
 「だまって」とN「何か面白い話があるんですか」  
 「ええ、ちよっと話しくいな」  
 「かまいませんよ」と私。  
 「マスター、藤子さんのカクテル俺につけとけよ」とN、  
 「あらッ」  
 「さあ、どうぞ」  
 「コースが終ってから、そのまま個室でビールを飲んだんだそうです。帰る時間も近かったし、そのお客にあとの時間を買ってもらったわけネ」  
 「はほう」  
 「S子さんもビールは嫌いなほうじゃなし」  
 「それで」  
 「S子さんが途中で、失礼って立とうとしたら」  
 「おトイレね」





11  
「ヤンボウ水母さんが玄関に入ると一人の少年が走り出て来て、丁ねいな挨拶をします「お帰りなされませ奥さま」「オオ只今戻りましたよあたしの部屋のぞうじは出ましたか」「はい」

12  
水母さん部屋に通ると彼の少年をきき抱きかかひつゝと愛撫します。いややどうもんな処を見ますとキンヤク氏夫人に対して冷たい顔をするもつとも近頃は新鮮な果物が自由に手に入るの自然にサビ精神を失ったのでは

13  
機密の載れは誰も知らないと思つた故ですがどういふまに何時か窓下に忍びよつていたスリーエが見ていたんです。流石彼女も是を眼にして思はうクリと生つばを呑みます。さて……

「そう、そしたら、お客が五千円札を机にのせて、カケをしようっていったんですって」  
「カケ、ね」  
「君がああ浴槽にオシッコしたら——。ごめんなさい。私、酔ったのかしら?」  
「いいえ、いいえ、どうぞ」と私  
「その五千円をやる、というわけですね」とN。  
「そうなんですって。浴槽はあとで俺が洗ってやるからって」  
「で?」  
「いいわ、って」  
「S子さんはしたの」とN。  
「浴槽の湯は、まだ流してなかつたのですか」と私。

「お客を送り出してから、いつもお掃除しますから」  
「お湯はあつたってわけだ」  
「S子さんも少しは酔ってたんでしようね、きつと」  
「ビールのせいばかりじゃないだろうね」とN。  
「それで?」と私。  
「S子さん、その五千円をブラジャーにはさんでから、また、差されるままに飲んだんですって」  
「そこでまたカケをした」とN。  
「ええ、そうなんです。S子さんが立とうとすると、待て待てってビールを注ぐんですって」

「ハハア」  
「もう十分間、トイレに行くのをがまんしたら五千円やるって」  
「なるほど」  
「その十分間の長いこと。S子さん、浣腸されたより苦しかったってよ」  
「そうでしょうね」  
「いいわねって、二枚目の五千円札をブラジャーにしまったら、また五千円」  
「だしたの」  
「さっきみたいにお湯の中に、ってネ」  
「二度目は平気だな」  
「浴槽に近づく」とN。  
「フンフン」とN。  
「いきなり、お客がお湯にとび込んだんですって」

### 女神はいずこの星?

M・M生

道行く乙女、ウィンドーの前にたたずむ女性、映画を楽しむB・G、颯爽と歩を運ぶ麗人、ゆつたりと脚を組んでボックスに憩う美女。……世に美しき女性は多し。されど、吾れの願いに応えくれ

「わかるね」  
「逃げなかったの? S子さん」と私。  
「それが、中からしつかり掴えられて駄目だったそうよ」  
「とまらないしね」とN。  
「完全だったわけだね」と私。  
「シャワーだね」とN「俺も浴びくなった」  
「藤子さん、カケましょうか」と私「五千円札で」  
「いやよ」  
「やれやれ」とN「麻美でガマンするか。おやッ居ないよ」  
「あきれて、貸本屋にでも遊びに行つたんでしよう」  
S子と藤子が、同一人物であつたのかどうかは、私は知らない。

る女神は現われたまわず。今日もまた光なきままに夜のときは降りんとす。吾、僅かにK誌に潤いを求めて渴をいやすのみ。  
女神、ああ吾が女御主人はいずくの星ぞ。数多き実在の美女のうち、その星の混り居られるを信じ、望み薄き灰色の人生を独り淋しく送る。輝く星を夢みつつ。



## 告白

## 誰よりも鼻を愛す

獅子鼻

明



昔から「鼻は人生の花」といいます。顔の中央にあって、百人百様に異った形態をもつ鼻は、その人の象徴であり、その人の美醜も一にかかってその鼻によって定められるものようです。

私は、電車の中、バスの中、そ

の他、歩行中でも、人々の鼻、特に若い女の人の鼻に注意しましたのは最近のことかも知れません。その場合、対等に向い合って眺める鼻よりも自分が座席にいて、側らに立っている人の鼻を見上げる時の方が、とても美しく魅力的です。それはその人々によって丸い孔、ピーナツ型の孔、横に広い孔、上に長い孔、等々、私を恍惚として夢境に誘います。

昔は上向いた鼻を獅子鼻といって軽視したようですが、現在は寧ろ上向いた鼻が魅惑的であり、美しくも可愛いもののように私は思います。新聞の広告写真などでも鼻の孔を写されている女の人の顔が大部分多くなっていますが、鼻の孔が下向いて、隠されている写真には興味がありません。

京マチ子の鼻が素晴らしいといわれていますが、私は寧ろ、岡田茉莉子の鼻、江利チエミの鼻、芳村真理の鼻が好きです。とても可愛く、そして情熱的です。

そこで、誰しも美しく咲いた花

を見れば摘みとりたい慾望にかられますように、私は美しい鼻を見るとき、その素晴らしい鼻をいじることができたら……という慾望が生じるのです。それが私として「誰よりも鼻を愛する」所以ですが、さて私にはそれを実行する相手もなく、寧ろ責められいじめられたい慾望の方が強く感じられるのです。私は正に女性的マゾの性格だからでしょう。

そこで私が今日迄に体験した鼻責め鼻いじめについて少し書いてみましょう。

宿直の夜など、誰もいない部屋で鏡を向ってやるのですが、先づ裸になって蒲団の上に仰臥して、手でつまみ上げます。次には千枚通しを鼻に当てて力強く極度に上向けます。鏡に写る自分の顔がとても浅ましいみじめな、なさけない顔に変えられていくのは被虐の歓喜で一杯です。

次は鼻詰めですが、これは私にとって最高の、そして最も容易に出来る責めです。左右の鼻孔を極度にふくらませて五十円の穴あき鋼貨を詰めるのです。最初はきりりと痛みを覚えますが入れて了えば何ともありません。

私の鼻は、両方の孔へ、五十円

鋼貨なれば四枚づつ、十円鋼貨なれば五枚までは、容易にはいり得る程になっています。

鼻は極度に吊り上げられて、とてもみじめな顔になります。道を歩きながらも出来るようになっていきます。そして喫茶店へ入ります。アベックの客や、喫茶店員の女の子から、さげすみの眼で嘲笑されるのを、じっと堪えているのもマゾとして絶頂の歓びです。

その上からクリップで鼻を狭くのもよろしいし、又、鋼貨を抜きとってから、まだ真赤に充血した鼻の孔の中間に、四寸ばかりに切ったセロテープを張りつけ、ゆっくりと吊り上げつつ他の一端をヒタイに張りつけます。二つの孔は正面に細長く上向けられて立ち、上唇は少し上り上って、歯が見えます。それを鏡に写して眺めるとき、私の情感と被虐精神は極度に満ちあふれます。

その他、煙草を両方の孔へ突きさして火を点け、所謂鼻で煙草を吸うのですが、これも私の被虐趣味に徹したプレーです。鼻輪をつけることもいいのですが、鼻障子に穴を明けることは、まだこわく試みたことはありません。





△読者体験記▽

## 精神病院の檻

蜷 川 和 男

終戦後間もなくの頃である。私は長い間念願していた教師（それも新制中学の英語を教える）になれて、幸福に、そして得意な生活を送っていた。けれどもその様に理想に近い生活は僅か数年しか許されなかった。目に見えぬ病魔が知らぬ間に、私の心と体を蝕んでいたのである。

私は職を奉ずる傍ら夜間の大学に通っていた。それも愚直に毎晩欠かさず通い詰めた。その上、文学好きの私は女生徒に恋をし、そ

の恋は私を教会に駆り立て、熱心なクリスチヤンに仕立てずにはいなかった。一時私は家庭で席を暖める暇も無かった程だ。食糧事情も今と比較にならない位い悪く、あらゆる物資が欠乏していた。

そして或る日校長に「君は病気にかかっている」と宣告された。そう云われてみると思っている節があり、私の衰弱は人目に立つ程甚しかったらしいのである。念の為牧師に相談した所、「君は病気でない」と逆の即断が下

され、私も殉教者の立場をとる覚悟を定めたのである。一層私は教会の行事に忠実に励んだが、不幸病魔には勝てず、家族一同のすすめて医師の診断を受ける事になった。

結果、私は精神病院へ連れて行かれた。英語辞書を繰るとメンタルホスピタル精神病院とだけあって、索引者に精神修養の道場、乃至休養の場所を連想させるのだが、私の想像も最初それぐらいの単純なものであった。だが事實は、診察室で白いガウンを着た冷厳



な医師と面接した時から、徐々に違った形となって現れてきた。

診察後母に「大分重くなっていますな。」と語る医師の言葉を聞き咎めた私は、大学の卒業試験が間近に迫っているの、「成る可く通院治療にして下さいませんか。」と頼んでみた。が、その問には若い医師は直接答えてはくれなかった。やがて事務長が現れ「ではこちらへ」と私を暗い廊下に連れ出し、それから奥のほうへ案内して行った。

釣瓶落しの秋の日は早や暮れ、日の光の射さない通路を裸電球が佝僂しくともっているばかりである。私の心細さは次第に不安に嵩じていたが、頑丈な扉の前迄来て、「ネクタイとズボンのバンドをとりなさい。」と云われた時は諦めてしまった。後でわかったのであるが、巧みに灰色のペイントで塗られた外見木製の大きな扉は鋼鉄板を用い、自動的に開閉出来、不心得な患者の逃亡を防ぐに便であった。

さて皮バンドの代りに紐でズボンを締め、ネクタイを脱し、腕時計もとられると、刑務所の囚人と大差ない服装に気が滅入った。次に私の定められた部屋も予想とは違って、個室でなく、雑居制の大部屋であった。殊に意

外であったのは、窓枠に縦にはめられた鉄の棒であったが、野蛮な前時代の遺物としか理解出来ないしろものであった。然も大部屋には普通の病室の装いとは縁遠い日本式の畳が敷いてあった事も私を失望させた。

だが外界と遮断された今、誰に訴えようもなかった。私は秘かな同情を天才と表裏の關係を持つと云われる同棟の患者に向けるしかなかった。初日の楽天的な私の結論はこうであった。「二、三ヶ月ゆっくり休養して健康を恢復するのも悪くはない」

## ○

病棟内には簡単に壁で仕切られた大部屋が六つ程あって、五十人近い患者が、部屋の広さに応じて配分されている。全員男子であった。

女子患者は人員が少く、南病舎に入り切れぬ男の患者と共に北病舎に收容されていた。この点、露出狂で着ているものを引き千切る娘の噂は何度も聞けたが実地には見られず、一般社会と異なる雰囲気、男女の織りなす風俗を研究せんと期待も薄れ、三度の食事の糧が、配給制に頼る家庭のそれよりも豊富なのが取り柄だった。それに精神病と云う忌わしい名で呼ばれている身近かな患者達が、普

通人よりも却って善良なのが嬉しくも安心なのである。

課せられた仕事もなく平穏な日々が過ぎ去り、不足と云えば、外部へ出られない事と、簡単な運動位させた方が健康を増進するのではないかという私案であったが、私はそれ等の欲求不満を病院側の都合に帰していた。然し患者は、そんな私の気持ちに頓着なく、手で紙と糊で作った将棋や碁で退屈を紛らし、そうでない他の者は読書や雑談で悠々と長い一日を費すのである。そして私もいつしかそんな組のいずれかに参加していたのである。

だが私達の静かな平和は、ガタンと無気味な音を響かせて据えられた肘掛椅子と、ドヤドヤと白衣の人の入り込む気配に、無残に引裂かれてしまった。

「電気治療だ。」

と囁いた患者の声が、シーンと静まりかえった気配の中で、私の耳朵を烈しく打った。そしてそれ以上に、名前を看護員に呼ばれた患者の異様な態度が私に恐怖感を与えた。何故なら、反対に呼ばれない患者は安堵の吐息だからである。

リストの順番が私に廻って来た時、私はクリスチャンらしく決意を固めた。「取り乱し



てはならない」と。立上り、隣の部屋に入ると、看護員の指図通り、畳に仰臥し、手拭を口に噛むと、それなりに意識を失っていった。目を覚ますと周囲には多くの人が、ぐったりと倒れた様に未だ眠り続けている。

「気がついたか。」と同室の親切な仲間が私の手をとる様に部屋へ連れ戻す。「頭が痛むか」とその仲間は心配そうに尋ねる。私は微かに顔を横に振ったが、その実意識は未だ朦朧の域を脱しなかった。それに口の中が渴いた時の様にかからだ。

「電撃を受けた後の食事は不味いよ。」と先輩ぶる口調を聞き流し、先づ意識を取り戻そうと、改めて寝ころぶのだった。電気治療は一日か二日の間隔を置いて行われる。おそらく頭脳を休養させるのが目的なのだろう。

特に外傷とか患部が無いのだから、治療の際も苦痛は感じないが、治療器具が電流で生じるうなり、口から泡を吹いて倒れている処置後の患者の姿、寝てから接触に依って意識を失う迄の緊張感、恐怖を伴うのであった。そしてこの目に見えぬ敵に対する恐怖感、入院中私を散々悩ましたし、他の患者の大部分にも共通の感情なのである。

中には治療を拒む者もあり、甚しい者は面

会時間を利用して病院から逃走を試みる者も出てきたが、拒むものは強制的に受けさせられ、連れだされた者は独房に閉じ込められた上、一層烈しい電気ショックにかけられた。

内密に聞いた話では、公立の病院に関する限り、無用の恐怖を避ける為、注射で眠らせから電気ショックを与えるが、私立の設備では財政上の理由で注射を省くしきたりであり、金が一切を支配する矛盾が病院内部に迄顔を利かせていたわけだ。

そんな時上山という看護人が「君は軽いから、外の人より早く帰れる。」と屢々慰めてくれるのが大きな励ましとなった。

電気治療以外に、インシュリン注射に依る熱療法も受けた。但し此の場合は費用を健康保険以外に自己で負担させる。矢張り苦しいが、恐怖を抱かないですむのが長所である。

治療後もすぐには帰れず、入院以来精々半年の予定が延び、二度も正月を迎えた。

同棟者で早い人は三月か半年で退院するがそれ以外の人是一年以上、梅毒系の患者になると二年以上が普通である。悲惨なケースでは精神異常で放火犯の経歴者が禪一つで鉄柵の独房に監禁されて居たが、此の人は一生帰る当てもないと云う。

確かな自由への希望もなく、狭い場所に限定されて、時折洗面所の窓から間近かな緑の山とそのあかちゃけた地肌、更にその上の青空に慌しく行き交う白雲を仰ぐと、郷愁を唆られ、果ては切ない帰心につながる。いつしか私は積極的に廊下の掃除を買って出て、当番にも励み、看護人の手助けを心掛けるようになった。

院長回診の際も、院長の質問により多く答えられるようにとめた。タイミングよく「君はもうすぐ帰れる。」と上山看護人は自信ありげに語ってくれる。

電気治療の順番が廻って来なくなり、体重も増え、目に見えて肥えはじめた。そしてとうとう寝具を風呂敷に包んで退院出来る約束の日が訪れた。

気の好い連中は心から喜んで送ってくれ。私は入院中彼等から受けた暖いもてなしに今更の如く感謝の念を禁じ得なかった。でも私は別れねばならない。そして再起のスタートを切るのだ。思い出多き病院の門が見えなくなった時、私は自由の大地に立って母と共に車を待っていた。彼等の幸福を神に祈りながら。



辻村隆さまへ

# あるラブ・レター

羽村京子

辻村隆さま――

このようなお手紙を差し上げますことが、どれほどはしたない行為であるか、よく承知しています。いくら奇クが、世間に容れられない特異な性向をもつ人たちのための特殊な場であるからといって、ちゃんと夫があり、二人の子供たちの母親でもある三十歳にもなった女が、こうした行動に出るまでには、相当のためらいがあるものです。

辻村さま――

くだくだしい前置きはこれくらいにして、早速心のはやるままに、本筋に入ることをお

許し下さいませ。ずい分長いお手紙になるかと思いますが、一度口火を切ってしまうえば、あふれるように胸の奥から湧き出して来る、おろかなことばのありたけを、思いつくままに書き記させて下さいませ。たとえ、あきればた女とさげすまれようとも、京子は満足でございます。

――

わたしは、三十年二月号の「猥らな虫」以来、あなた（とお呼びすることをお許し下さいませ）を意識していたようです。それがは

っきりと、目からうろこが落ちるように、熱狂的な興味にかわるようになったのは、昨年一年に、あなたが奇クにお書きになった諸作品を読んでからでした。ほんとうに、あなたは罪なお方ですわ。何気なく書かれた文章の中に、あなたはわたしにたいする特別な好意をお示しになりました。わたしたちの世界では、お互いの間のちょっとした特別の感情でさえも、異常な敏感さでキャッチされます。あなたがこのことをご存知ないはずはありません。

常人からはなれて、淋しい少数者の嘆きを



共にしているわたしたちの間でも、非常に自分に近い性向の相手を見つけることは、至難のことです。だからこそ、正常な人たちの間ではとうてい考えられないほどはげしく、わたしたちはお互いに求め合っているのです。

昨年五月号の吾妻さんの「古川裕子への手紙」を読む人は、そこに崇高なまでにひたむきな筆者の情熱を感じないではいられません。八月号の近藤さんの「川端多奈子を想う」も、幾分ドン・ファン的な口説き方ではありますが、やはり、慰められないものの相手を求める心から書かれたものに違いありません。そして、辻村さま、わたしはあなたを選んでしまったのです。

「狂い咲くカンナ」（二十七年九月）以来、わたしは一貫して、大量な注腸と空気の送入による、自分の腹部の膨満をテーマとした告白を、くりかえしくりかえし書いて来ました。年上の男の子たちが、自転車の空気ポンプで蛙のお腹に空気を入れてふくらます、残酷な遊びにヒントを得て、まだ十歳ばかりの少女だったわたしが自分の体にそれを試みたことから、水道で浣腸をやってみたこと、風呂場で空気浣腸をして体を浮かせる実験をしたことまで、あらゆる行いの告白をし

れば文章にして来ました。

けれども、その後奇クにあらわれた多くの浣腸マニアの人たちは、全部がわたしのよう大量の注腸を好まれるわけでなく、むしろわたしと同じような傾向の方は案外少ないことが分りました。たまにそういう場面があっても、それは他のテーマで書かれたものの中に偶然に出て来るにすぎず、わたしを満足させませんでした。

自分の腹を異常に膨らませることに興味をもったわたしは、また早くから、妊娠してお腹の大きくなった女の体に特別の関心をもっていました。そのことも、わたしがごく初期に書いたもの（二十七年十二月）から、最近にいたるまで変わりません。子供のころ、ときどき母につれられて行った銭湯の中で、臨月近い大きいお腹をしている女の人の方ばかり見ていて、母に注意されたのを、今でもはっきりと覚えています。

赤ちゃんが入っているお腹というものが子供心に不思議だったのかも知れません。しかし、うっかり気をとられているところを母にたしなめられて、何かいけないことをしていたような意識があり、それから母の眼をぬすんで、妊婦のグロテスクなお腹をじっと眺

めている自分に気づくことがありました。それをみると、単なる好奇心ではなかったように思います。やがて自分が妊娠し、最初のときは初めて母になるという緊張からか、それほどにも感じませんでしたけれど、次に妊娠したときは、自分でもはつきり意識して、自分の姿を責めさいなまれる立場に置いて考えるのでした。

## 二

辻村さま――

わたしはあなたが、どれだけわたしの性向と近い立場にいらっしゃるかを、昨年間にあなたが発表なさったものの中から、具体的に例証してさし上げたいと思います。

まず第一に、あなたは、腹部が蛙のようにぶっくり膨らむまでの、大量の浣腸に興味をお持ちです。「奇譚三十九夜物語」から引用しましょう。

### 第二話 理解ある紳士

グリセリンの浣腸器によるものより、イリガートルより注入される、あの大量の流入の華やかさには、つい我を忘れ、クラシケの腹部が徐々に膨れ、排泄を我慢して、眉をしかめ、苦痛をこらえる若い女に、薬



局長は、呆然として、しみじみ生き甲斐を感じるのであった。(一月号)

### 第十九話 こまった娘たち

……ベッドにうつ伏した、若いクランケに直結されたイルリガートルのホースは二本目であったからです。二十六歳の、その若い美貌の人妻の腹部は、既に薬液で膨脹して、蛙腹にまで、膨れ上っているのです。浣腸の許容量以上であった事は一目瞭然です。

……イルリガートルでどんどん温湯を注腸するの。見る見る私のお腹はふくらんで苦しくなり出したの。……まるで妊娠十カ月程にふくらんで、それから、皆の見ている前で、お腹の湯をすっかり出さされてしまふの。それが二回続いたら、お水のほか何も出なくなっちゃった。彼女ったら、このグループへ入る為の、洗脳じゃなかった、洗腸の儀式だって言うの。(七月号)

### 第二十三話 娘は二度生まれる

……梯子に逆さまにはりつけた鶴子に、イルリガートルから、ドクドクと液体が注がれた。

……腹部は見る見る脹満し、ぐっと胸部に垂れ下ってふくれ上った。液体は彼女の

体内を逆行して行った。

梯子を立て直すと、充滿した腹の液体は、ぐぐと下腹部に下って臍から下が大きく妊婦の様にふくれ上った。(十二月号)

第二に、右の文章の中で「まるで妊娠十カ月程に」とか「妊婦の様に」とか形容していらっしゃることも分るように、あなたはまた、妊娠して膨らんだ女の腹にたいしてもなみなみならぬ関心を示していらっしゃる。やはり同じ物語から引用しましょう。

### 第三話 怒れる若い女たち

……ゆみは面白そうに、西瓜のように張り切ったユキの妊娠十カ月の腹の上に、ドカン、ドカンと口真似で、空地にある拳太の礫を落した。

『……腹さいて、その赤ん坊引ずり出したるか——』

あや子は憎々しげに、ふくれた腹を蹴り上げた。

……ユキの頭は地上を離れた。膨脹した腹部はぐんと胸にたれ下って、それが豊富な乳房と重なって、ユキの身体に大きな瘤をくっつけた様に見える。(一月号)

### 第九話 尼僧の折檻

……容赦なく春蓮尼の腹は日増しに大き

さを感じ、もはや衣で隠せぬまでに目立ち始めた。

『えろう病いが重そうじゃが、何かな、腹のふくれる病いと見えるな——』

……老尼は、一端を納戸の戸に固く結びつけた細引を、春蓮尼のふくらんだ腹に巻きつけて力任せに引きしぼった。

突き出た腹がぐっと引きしぼられてくびれた。

……蜂の胴のように真中で一線を画して上体と下体が半分に分かれたように見えたのも束の間、春蓮尼は悶絶していた。(三月号)

### 第十一話 雲助部落

『フフ、孕み女だが、滅法別嬪と来ていやる。こたえられねえぜ——』

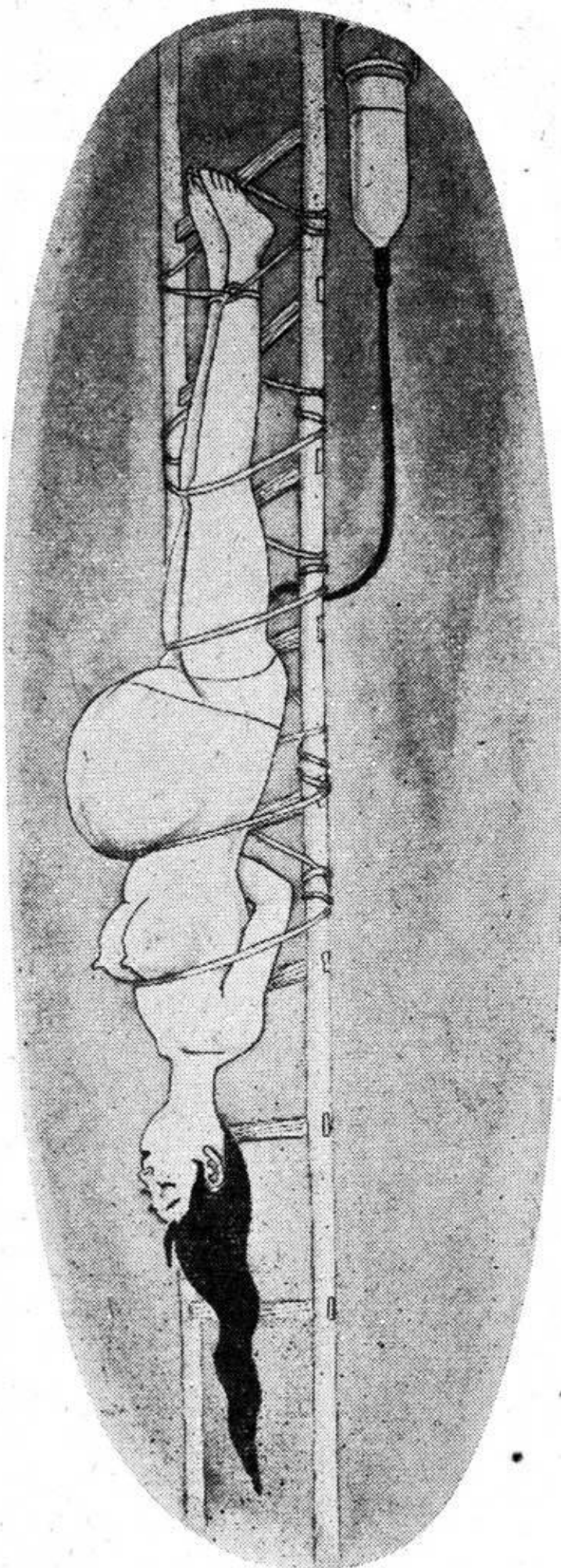
『……身重の体だけれども、お前さえよければ、どうとも好きなようにしておくれ』

『……逆さ吊りにして、この手斧で、そのふくらんだ腹を引裂いて孕み子を引ずり出してやるから、そう思え』(四月号)

この他に、第十三話「女は夜手錠する」の中

彼の異常さは、妻の腹部が月毎に膨れるに比例して昂じていった。(五月号)





という表現とか、第十七話「夫婦が階段をのぼるとき」の

——M・Sプレイともいよいよお別れの日が近づいた様だ。妊娠七カ月ともなると、そうそう逆吊りも出来はしまいで……

(六月号)

ということばなども、わたしは見逃すことができません。

### 三

ところで、辻村さま以外の方のお書きになったものの中にも、わたしの好みに合うもの

がいくつかあります。たとえば、

須藤律夫 臍窩清掃論

……両の乳房は、たわわに実りお腹の皮膚は透き通るように青白かった。そしてパンパンに張り切った巨大なドームは何故か満月を思わせ、……窓からさし込んで来る初秋の光りが、この産婦の腹を恰で大理石の様に照らして、……内臓が透けて見えそうなその青白さは、誠に美しいものであった。(六月号)

菊丸三郎 妊婦の切腹を実見した話

……こんもりと隆起して乳首に真黒な色

素沈着を起した見事な妊娠乳房が盛り上っているのが見えた。一寸、乳房を押さえれば今にも乳汁が噴水の様に飛び出しそうに張り切っている。

……臨月近い円形に突き出した白いくよかな腹部……張り切った腹部に黒びかりのする妊娠線が数条走っているのがよく見える……(九月号)

雪俊遥 奴隷の食事マナー

高圧浣腸をかけられると、久美の栗色の腹は、みるみる膨満して行った。腹筋は張るにつれて薄くなり、白っぽく色褪せて、青い血管を色鮮やかに浮上らせて行く。

苦悶にひきつる顔。飼育係長には、多年の熟練で被術者の額の脂汗の滲み方、顔色の変化、吐息と呻き声などで、腹腔の破裂する直前の状態が解るので、そのリミットまで浣腸液が注がれ続けた。……



浣腸液の容量計と、綱線の示す膨満度と、被術者の腹囲から計算して行くと、大体、被術者の腸の大きさや強靱さも解るのだ。

(九月号)

などがそうです。

けれども、須藤さんは「お臍マニア」、菊丸さんは「切腹マニア」、雪俊さんの本領は「美女の奴隷化Ⅱ家畜化」で三人ともわたしとはかなり異なった傾向の方であることは、はっきりしています。では、辻村さま、あなたはどうか？ あなたが何とおっしゃるうとも、わたしはあなたが、右の三人の方たちとはすっかり違って、非常にわたしに近い方だという気がするのです。たしかに、あなたのお好みは、わたしなんかよりもずっと広い範囲にわたっています。ずい分浮気な方——わたしはときどき恨めしくなることがありますわ。

でも、あなたは根本的に他の人たちとは違っています。本当にわたしに近い方なのです。その証拠を挙げてみましょうか？——辻村さま、あなたはときどきわたしを名ざしで指名なさるからです。また、わたしが使ったことば、たとえば「蛙腹」ということばを、わざわざ意識してお使いになるからです。次の

ような実例をあげるまでもなく、ご自分でちゃんと心当りがおありになると思いますが、いかがでしょうか？

あなたは「わたしを責めて下さい」の中で羽村京子さんが書かれているような、イリガートルや、エネマシリンジ（ひかるはどちらもまだ見たことはありませんが）をお使いになって、蛙腹になさっても、きつとひかるは、一杯涙をため乍ら、我慢すると思います。（五月号）

と東浦ひかるさんに言わせていらっしゃいます。また前に引用した「こまった娘たち」の中で、ドクター氏に、

羽村京子に端を発した浣腸イズムが、今では公然と奇クを闊歩していますものね。

……（七月号）

と言わせ、「鼻責めの道程」の川名さんとの対談で、辻村さまご自身が、

……羽村式の浣腸や、又想像上の荒唐無稽のものならよくても、……（八月号）

と発言していらっしゃるのも、きつとわたしの心が、あなたの方にかたむくことを計算なさった上でのことの違いありません。結果的には少なくとも、そうなのであるもの。

#### 四

辻村さま——

あなたもきつとよくご承知のように、女心というものは、一度あからさまな形で示された男性の好意にたいしては、いつまでもそれを忘れかねるものなのです。

月日の経つ間に、男の心は次から次へと新しい対象に移り、もとの女への気持ちはすっかり冷えてしまっても、かつてのやさしいまなざし、甘いことばの追憶が、いつまでも心の中に消えないために、不実な男をもあきらめ切れないのが女心というものです。辻村さまが、四月号位までは妊婦に、七月号位までは蛙腹に、興味をお持ちになっていたとしても、近頃とみに疎遠になって来たように感じられるのは、わたしのひがみでしょうか。愛する者は愛されるものの、どんなに微妙な心理の変化をもするどく嗅ぎ分けるものです。本能的に相手のどんなに小さな変化でも見落すことはありません。

辻村さま——あなたは、「奇譚三十九夜」で蛙腹とか妊婦についてお書きになっている一方、一昨年十二月号の「鑑賞用女性」にはじまる梨花悠紀子さん、昨年五月号の「わた



しを責めて下さい」以後は東浦ひかるさん、十二月号の「ひろ子緊縛記」で竹野ひろ子さんに夢中になっていらっしゃいました。

あとで述べるように、わたしはあなたの、この三人の女性への傾倒を単純に嫉妬しているのではないのです。あなたの嗜好の変化が、あなたの心をふたたびわたしにもどしてくれなかったら、という不安が少しずつして来たのです。見捨てられたかも知れない愛情にたいするわたしの必死の挽回策が、このお手紙を書かせたとも言えます。

夢よ、もう一度——わたしはあなたの失われた愛を回復しようとして、無駄な努力をつづけているのでしょうか？

日常生活の中で、わたしは平凡な主婦に過ぎません。平和な生活を乱されたくないと願っている、どこにでもある普通の女です。ですから、辻村さまとご交際するのただただ誌上だけでのこと、実際の生活でも愛されたいなどという、無分別な考えを実行にうつすだけの勇氣は、とても持ち合わせていませんわ。三十にもなった女が、はじめてそのようなヴァンチュールにのり出すのはどれほど無謀なことか——好んで惨めな立場に自分を追いこみたくありませんもの。辻村さま、だから

どうかご安心下さいませ。

ここでわたしは、わたしたち夫婦のことについて説明しなければなりません。

夫はわたしの異常な性癖に、理解と同情をもっています。わたしたちの間では、ずい分変わったプレイをします。浣腸とか蛙腹とか、いずれもわたしたち夫婦の間では日常茶飯のことです。しかし、根本では夫は正常な人間なのです。異常な性癖をもつ妻の要求を適当に満足させながら、そのようなわたしを自分のもとに留めておきたいと願うような、善良な夫なのです。ですからわたしが、十分に満たされないはけ口を、奇クへの投稿や辻村さまへのラブレターに求めることは認めてくれています。

しかしそれ以上のことは、お互いの合意の上で、しないことになっています。わたしもそれを破ろうという気はありません。

思ってもみて下さい、わたしのような異常な素質のある女が、同じような素質のある男と一緒に暮した場合に、どうなるかということ——ブレーキが利かなくなり、あらゆる制限が突破されて、日常生活はめっちゃくちゃになってしまいます。おそろしい破壊が先に待っていることでしょう。だからわたしが、

三十三年に「浣腸と妊娠」を書いたあと、自分の妊娠したヌードを編集部に送ろうかどうかと迷っていたとき、夫はそれをわたしに許さなかっただけでなく、そのうちにわたしが本当にそれを送ってしまいかねないのを心配して、彼はいつの間にか、ネガを焼き捨てて（ひょっとしたらどこかに隠しているのかも知れませんが）送れないようにしてしまったのです。わたしは彼の仕打ちを恨みながらも結局はそれでよかったのだと思っています。それでわたしもあきらめがついたからです。

## 五

「悪女の深なさけ」ということばがありますわね。辻村さま、わたしがあなたに書いたこの手紙が、そういうふう to 受け取られることのないようにわたしは願っています。しつこく言いよる女だと思わないで下さいませ。笑われることを覚悟で書いたお手紙なのに、わたしはやはり、わたしの気持ちがあなたに通じることを願っているのですわ。嫉妬しているわけではありません。梨花さんや東浦さんや竹野さんをどんなにお愛しになってもかまいません。ただ、あなたの嗜好が、蛙腹や妊婦から離れてしまうことを、わたしは恐れてい



るのです。

辻村さま——あなたは何故、自分からもそう望んでいらっしゃる東浦ひかるさんを、本当に「イルリガートルやエネマシリンジ……」をお使いになって、蛙腹になさって「あけて下さらないのですか？」

また、妊娠しているモデルをさがし出して「鑑賞用妊婦」とか「妊み女緊縛記」とかいふ写真入りの読み物を、何故お書きにならないのですか？

辻村さま——あなたとわたしのおつきあいは、誌上だけのこと。ずっと前から本当に親しい方のように感じていますけれど、わたしはあなたのお顔も知りません、お声を聞いたこともないのです。それでも、直接お会いしたり、写真をお見せする以外のことなら、わたしはあなたのために、どんなことでもいたします。おのぞみとあれば、わたしのどんなはずかしいことでも、わたしの恥知らずなプレイのどんな微細なことでも、それこそ微に入り、細をうがってお知らせいたしますわ。あなたの「奇譚三十九夜」のストーリーのアイデアとして、どんなとおきの秘密でもよろこんで提供いたしますわ。しかしそれにはおねがいがあるのです。

辻村さま——わたしのこのお手紙にお返事

がいただきたいのです。もちろん、何度もおことわりしているように、わたしたちの愛情は誌上だけのものですから、お手紙もお返事も奇ク誌上に公表されることになるでしょう。しかし、その中で、ぜひお返事いただきたいことは、わたしの奇妙な性癖、嗜好についてのことばなのです。あなたはわたしをどうお考えになつていますか？、あなたは女性の蛙腹に、妊娠した女性の太い腹に、どんな興味をお持ちですか？。たった今、わたしが証明してさし上げると言ったそのことを、もう一度直接にあなたに聞いて、たしかめてみないではいられないのです。あなたの口から言わせてみたいのです。くだい女だ、と思し召されるかも知れませんわね。

それと、もし仮りに（本当に仮りに、の話ですが）わたしが辻村さまの前に「責めて下さい」と体を投げ出したとしたら、あなたはどのような方法でわたしを責めて下さいますか？そのこともぜひお聞かせいただきたいと思えますわ。

辻村さま——

案の定長いお手紙になってしまいました。思いのまま、ありのままを順序もなく書きつ

らねて、さぞお読みにくかったことと存じます。中には失礼なことを書いたかも知れませんが、お手紙を差し上げたことが、辻村さまにご迷惑でなかったことを、ひたすら念願して、筆をおきます。

うれしいお返事を心からお待ちしながら

いつまでもあなたの

京子より

辻村隆さま みもとに

追記——

このお手紙を書いてから「奇譚三十九夜」を読み返してましたら、第十八話に、伊藤晴雨さんの、二回目の奥さんの臨月の妊婦の逆さ吊りの写真のことが出ていました。追加しておきます。

……上半身裸体で、野外での逆吊しの写真ですが……膨らんだ腹部の低下からか、腰から下、白布で蔽った部分は異常に歪曲しているのです。……（七月号）

京子は残念ながら、まだその有名な写真を見たことがありませんので、ぜひ一度誌上に紹介して下さいませ。



## 羽村京子さんに贈る

## 「クリスティーラ讃歌」

辻村隆

京子さん——

心易く、こうお呼びする事をお許し下さい。

編集部から、私の処へ転送されて来たお便りを拝見する迄は、私にとって貴女は奇クの特異な一女性として所詮高額の花の存在として近づき難いものとしか感じておりませんでした。それが……。

貴女のお便りを一読するに及んで、かくも私の熱心な支持者である事を知り、本当に心から嬉しく思いました。

貴女が辻村隆の支持者であります様に、何を隠しましょう、私も亦京子さんの熱心な支

持者であったのです。

その事が、不識不知、『蛙腹』という、貴女が創造されたウ、マイ言葉を不用意にも無意識のうちに使うようになっていたのです。

二十七年の九月号に処女作として発表された『狂い咲くカンナ』を読みました時、私はその描写の大胆さ、且周到な計画の許に書かれた、奇ク始まって以来の未踏の新分野に、心より驚嘆したのです。

京子さんが書かれる以前にも、恐らく浣腸愛好者は随分とおった事でしよう。併し誰一人として率直に、これを筆にしたものはあり

ませんでした。勿論、私とてもその一人に過ぎません。

貴女の『狂い咲くカンナ』が発表されて以来、まるで堰をきったように、続々とクリスティーラ（浣腸）やアーヌス（肛門）に興味をもつ人々のエッセイが輩出したのです。

謂わば京子さんはクリスティーラの先駆者でもあるわけです。

そんな京子さんに、私は今更の如く、尊敬と、深い愛情を覚えずにはいられません。

貴女の肉筆のお便りに接したその刹那、まるで私は、初恋の人にも巡り合ったような、



たまらない懐かしさと、嬉しさと、限らない  
歎びに心を踊らせました。

京子さんに善良な良人があったとて、又、  
お二人の母親であったとしても、私の心の奥  
深く、深海魚のように潜行していた、秘かな  
思慕は決して変らないものと思います。

斯くいう私とて、度々誌上で申上げている  
通り、愛すべき女房にかしずかれ、慕いよる  
子供に取巻かれている、極く平凡な市井の一  
亭主に過ぎないのです。

奇クに初めて投稿したのが昭和二十二年。  
それが、爾来十数年、折ふしに書く雑文が、  
今では奇クと切っても切れぬえに、となつて  
箕田氏や塚本氏とも胸襟を開き、時偶にはモ  
デル達と撮影行を共にし、訪れる同好の士  
と語り合い、獵奇を求めてアブを探求する様  
に変化していったのです。

私のアブニストとしての性格は、奇クの変  
遷と共に軌を一にしていったのです。

奇クが緊縛を求めれば、緊縛を書き、嗜虐  
を、責めを、プレイを懲通すれば、好みに合  
ったものを書く、そんな順応性が、いつしか  
私自身を自他共に許すサジストへと培かつて  
いったのです。

京子さん——

事実、クリスティールへの誘いは、貴女  
によって開眼されました。それからというも  
の、浣腸というと、京子さんを連想せずには  
おれなくなったのです。

私のクリスティールへの、本格的な戦いの  
開始は、拙作「猥らな虫」によって火蓋を切  
りました。それからというものの、「奇譚三十  
九夜」でも御存知の通り、手を変え、品を変  
えクリスティールは、私の文中に出没する様  
になったのです。

絶えず意識裡にある京子さんの事  
が、ついつい私の文中にも顔を覗か  
せた結果、思わせ振りの私の拙ない  
文に、貴女が心を動かされたとすれ  
ば、この私は、何と罪深い男であつ  
た事でしょう。

× × ×

京子さん——

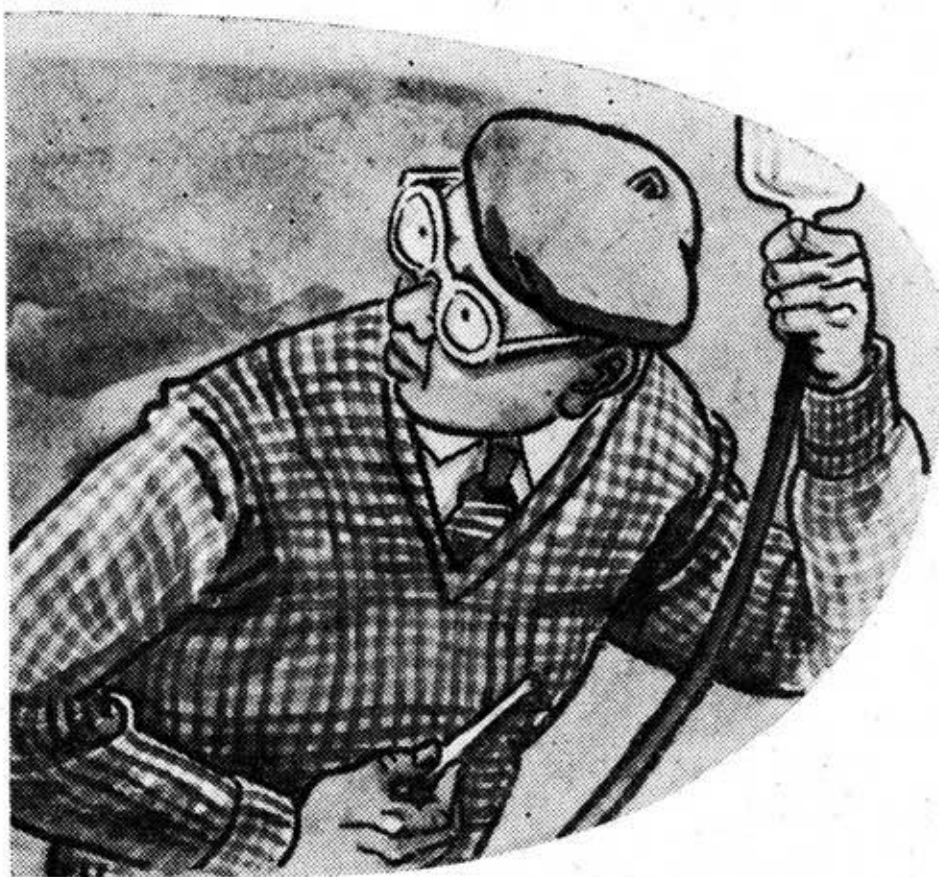
貴女は、私が女性の蛙腹や妊娠し  
た女性の太い腹に如何なる興味をお  
持ちですかと訊ねておられますね。  
私はこれに対して、貴女にお答え  
すべき義務があるようです。

とっておきの秘材として、未発表  
のものです。私は貴女が言及して

居られる東浦ひかるに、カメラを捨てて、再  
三度浣腸を試みた事があるのです。

この事は、何れ、機を見て書くつもりでし  
たが、東浦さん自身、みづから浣腸を求めた  
(求める振りをした?) 癖に、これを文にす  
る事を、堅く拒否していたからなのです。

これは彼女にとっても、単なる責めや縛り  
のポーズではなしに、厳然たる事実であるか  
らなのでしょう。浣腸の行為自体を書かれる





事が、東浦さんにとっては、自分の恥かしい性癖に触れる事を恐れての事だったので。

東浦ひかるに実施したクリスティールの有様を書く前に、私の親しい友人のデーターを茲に掲げましょう。

私の切なる依頼で、婦人科のK氏はクリスティールのデーターをとってくれました。

通常ギネの場合、子宮手術、脱腸、卵管結索等の場合に、五〇〇ccの高圧浣腸を行ないます。液は濃度の高い食塩水（偶に石鹼水の場合もあります）です。これは速やかに体液を吸収して排泄を促進さす効果があるからです。更に直腸に刺激を与えて、お産を迅速ならしめるため、分娩直前の妊婦には必らず浣腸を行います。これも濃食塩水五〇〇ccの高圧浣腸で、何れもイルリガートル使用です。イルリガートルのゴム管の先端にカテーテルを装置するのです。

京子さん――

K氏のデーターによると、一六五人のクリスティール実施によって、不快感を訴えた者一六人。快感を訴えた者八人。快感不快感のどちらでもない者二十三人。分らない者十八人。という結果でした。

次にクリスティール実施後、一分以内に、

直ちに排便に行った者三十九人。一分―三分で行った者七十六人。四分―六分で行った者二十五人。七分―八分で行った者十三人。九分―十分で行った者六人。十分以上の者二人。失神、重症にて粗相した者四人となっています。

最後に、浣腸未経験で今回が初めての者十二人。既経験者一五三人であります。既経験者の内訳は

イチヂク浣腸	九三人
浣腸器の浣腸	一六人
イルリガートル	二八人
エネマシリンジ	二人
自家用具浣腸	九人
浣腸具不明	五人

となっております。

尚、既経験者の浣腸の用法の内訳は、

手術の際	十一人
痔疾による	十九人
ひきつけ	六一人
便秘	七三人
蟻虫搔痒	二三人
出産の際	十四人



直腸ガン 一人

不明（答なし） 五人

以上の通りです。最初の快感、不快感の返答は、恐らく、仮りに快感を覚えても、はつきりそうだと答える者は少ないでしょうから、このデーターは余り当てになりません。許容時間の問題は、出産婦の多い為、意外



に早い者が多く、十分以上は二名ですが、この二名に興味を覚えます。

既経験者のうち、自家用具浣腸と不明併せて十四人は多少、京子さんに近い人も存在するのではないでしょうか。浣腸の最初は、便秘、ひきつけ（大半は幼時の頃）等によって洗礼を受けますが、応答のない五名に、私は浣腸マニアも、或いは一人ぐらいいは交っているのではないかと、許容時間十分以上の者と照し合せて見て、妄想を逞ましくしたりしているのです。

データーが大変長くなりました。

京子さん——、私は東浦ひかるに、女性の蛙腹を試して見た一件を、少し焦らし過ぎたようです。

× × ×

東浦ひかるは、写真でもお気付きかも知れませんが、どちらかというと出腹の方です。

その日、私はひかるに知らせてありませんでした。が念頭からカメラをとる気持はなく、兼ねて一度試みたいと念願していた、クリスティーラを実施するつもりで、一式の用具を持参し、いそいそと出迎えるひかると共に、私達はいつもの応接間に通りました。

私はそこで、今日の目的がクリスティーラ

である事を初めて彼女に告げました。

ひかるは瞬間、勝手違いの、困惑した顔になりました。容易にうなづきませんでした。いざ本番となると羞恥と躊躇が、彼女の体内をかけ巡ったようです。

委細かまわず、私はとりあえずひかるをいつものように後手に緊縛しました。これが却って東浦ひかるの羞恥を捨てさせる、唯一の手段だと心得えたからでした。

彼女は目隠しをしてくれと私にねだりました。自分の浅ましい姿を見なくなかったからでしょうか。目隠しのついでに、私は猿轡もはめてやりました。

私は勝手知った彼女の家の台所の湯沸しに水を入れてガスにかけました。

生ぬるい湯が出来ると、食塩を入れて少し濃いめの食塩水をつくり、それを紐で上から吊り下げたイルリガートル一〇〇〇cc瓶一杯に注いだのです。ゴム管にはカテーテルを連結してあります。

私はひかるに、浣腸の姿勢をとらずと、水止めの金具を力強く握りしめました。

一〇〇〇ccの液は、約二分間程で、全部ひかるの腸内に充滿しました。

猿轡をといてやると、ひかるは深く大きく

呼吸を続けて、微かに苦しいわとつぶやきました。

もう少しの我慢だよ——。と私は更に約五〇〇cc程をイルリガートルに注ぎ、続けて注入したのです。

一五〇〇ccの液体によって、ひかるの腹は妊娠七ヶ月程に膨張しました。

注入を終った瞬間、しきりにひかるは便意を訴えました。

私は腕時計を見つめました。

三十秒——一分………一分四十秒——。

ひかるは急に、齒をガチガチ噛みならし、せき立てたのです。縄尻を掴んで、私はひかるを便所へ伴ないました。

大部分が排出された後も、眼に涙をためて、ひかるは立とうとしませんでした。残余が気持悪く体内に残って、それが、腸の蠕動を以てしても及ばぬ留置液となって、いくら緊張って見ても排泄されそうになかったらしいのです。

——下痢をしたあとの、渋り腹見たいだわ——ひかるは情なそうに泣き笑いの表情をつくりました。

私が縄をとくと、漸やく、ひかるは始末をしてトイレを出しました。



——もう一度やろうか——

——いやーッ。カンニンして……

ひかるは本当の悲鳴をあげたのです。

緊縛プレイのあと、私は再び、未練たらし  
く、エネマシリンジをとり上げました。

——いやよ。本当にいやよ。

ひかるは私の様子を怒ったようにいいまし  
た。私はようやくなだめすかして、ビニール  
の洗面器にぬるま湯をとると、エネマシリ  
ンジの一方を洗面器につけ、真中のゴムのふく  
らみを握って離すと、スポイトの役目をして、  
液はズズズと微かな音を立てて、そのゴム  
のふくらみに溜まりした。五〇〇ccを注入す  
るのに、エネマシリンジは、相当の時間を費  
やしました。厄介な作業の間、ひかるは静か  
にクリスティールし易い姿勢を、諦めたよう  
に保っていました。

× × ×

京子さん——

かくして私は、東浦ひかるに注腸（貴女の  
好んで使われる新語です）したのです。中四  
日置いて再び、クリスティールに憑かれて、  
私は貴女の謂う、空気浣腸を試みました。

これは自転車のポンプは少し不適當です。

最も理想的なのは、ゴム風船をふくらませる、

足踏み式の空気送り器です。風船をふくらす  
時、ゴム管の先にゴム風船を挿入し、足で踏  
むと、足踏管の丸い中袋が、円くふくらむの  
に比例して、ゴム風船は見る見る大きくなり  
ます。私はこのゴム風船によって、何回踏め  
ば、どの程度空気が入るかを試した上、東浦  
ひかるに對しました。

足踏器のゴム管の先端に、イルリカートル  
の、水止めの先についている黒いエポナイト  
の挿入具をしっかりと嵌め込み、勢いよく、  
足踏器をふんだのです。ゴム風船に比して、  
体内への空気の送入は可成り力が要ります。

ひかるの腹は蛙腹にふくれ上りました。私  
の玩具の、吹けば誰もが簡単になるラッパを  
逸早く、ひかるに装填しました。

勢いよく吐き出してご覧——。

私の声につられて、ひかるは顔を真赤にさ  
せたのです。場違いの軽やかな音色が響き渡  
った事はいふ迄ありません。

ひかるの人格を無視した試みも、彼女なれ  
ばこそ、私の意の儘に、すべて易々として協  
力してくれたのです。（このシーンはカメラ  
におさめました、恐らく発表出来るシロモ  
ノではないでしょう）

京子さん——

私はこのように、蛙腹に對して、人並以上  
の研究心と興味をもっているといったら、貴  
女は果して満足してくれるでしょうか？

奇くは、サド、マゾ、クリスティール、ア  
ーヌス、フェティズム、それに切腹、女装、  
禪、女斗美と、実に多種多様です。

大抵の事は実行に移した私にしても、禪、  
女斗美、切腹、女装はお手上げです。MSプ  
レイについて、クリスティール——これが私  
の好むところだと申し上げれば、貴女はお氣  
に召すでしょうか。

× × ×

京子さん——

貴女が、仮りに「責めて下さい」と体を投  
げ出されるなら、私は一議なく、クリステ  
ールプレイを実施するでしょうね。

貴女を責める方法——。そうですね。

最近こんな用具のあるのを御存知ですか。  
ガソリンや石油を一斗缶から、瓶や石油ス  
トープに注入する場合、ビニールで出来た缶  
の口蓋に取付ける注入器のある事を——。

石油缶の蓋からホースを缶内に入れ、弁が  
あって、それを二、三度握ると、圧搾空気と  
弁の作用で、缶内の油が弁から出たもう一本  
の管を通して流れる仕掛けになっているので



す。止める時は、弁の上のキャップを廻して空気を送ると、勝手に止まります。

京子さんへの場合、

石油缶を高く吊り上げ、この流入ポンプをとりつけて、ポンプの先端に、更に長いゴム管をつないで、充滿した一斗缶と貴女とをポンプによって直結させる。

液はとめどなく、貴女の体内に移行するで

しよう。その為には、その準備として、貴女の腸内をすっかりカラっぽにしておいて、液で腸内を充滿させるのです。

蛙腹なんてものではなく、風船腹にまで追及したいと思います。

そうしておいて、両脚を縛って逆吊りにする——。どういう結果になるか、これは羽村京子と辻村隆の対決した時に始めて、イエス

かノーかはつきり答えが出ると思います。

京子さん——

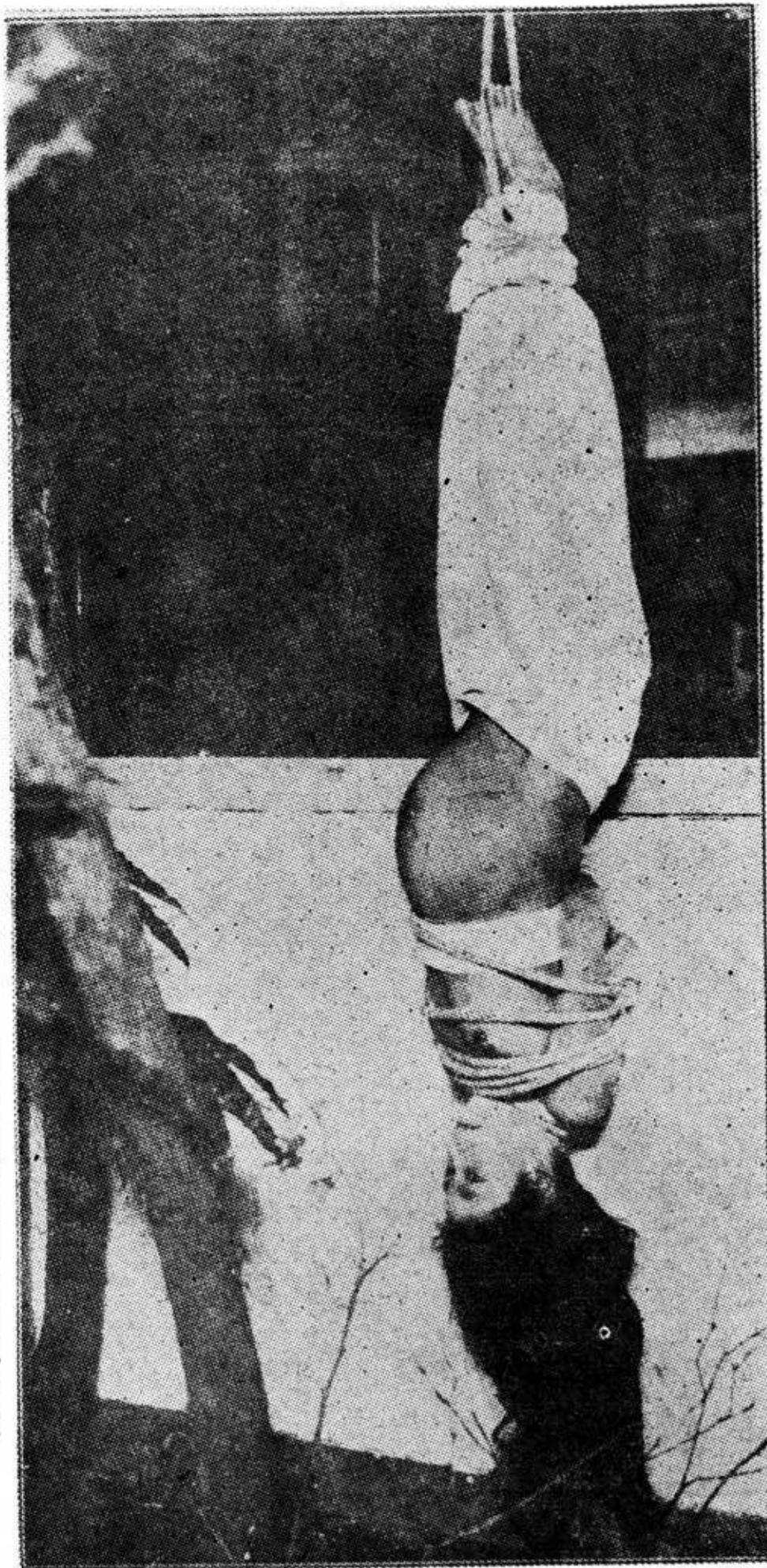
貴女の仰言る通り、私も妊娠した女性の、それも緊縛に興味を感じます。

妊婦を縛って逆吊りにした。伊藤晴雨の写真は、この一文と共に編集部に送りました。この文中に掲載されると思います。

いうは易く、撮るは難し。それが妊婦の緊縛写真です。機会があれば、どんな無理をしても一度是非撮って見たいと存じます。

何しろ胎動する体を縛るのです。余程の決意と、その相手の配偶者の男性の寛容がなければ実行出来得ないのです。

奇人、伊藤晴雨すら、それは彼の



故伊藤晴雨氏撮影の写真

(変態資料誌第四号所載のもの)



×